

白紙

明治 35 年

1902.09.20. 晴

午前七時、家を出て、新橋、見送り人、渚の如し。八時三十分発車、九時八分、横浜着。旅館津久井屋に寄り、父上・吉武・島岡・川口重吉氏と酌む。十時、阿波丸に乗り込む。船室番号 76。十一時半、見送り人と分かる。十二時出船。天気、晴朗、海、鏡の如し。伊豆大島近傍にて、無数の鯨の噴潮を見る。大島の噴火、明瞭なり。噴煙、甚だしからず。眠、十分ならず。屢目覚む。

1902.09.21. 晴

昨夜、遠州灘を越え、黎明、既に紀州沖を航し、遥かに鳥羽岬の一角を認む。天気晴朗。海、極めて平らなり。正午、由良海峡を至て、午后三時神戸安着。直ちに上陸。大坂に至り、花房に宿泊し、千原楼に酌む。此日、お重及び千代崎へ手紙を出す。師団長を訪問せしも、定期検閲にて伏見に行けりと。

1902.09.22. 雨

午前八時、梅田発にて稲荷に至り、第三十七連隊にて、小川中将・安東少将・其他知人に会し、次いで、工兵大隊に赴き、久邇宮殿下を訪問し、十一時半、稲荷発。大谷に下車し、第九連隊を訪問す。連隊の将校、冷淡なる、驚くの外なし。内藤將軍、帰省中なるを以て名刺を託し、竹清宿泊。
 XXXXXXX[消去]。天気、都合悪しく雨衣を有せざる為め、訪問の時、丸濡れで大いに困却す。

1902.09.23. 半雨

午前八時半、馬場発。途中、坂田嚴三監督部長に会い、共に神戸まで来たる。汽車中にて大いに酌む。正午過ぎ、須磨に至り、椿を訪問し、直ちに去りて、波多野將軍を訪問し、更に飲む。椿は、一列車後れて余を波多野の宅に訪問し、午後七時過ぎ、明石発。須磨にて椿に別れ、三宮に下車すべきを、眠りて乗り過ごし、住吉に至りし時、恰も下り列車の来たるに会い、倉黄転乗し、大急ぎの為に、三等に乗れり。午後八時過ぎ、船に返る。田村、既に帰り来たり。

1902.09.24. 半雨

午前上陸して、鍵鎖を買う。中川・山崎、来たり。真鍋將軍、中川を送り来たる。午前十時、出帆。内海の航行にて、船、極めて静なり。

1902.09.25. 半晴半曇

午前四時、馬関着。検疫の為め、馬関に入るを得ず。午前八時、始めて門司港に入る。九時過ぎ、門司上陸。田村・山崎・徳永諸氏と枝光(若松)[丸括弧]製鉄所に至る。中村長官自ら、案内の労を取り、昼食の御馳走を受く。鍊鉄の延長、撃鉄の製作、鉄を鍊る、飴の如し。規模宏壮、^{やや}稍、目を驚かすに足る。午後四時、辞して帰途に就き、六時半、船に至る。[改行]

須知少佐より、手紙来たる。^{ドイツ}独乙公使・須知・クロッケ・大久保中将・大谷少将及び千代崎に手紙を出す。

ページ：3

1902.09.26. 曇 午前 時々雨降る

午前七時半、馬関出帆。上海に向かう。玄界灘、案外静なり。

1902.09.27. 半晴

^{やや}浪、稍高し。球突き遊びをなす。

1902.09.28. 晴

黎明、揚子江口に達す。水濁りて黄色をなす。午前九時、碇泊場に達し、小蒸気船にて揚子江の支流十^{かいり}四 涇 を航行して、上海に達し、東和洋行に宿泊し、午後、南京街・支那公園・英公園等を遊見す。市街清潔、商業^{いんぶ}殷富。普通支那街の如くならず。車馬の往復、織るが如く、家屋の構造等こらするも、日本の銀座に優る、数等なり。久し振りにて日本料理を食す。須知少佐に手紙を出す。千代崎へも手紙を出す。

1902.09.29. 晴

守備隊長稲村少佐、来訪す。午後四時半、波止場に至り、小蒸気にて本船に^{かえ}還る。午後九時半、出帆す。

1902.09.30. 晴

海、極めて静なり。玉突きをなす。

ページ：4

1902.10.01. 晴

海、静かなり。記事なし。

1902.10.02. 晴

海、静なり。午後三時、香港着。直ちに上陸し、市街見物をなし、煙草を買う。夕刻、旅館松原館に至りしも、不潔。食うに堪えず、香港ホテルに行きしも^{中川・中山と}、七時半にあらざれば、食事をなさしめず。

^{すなわち}即、去りて、ヴィクトリヤホテルに行き、晚餐を喫す。^{やや}稍、不潔にして、日本の居酒屋に似たり。香港の壮麗は、又、上海に^{まさ}勝る。

1902.10.03. 晴

午後、上陸し、A bit of British Empire を買い、一行と、別路を取りてピークに登る。眺望絶佳、登山者のためにインクラインを^{もう}設く。贅沢なりと云うべし。而も、其^{しか}傾斜、^{その}急峻。^{しばしば}屡 心臓を寒からしむ。山上にて一行の、道に迷いて^{おく}後れ来たるに会し、共にピークホテルに^{おもむ}赴き、麦酒を求むれば、殆んど腐敗に近くして、飲むべからず。^{すなわち}即、ラムネを飲んで、山を下り、中川と共に清風楼に晚餐を喫す。千代崎・忠一・高橋へ手紙を出す。

1902.10.04. 晴

午前七時、香港を発す。海静なり。

1902.10.05. 晴

正午頃の暑気、^{やや}稍、強し。記事なし。

ページ：5

1902.10.06. 晴

午前十時頃、右方に交跡支那を望む。^{コーチシナ}海、静なる、^{さく}昨の如し。洗濯物(1.)[数字・点あり；行外追加](白シャツ・縮シャツ・袴下・靴下)[丸括弧]を出す。

1902.10.07. 晴

天気、静穏。海、油の如し。記事なし。斬髪す。

1902.10.08. 午前雨 午後半曇

^{やや}風、^{しか}稍、強し。然れども、海、極めて静なり。赤道直下に近づくに従い、暑気、益々、募る。^{しか}然し、海上は比較的涼しと云[う]。午後、A bit of the British Empire を故郷へ送る為めの小布袋を造る。午後、霧深し。薄暮に至りて、船、遂に^や進行を止む。

1902.10.09. 晴

午前五時半、船、進行を始む。霧あり。^{マレー}七時、馬來半島を望む。海峡に入りて、海、油の如し。午前十^{シンガポール}時、新嘉坡着。午后、上陸。事務長の案内にて、Public Garden(植物園)[丸括弧]及び博物館を見る。植

物園は、但、漸く設計を終わりしものの如く、別に見るべきものなし。只、熱帯植物・椰子竹等、其他の勢い能く繁茂するを見るのみ。植物園に大蛇・コルコダイル・猿・猩々・孔雀(尾を広ぐ)[丸括弧]・猶等の動物あり。博物館には、象の頭骨・コルコダイルの乾造・鯨の顎骨(長さ一間半以上)、其他標本的動物の乾枯せるもの、数多を見る。午後五時半、船に帰る。[改行]

初め、船の新嘉坡に着するや、土人、小舟に乗り来たりて、錢を海に投ぜしことを乞う。投ずれば、即、水中に入て、之を捉え来たる。

ページ：6

中々巧なり。男女共、真の黒人、其性を鑑別し難く、而も、皆、眼に血色あり、死にたる鯛の眼の如く、舌は多々真紅色にして、恰も蛇の舌を出すにも似たり。

1902.10.10. 晴 午後驟雨

正午、上陸。パイプを買い、次いで、馬車にて Malay Street に赴き、中川・中山と第二十五番に酌む。麦酒一本、価、一円。午後七時、船に帰る。千代崎へ手紙を出す。香港の写真を送る。

1902.10.11. 霧あり 午後小雨

午前、馬來人の舞人、来たる。午后四時、出帆。赤道附近、太陽赤くして朱盆の如し。千代崎へ新嘉坡の写真を送る。新嘉坡湾口、樹木海中より茂生す。

1902.10.12. 霧あり

海、極めて静なり。暑気甚だしからず。(昨日)[行外追加]正午、馬來人の喫食を見る。大瓶飯を煮三十人分、鉄葉様状の大皿に手掴みにて飯をばら〜にせし後、椰子杓子にて飯を盛り、カレー様の黄汁を注ぎ、魚肉二尾位を菜とし、四人一皿に集まりて、手掴みにて之を食らう。指にて飯を口の中に入る。毎々、残余、指に附着せし飯を皿中に投ず。不潔、見るに堪えず。午後四時出帆。[消去]

1902.10.13. 晴

午前七時、船、卑南に着す。直ちに上陸。植物園に至る。園に瀑布あり。卑南水道の源なりと云う。夜八時、上陸して、卑南の夜景を見る。別に記すべきことなし。

ページ：7

1902.10.14. 晴

午前 10 時、上陸して、千代崎へ手紙・画端書を送る。午後四時、出帆。本夜、日本料理を食す。

1902.10.15. 半晴

海、極めて静なり。第一回洗濯物帰り、第二回洗濯物(浴衣・縮シャツ・袴下・襟・カップ)[丸括弧]を出す。

1902.10.16. 半晴

午後、^{にわか}驟雨、来たる。暑気、強からず。海、極めて静なり。

1902.10.17. 晴

風、^{やや}稍、^{しか}強し。併し、浪、割合に高からず。第二回洗濯物、還る。

1902.10.18. 晴

海、極めて静なり。午後五時、遙かに、我が軍艦、浅間・高砂の、英国より帰るに遇う。距離、^あ稍、^{やや}遠くして、^{これ}明了に之を見るを得ざりし。午後八時、^{セイロン}錫蘭島の南角を過ぐ。海、極めて平らなり。

1902.10.19. 晴

午前六時、^{コロombo}古倫母に着す。市街の体裁、更に^{ベナン}卑南に劣るものの如きも、荷物を輸出するの多き各船、常に^{ここ}此処にて満載せざるはなしと云う。港は、防波堤を以って造りしに過ぎず。昨日の軍艦は、浅間・高砂にあらずして、同艦は兩三日後に当地に着する予定なりと云う。[改行]
印度及び^{マレー}馬來人種の容貌は、日本五百羅漢に^{そのまま}其俚なり。[改行]

ページ：8

午前九時、印度の手品師、来たる。茶碗芸・煙吐き・物隠し・種より樹生す(袋に砂を盛り)[丸括弧]。中々巧なり。彼は、「^{ママ}コブラ」[かぎ括弧]とて猛毒の蛇を携え来たり。^{これ}之を使う、自由なり。^{この}此蛇は、頭を掲げるとき、頭を扁平にす。^{その}其猛毒なる、^{ただ}噛まれるれば直ちに死す、と云[う]。[改行]
^{この}此地にて、印度特有の船を見る。船の長さ、^{ばか}三間斗り、幅二尺に足らず。^{これ}之に乗るもの、^{またが}船に跨つて、^う足を両舷に垂るるを得べし。船より二条の^{もくかん}木桿を一側に出し、^か桿頭、^{またが}鯉節形の木桿を装着し、^{たも}中心を有ち、決して覆らずと云[う]。[改行]

午前十時、我が軍艦、浅間・高砂の、^{コロombo}古倫母に着す。着前着後、礼砲を放つ。徐々、阿波丸の側に碇泊す。異境、我が艦に^あ遇う威、云うべからざるものあり。^{ひるしょく}午食後、^{ただ}直ちに^と両艦を^{ひがし}訪い、西川・東・^{ひじかた}土方・^{その}松原、其他海軍将校と、杯を挙げて閑談す。帰途、西川一行を写真機で撮影す。船にて横浜洪水の話聞く。[改行]

午後四時、艦を辞して上陸し、^か馬車を^{その}駆けて市街を散歩す。博物館にて、二千年前の石造人体・宝石・^{やや}豹・^{シンガポール}象・毒蛇・大亀等を陳列す。其規模、^{やや}稍、大にして、新嘉坡の比にあらず。市街は、不潔にし

て、臭気^{はなは}甚^やだし。市場の如き、土人の群集、殆んど車を行^{かたい}るべからず。乞丐、極めて多く、人気^{にんき}、極めて悪^{はしぶね}し。端舟賃^{けんごう}も、一点より一点に至る価は、十五銭。馬車の如きも、価を定めて乗るも、後に至りて、更に多きを乞^{かくのごときわづらい}い、喧囂、堪ゆべからず。多くは、逐一、更に多きを与うるに至ると云う。我が一行は事務長の周旋にて、如^{せきしゃしよく}此煩^いは、なかりし。土質、赤土にして、池の水の口も常に赤く、屋瓦、赤赭色^いにして、遠見、実に暑きを加うるの感あらしむ。[改行]

午後六時、西川・土方・東・松原四氏来訪。共に晚餐を喫し、甲板に出づれば、海軍将校の、更に来訪するに

ページ：9

会し、共に麦酒^くを酌んで放談す。午後九時半、客、皆辞し、去る。

1902.10.20. 晴

午前六時、Kandy の案内者、来たる。昨日約束せるなり。一行、田村・中川・宇垣・中山・徳永・副島に余の七人、朝食、僅かにオムレツ一皿を喫して、発程^{はってい}す^{一人一磅の食費}。Kandy に至る行程、七十四哩^{マイル}。

Kandy の標高、約千七百^{フィート}呎余。途中、英宣教師チャップル氏と同乗す。十一時、Kandy 着。直ちに Queens Hotel にて昼餐を喫し、馬車にて湖水を一周し、釈迦寺に至る。古錫蘭王^{セイロン}の城址なりと云[う]。釈迦の齒塔あり。一年一回、祭日^{かいひ}に開扉するのみにて、余は皇帝^よの命あらざれば開扉せず、と云[うを]聞^{セイロン}く。錫蘭は、初^{はじめ}、和蘭^{オランダ}に属し、中古、英、之^{これ}を奪うなりと。而して、英和蘭戦争の時、真の釈迦の齒^{これ}は、蘭僧^{すこぶ}、之を海中に投ぜりと。現在の齒は、頗る巨大なるものにて、決して実物にあらずと。塔の周辺、地獄極楽の面^{えが}を畫く。浮風流、記するに足らず、釈迦塔の一側、書籍室あり、大仏經を有す。中に椰子樹葉にボン字を書せるものあり。稍^{やや}、殊奇とするに足る。釈迦塔の前面、釈迦墓あり。白亜塔なり。塔側、大菩提樹あり。樹中、蛇あり、満月の夜、穴を出ると云^いう。出でければ、土人^{これ}、之を礼拝して、神使なりと云うと云[う]。次いで、植物園に至る。Traverlers tree & Bread tree あり。旅人樹は、葉に羽形をなし。其含有する水量は葉数を以て之を量り、一葉、二クオート^{八合斗り}の割合なりと。パン樹^{その}は、其葉を食すれば、優に生命を繋ぐに足ると。新嘉坡・卑南^{シンガポール}にては、人力車は、皆、支那人^{ベナン}、之^{これ}を曳き、土人は馬車を駆りしも、此地^かにては、土人^{この}、人力車を曳^ひけり。此地^{この}には、汽車・電車あり。交通、中々繁頻なり。汽車中、暑気強く、殆んど堪ゆべからず。椰子果の水を飲^{やや}む。稍、甘くして、好味なり。途中、家の河中に飲む

ページ：10

を見る。[改行]

午後六時半、帰船す。西川・東^{ひがし}、来訪し、共に晚餐を喫す。本夜八時より、浅間艦にて講話を催すとして招かる。山崎・徳永兩人、行けり。他は、今日の疲労の爲め、辞して行かず。東大尉、更に福島將軍の看護に^{おもむ}赴く爲め、本船に来て宿泊せり。

1902.10.21. 晴 夜雨

千代崎へ手紙及び古倫母^{コロンボ}の写真帖を送る。[改行]

午前七時、浅間・高砂両艦出帆し、昨日入港せし佐渡丸、^{また}亦、出帆す。午後二時、東^{ひがし}大尉・佐藤軍医・飯島看護長、転船して、^{ボンベイ}盆^つ買行に就く。午後四時出帆都合なりしも、荷物の都合にて、六時半出帆す。

1902.10.22. 午前雨 後 晴

海上平穩。陸は見ず。暑気を覚えず。

1902.10.23. 晴

海上平穩。本日より、甲板上の遊戯を始む。午前、Minicoy 島を右舷に望む。珊瑚島なりと云[う]。椰子、茂生せり。

1902.10.24. 晴

平穩。記事なし。

1902.10.25. 半晴

海上平穩。記事なし。

ページ:11

1902.10.26. 半晴

海上平穩。記事なし。風邪の気味あり、服薬す。

1902.10.27. 晴

海上平穩。本夜、日本料理を食す。右舷に、Socotra 島を望む。

1902.10.28. 晴

黎明、左舷に^{アフリカ}阿非利加大陸を望む。龍巻の一斑を天空に見る。日没、太陽、赤くして朱盆の如し。没後、天空、^{あたか}恰も^{こと}火事場の遠望に異ならず。紅海の名、此より起こるか。暑気、^{やや}稍、強し。午後八時、左舷に汽船を望み、煙大信号をなす。^{けだ}蓋し^{しか}郵船会社の河内丸ならんと想像せしを以ってなり。然るに、^{ドイツ}河内丸にあらずして、独乙メール船なりし。

1902.10.29. 晴

午前八時、欧州より帰航の河内丸に行き逢う。黎明、右舷に^{アラビア}亜刺比亜を、左舷に^{アフリカ}阿非利加を望む。正午頃、無数の魚群(^{かつお}鰹なりと)[丸括弧]、水面に澆刺するを見る。午後六時、紅海の入り口を過ぐ。右岸は^{アラビア}亜刺比亜にして、左に英領の島あり。兩岸ともに砲台あり。数個の人家を見るも、全島(右方の陸も^{また}亦)[丸括弧]、草なく木なく又水なくして、純然たり。赭地なり。只、岩石の巖々たるを見るのみ。正午頃より大いに暑気を加う。海上平穩。此日、余と山崎は、デッキ・ビリヤードの最後の勝負に勝てり。

1902.10.30. 晴

海上平穩。風、暑し。^{のち}正午後の温度は、著しく高昇と聞く。^{もっと}尤も暑き時は、海水すら、九十度の温度を有す

ページ：12

るに至ると。紅海中に散在せる島は、皆、一様に^{しゃど}赭土にして、草木なし。^{アラビア}亜刺比亜・^{アフリカ}阿非利加砂漠の流^くれを酌むものか。島に灯台の番人あり。無人荒涼の境に在りて、如何に生活するならんと思えば、^{れんぜん}憐然の^{ほか}外なし。薄暮、涼風来たり。大いに^{そう}神気を爽にす。

1902.10.31. 晴

海上、極めて平穩。殆んど浪なし。日中、暑気、^{やや}稍、強なりしも、夕方より大いに涼気を増せり。

1902.11.01. 晴

海上平穩。昨日の如し。

1902.11.02. 晴

海上平穩。^{いるか}海豚、舷側に快遊す。^{これ}船長、之を射つ。^{あた}中らず。^{やや}同夕、稍、冷氣を覚う。途中、数多の島あり。皆、裸島にして、一も草木なし。

1902.11.03. 晴

天気晴朗。皇上の佳辰、常に拭うが如きの日なるも奇なり。朝来、大いに冷氣を増す。午前七時、^{スエズ}蘇士運河口に達す。朝、洗濯物(襦袢二・袴下一・襟一・靴下二)[丸括弧]を出す。本日は、天長節なれば、晚餐に盛宴を張りて、上等船客と共に万歳を奉祝す。[改行]

^{スエズ}蘇士運河の兩岸は、全くの砂漠にして、所々に樹木の生茂するを見る。駱駝の隊、^{ひとり}辺を荷を負うて前行するを見る。運河通行中に見るを得ると云う蜃気楼は、夜半、通過して、見るを得ず。

1902.11.04. 半晴

黎明、ポートセットに着す。上陸するを得ず。午前八時、出帆。大いに冷気を増す。朝、双眼鏡を窃取せられ、

ページ：13

午後、荷物の整頓に着手すれば、第一号行李のこうり しめかわ革一条を窃取せらる。何かのむくい酬ならん。海上平穩。千代崎へ手紙を出す。

1902.11.05. 半晴 にわか 驟雨

海上平穩。午前、驟雨。午後六時、又、驟雨、烈風と共に来たり。雲、海上をはらば匍う。薄暮、クリト島を過ぐ。

1902.11.06. 半晴 驟雨

黎明、龍巻を左舷、天の一隅に見る。形、弓形にして、細し。つ次いで、驟雨・烈風来たる。正午、驟雨、又、来たる。

1902.11.07. 晴

黎明、伊太利をイタリア 舳頭へさきに望む。正午、伊太利と西々里島との海峡を過ぐ。即、Reggioすなわち(伊太利都市)[行外追加後、消去]と Messina(伊太)[行外追加後、消去]との海峡にして、Messina は、シシリー島中、もっと尤も繁盛なる市なりと云う。同市湾頭、独乙船ドイツの豪州に赴おもむかんとするもの、途、火器みちに遇うて、同市に寄港するを見る。炎、焰天えんてんに漲みなぎれり。如何に成り行きやらん。地中海の灯台なりと聞く。Etna 山は雲に隠れて、噴火の様様を見ることを得ず。伊太利及びシーリー島は、殆んど砂山にして、樹木、僅かに生茂す。河川は、数多あるも、傾斜、極めて急峻。皆、水なし。同海峡を過ぎて、午後三時、Stromboli 噴火島を過ぐ。目下、盛んに噴火しあるも、同島、麓、数多の人家あり。しこうして而メ、同島は傾斜、極めて急峻。崩砂、遠望。滝の如く、殆んど交通すべからざるものの如し。何処も棲めば都なるならん。何を苦しんで如かくのごとき此急峻の地に生活しあるや。晚餐に、日本食を喫す。

1902.11.08. 晴

海上平穩。午後五時、「サルジニヤ」と「コルシカ」との海峡を過ぐ。

ページ：14

明治 35 年

1902.11.09. 半晴 時々雨 [日]

黎明、遂にツーロン港を望む。海、やや稍、荒し。正午、食事。マルセーユ港に着す。港口、砲台あり。港は、防波堤を築け、その其設計の、状、且つ、整頓せる、殆んど比なしと云う。今日は英皇帝の誕生日なれば、午前十一時に、英人、シャンパンを挙げて祝意を表せり。[改行]

正午、林庄一氏、来たり。一行を伴いて、博物館・公園・動物園等を散歩し、夜七時、グランドホテルにて晚餐を喫し、次いで、日本寄席的の寄席を見物す。庄一氏、頗る親切。而も、マルセーユの旅館・馬車屋等に、不当の利益の貪られべき様世話する故、彼等に悪まること、甚だしと。現に、余等一行の、船を去る時も、馬車は防波堤上に来たり居りしも、余等は、之に乗らざりしかば、彼等は、林氏を「ドロボー」[かぎ括弧]なりと叫べり。林氏の義心、感ずるに堪えたり。[改行]博物館には、彫刻品・油絵等の大作あり。目を驚かすに足るもの多し。動物園は、日本上野のものに多く勝らず。市街は、町幅、広からず。石を敷けるも、欠損せる所、多し。家は、多く五六階。市街、至る所、殆んど電車を通す。運行、極めて頻繁。稍、危険なるが如きも、小児の如きは、一切市街に遊戯しあらず。国風なるが如し。寄席には、唱歌・音楽・軽業あり。双脚者の双腕、百斤の重量ある鉄の塊りを投げ、又、之を口にて巾する等、怪力、恐るべきものありし。夜十二時、林氏、余等を送りて、船に至る。

1902.11.10. 晴 [月]

午前九時、Cook 運送会社員、船に来たり。次いで、林氏、又、来たる。午前十時、荷物を会社員に託し、船を辞して、有名なる[空白]寺に至り、此に撮影す。蓋し、林氏は、前日の約束によりて、器械を携え来たりしなり。此寺は、旧教の寺なりと。扁額、皆、難破船・病人、其他災厄に遇いし人々の、難を免れし礼の額のみ。耶蘇、其他

ページ : 15

師徒の偶像前、大蠟燭を点ず。大寸三尺に余るものあり。結構、皆、蠟石を以てし、天井・床、皆、細石を集めて斑紋をなす図を七年以前より記せしも、今尚、完成せずと。以て、其美の一端を知るに足るべし。午時、旧マルセーユ港直前の料理屋にて貝の酢漬けを食す。味、美なり。次いで、湾頭の高寺に登る。結構、前者に似たり。扁額、前者に数倍す。此寺に上がる為めに、Ascenseur を設く。傾斜 2-1 [2 横棒 1] を過ぐ。一見、寒きを覚うるの感あり。次いで、勧工場に至り、事務長・船医に送る為めに、煙草入れ及び手袋等を買う。勧工場の結構の壮、物品陳列の実、到底日本の及ぶ所にあらず。午後八時、停車場に至れば、荷物、既に到着しあるも、其整理等の時間、不足せる為め、予定の如く事を了するを得ず。伯林行きのものは、一部は伯林まで、一部 Köln まで。而して、余は、維納までの切符を依頼し置きしも、巴里までの切符より外、求むるを得ず。而も、荷物は、二三列車後れて発送する如き不結果を呈せり。午後八時五十分発車す。千代崎へ端書を出す。

1902.11.11. 晴 [火]

汽車中、案外 ^{あたた} 温 ^{もつ おお} かし。巴里に近づくに従って、野菜物を玻璃器を以て掩うを見る。午前十一時、巴里着。久松大尉・高塚大尉、来迎せり。直ちに馬車を駆けて、諏訪ホテルに投宿し入浴す。浴価約六十(二)[行外追加]銭。午後三〇[二を〇に修正]時頃、白井少佐来訪。共に昼食・入浴・晚餐を喫し、夜、共に市街を散歩す。宏壮、驚くに堪えたり。途、地中電車に乗り、最後に ^{マ マ} Orimpia ^{よめ} に至る。婦の男を捕らえんとするの状、巧笑、^{べん} 眇 ^{しか} たり。而も、其直接法にして人に恥じざる人、^{これ} 之を巴里の花と云う。^{し び} 至美、中途陋見。高枚の然をしける所か。女は、髪・眼、黒く、色、白く、日本的美人多し ^{此家の地下にあり}。午前二時、帰館す。此日、宇垣の妻君危篤の電報あり。

ページ：16

巴里の道路は、木にて造りし所及びベトンにて作りし所は、佳なるも、切石を敷き詰めん所は、馬車を馳せるに ^は 裏音 ^{ごうおんはなは} 甚 ^{すこぶ} だしく、反動劇甚。頗る、乗者に快ならず。家屋の構造は、目を驚かすもの多し。

1902.11.12. 半晴 [水]

午前九時、久松・高塚両君、来たり。共にエッフェル塔に上る。高さ三百米。前年万国博覧会の遺物なり。此日は、^{この} もや強く、遠望するを得ず。塔は、^{ことごと} 悉 ^{もつ} く鉄材を以て造り、Ascenseur あるも、目下は使用せず。千代崎へ手紙を出す。蓋しエッフェル塔にて 10 サンチームを投じて得たる旅行はがきなり。午後、馬車を雇うて、一行及び白井・久松等と共に、ナポレオン墓・ルクセンブルク公園・博物館に至り、油絵等を見、^つ 次いで、公使館に立ち寄り、^へ □□を至て、帰館。午後七時、久松の案内にて日本料理を餐座せられ、次いで、裸に至り、更にオリンピアに立ち寄り、四階楼上に残る。全く、白井に騙されたり。

1902.11.13. 半晴 霧深し [木]

午前五時、帰館。九時、島内中尉の案内にて、ベルサイユ見物し、午後五時、帰館。午後九時、田村等を送り、更に白井・島内と共に市街を見物す。

1902.11.14. 晴 [金]

午前九時、島内、来たる。諏訪主人不在の為め、^{おく} 万事手後れとなり、^{そうこう} 倉黄、島内・久松・高塚と共に停車場に至れば、^{その} 其場所を間違えて、更に真の維納行きの停車場に至り、^{ウィーン} 辛くして発車し、^{おく} 後れざるを得たり。白井少佐、^{この} 此時、来たる。夜半、新婚旅行の夫婦に^あ 遇う。接吻の醜態、見るに堪えず。

1902.11.15. 半晴 薄昏、霧深し [土]

前日、仏独の国境、deutsch-Avrincourt にては、税関、容易に通過せしも、本日、午後〇時半、^{おう} 独塊の国境、Salzburg に^{おい} 於ては^{まさ} 将に大荷物を留置せられんとせしを、不完全の語学、用をなし、^{その} 僅かに其厄を

まぬが ウィーン ウィーン よだ
免れて、共に維納に到着するを得たり。午後七時十分、維納着の時は、霧深くして、依田少佐口出迎
みそこ
えを見損なうことを恐れ

ページ：17

まぬが
しも、難は免れ、依田及び肥田両君の出迎に遇い、依田少佐と共に、停車場にて晚餐を喫し、
ただ
直ちに
下宿 Perican Gasse 15 #14 に至る。午後九時半、武内少佐、来訪す。

1902.11.16. 半晴 日

よだ と つ
午前八時、武内少佐来訪。共に依田少佐を訪い、次いで、帰宿。午後二時、武内を訪うも、在らず。独
ウィーン と
り維納市を見物して、午後六時、更に依田少佐を訪い、Rest[au]rant に晚餐を喫す。帰宿すれば、三
回、武内少佐、来訪せりとのことを聞く。

1902.11.17. 半晴 月

午前九時、武内少佐を訪い、共に日用品の買物をなす。午前十一時、公使館に至り、吉田代理公使及び
よだ
夫人・肥田書記官に面会す。肥田・依田両君の依託物を渡す。午後二時半、武内少佐を訪い、明日より
く
語学教師の来ることを約す。午後九時、武内少佐、来たり、共にカフェに至り、十二時帰宿。

1902.11.18. 晴 火

ひるしょく しらみ
午前十時、語学教師、来たり。今日より語学を始む。午食後、虱征伐をなす。午後三時、武内少佐、
その まかな
来たり、帽子、其他の日用品を賄い、服外套を注文す。

1902.11.19. 半晴 水

すいくち この
午前、語学。午後三時、語学教師と共に、市街を散歩し、こうもり傘・吸口を買う。此日、時計の硝子
わ
を破る。手紙、五十本を日本其他に出す。

1902.11.20. 半晴 木

午前、語学。服屋、来たり、外套の仮縫を合わす。時計、直り来たる。午後六時、時計を返す為め武内
と あたか
少佐を訪えば、恰も、別嬪、少佐、尋ね来たり居り。若干時間、話しの後、遂に提灯持ちとなりて、彼
ただ また
の家に至り、少佐と晚餐を喫したる後、午後八時半、帰宅す。帰れば、直ちに、少佐、亦尋ね来たる。

ページ：18

1902.11.21. 晴 金

午前、語学。武内少佐、来たる。島内中尉より手紙来たる。

1902.11.22. 晴 土

午前、語学。午後一時半、武内少佐^{しよし}、来たり、共に書肆に至る。

1902.11.23. 晴 日

午前、依田^{よだ}少佐、来たり、次いで、武内少佐^つ、来たる。午後二時、武内少佐^{および}及大悪妻[消去]と共に、Sofien Alpe に至り、次いで、昼晚餐を喫して、帰宅す。時に、午後八時半。

1902.11.24. 晴 午前霧深し 月

午前、語学。午後、書肆^{しよし}に至り、書物を買う。フラックスマン会話篇・参謀官必携・地図二、文範。栗田より手紙来たる。

1902.11.25. 半晴 霧深し 火

午前、語学。午後、ドナウ運河に畔^{ほとり}迄散歩し、帰途、街道に焼き栗を買う。

1902.11.26. 雪降る 水

午前、語学。午後二時より、語学教師の都合にて、時間を折半せるなり。外套を持ち来たる。午後、散歩し、(武内少佐と共に)[丸括弧]本屋に至りて、書物の代価を払う。

1902.11.27. 霧深し 木

午前、語学。午後四時、武内少佐^とを訪う。

1902.11.28. 霧深し 金

午前、語学。後、教師と共に郵便局に至り、景色図を発送せんとせしに、「マルセーユ」[かぎ括弧]の分は可なりしも、巴里の分は過量の為め、小包にあらざれば、発送する能^{あた}わず、更に家に持ち帰る。午後、ウエスト・バーンホーフ及びマリヤヒルフ・ストラーセを散歩す。午後、霧晴る。

ページ：19

千代崎・軍人会・中原大尉へ手紙を出す。田村・宇垣よりの手紙来たる。宇垣の妻君死去の報に接す。

1902.11.29. 霧深し 土

午前、語学。午後、小包にて千代崎へ巴里のアルバムを送り、又、手紙をも出す。宇垣へ手紙を出す。書肆^{しよし}に至り、島[内]の書籍代を払う。

1902.11.30. 霧深し 日

午前、武内少佐^とを訪うも、不在。午後二時、独り^{ひと}汽車^{とう}に投して、Schönbrunn に至る。公園の装置、樹木の^{はいれつ}排列、適当に設備せらる。現に、皇帝は、此^{この}宮城にありと。皇居は、細長十一棟にて、(別荘なる

も)[丸括弧]^{その}其下は、人民の通過を許し、一兩人の警視監視をなせり。開放主義も随分極端？[疑問符]動物園あり。^{その}其配置、暖室の方法等、完全せり。初めてジラフ(麒麟)[丸括弧]を見る。熊の大なるものあり。食を乞うて手を合わす等、滑稽なり。寒き時分故、十分に見るを得ざりし。帰途、徒歩にて帰る。

1902.12.01. 霧 月

早朝、高塚及び父上・おじゅう・吉武よりの手紙来たる。千代崎よりの手紙は、十月十八日に出たるものなり。午前、語学。午後、武内少佐を訪う。教師^{来たる}[消去]。

1902.12.02. 霧雪 火

昨夜、降雪。^{しこがいがい}四顧皚々。午前、語学。午後、市街を散歩す。中川より手紙来たる。

1902.12.03. 晴 水

^{やや}稍、暖かなり。街上の雪融けて、泥海の如し。(午前、語学。)[行外追加]武内少佐^{および}及~~X~~?島[消去]と共に、芝居^{ここ}に至り、此に晚餐を喫す。午前二時、帰宅す。此日、入浴す。

1902.12.04. 半晴 木

午前、語学。昨夜、雪降る。眠、足らざると、二日酔にて、頭痛し、^{ひるしょく}午食後、小睡。午後四時、散歩し、^{ママ}Garoche・^{ウィーン}維納アルバム・手袋及び煙草を買う。

ページ：20

1902.12.05. 半晴 金

午前、語学。^{この}此日、^{やや}寒気、稍、強し。零下七度。服屋、午後、来て、不工合を直しに持ち帰り。今日と明日は、^{ママ}Nicors Tag ならば、Hof の市場を見るは面白しとて、午後五時より散歩をなす。寒気強しで、耳痛し。市場には、単簡なる材木を^{もつ}以て小屋掛けをなし、鬼・白ひげの老翁・雑貨、^{その}他の^{がんろうぶつ}玩弄物を販売す[と]聞く。^{ママ}Nicorsは、善人にして、^{ママ}Schrimpfは鬼なり。古代(耶蘇教の、未だ幼稚の頃)[丸括弧]^{きけい}婦人、^{この}畸形児を産するときは、此婦人は、^{ママ}Nicorsと verbinden したるものなれば、悪魔を^{そうぜつ}剿絶する為めなりとて、^{この}此婦人は、^{これ}生きながら^{なお}焚かれたるものなりと。是等の事蹟、尚、口碑に伝わりて、^{その}今明日は、^{すなわち}其祭りをなす。即、目下は主として小児(男女共)[丸括弧]の為めにして、小児の^も兩親若しくは懇意なる人、今日、鬼若しくは^{その}老翁其他菓子等を買置き、明早朝、小児の未だ起きざる以前に、^も枕前若しくは^{その}其靴中に、^も買いたるものを入れ置くなり。小児、^も若し白髪^もの老翁若しくは菓子等の送り物を受くときは、^う幸福を得るの前兆なりとて、大いに^{よろこ}喜び、^も若し鬼、^も若しくは馬鈴薯等のまずき物を^う得れば、^{すなわち}幸福を得ざるの前兆なりとて、大いに憂う。即、老翁は幸福を与え、鬼は鞭を以て打撃を

与うるの意にして、明日学校にては、今朝は何を得たりやとて、各小児、皆、互いに問い合い、^{よろこ} 崋^ぶもあり、憂うるもありて、大騒ぎなりとか。^{たまたま} 偶々には、^{これ} 之を憂いて、神経病を発するもありとか。親等は、平素いたずらなる小児には、鬼を買い与うるなり。妙齡の婦人、壮年の男子等には、戯れに鬼若し^もくは鬼端書等を送りて、^{はがき} からかいをなすも多しとか。^{とにかく} 兎に角、市場は、^{ざっとう} 大雑^ど 鬧なりし。今日、教師は、^{その} 其弟に与うるなりとて、菓子製の小鬼を買い持ち来たりたるを見たり。

1902.12.06. 朝来、雪降る 土

寒気、強し。零下八度なりとか。午前、語学。教師は、本日、^{はがき} 鬼端書を得たりとて、持ち来たり。午後、武内少佐^とを訪う。

1902.12.07. 晴 日

午前、武内少佐、来たる。午後、武内少佐~~及び~~^{ママ} 島とシェーンブルンに至り、帰途、Rest o rant に晚餐を喫す。^{この} 此日、武内少佐に日本の地図を貰う。

ページ：21

1902.12.08. 半晴 月

本日は、「マリヤ」[かぎ括弧]の祭日なりとか。午前午後共、教師に用事ありとて、武内少佐、来訪す。午後、語学。午後八時、Rest[au]rant に至り、^つ 晚餐を喫し、次いで、市街を散歩し、Wilma^とを訪うて、夜半、帰宅す。

1902.12.09. 半晴 火

午前、語学。午後、服屋に至り、明日来るべきを命じ、次いで、市街を散歩す。

1902.12.10. 半晴 水 午後晴

午前、父上・^{ママ} おしゅうより手紙来たる。十一月一日に発送せられしものなり。午前、語学。午後、服屋、来たり。フロックコートを持ち来たる。次いで、市街を散歩す。

1902.12.11. 半晴 木

午前、語学。服屋、来たり、昨日のフロックコートの不工合を直し、更に表着を持ち帰る。日本にて作りし短胴衣の直し、出来来たる。更にズボン・上衣(室内着)[丸括弧]一を注文す。午後、散歩して、服屋に至り、^{ウィーン} 千代崎へ^{維納}の写真帖及び手紙を出す。

1902.12.12. 半晴 少雪 金 0下八度なりと

午前、語学。年始状五十を出す。斬髪す。午後、散歩。シャツ・袴下・コスメチックを買う。

1902.12.13. 半晴 土 0下八度なりと

午前、語学。武内少佐、来たる。今朝、外套を貸し与えしを返しに来たるなり。午後、肥田書記官、来たる。煙草を^つ買う。次いで、武内少佐の外套を間違えて持ち来たりし品を、更に武内少佐^とを^{これ}訪うて、之を交換す(服屋、間違えたるなり)[丸括弧]。次いで、武内・~~？~~島[消去]と共に、市街^よに出て、余は、服屋に至りて、フロックコート及び^{その}其他を速やかに持ち来るべきを命じて帰る。武内少佐及び~~？~~島[消去]の醜態、見るに堪えず。

1902.12.14. 午前 少雪 日 0下八度を下ると

午前、田中松太郎氏来訪。服屋、ズボンを持ち来たる。過長。午後、肥田・田中^と両氏を訪い、Rest[au]rant に晚餐を喫す。

1902.12.15. 雪 月

ページ：22

午前、語学。武内少佐、来たる。教師の謝礼及び送物を托せんが為めなり。服屋、来たる。午後、^{ママ}Halt mann に武内少佐の送別会あり。吉田作^よ弥・依田・肥田の諸氏と^く酌む。次いで、依田・武内と共に^つカフェーに至り、玉突をなし、午前一時半帰宅す。

1902.12.16. 火 曇

前日来の雪、万家を飾りて、銀世界の如し。午前、語学。午後、マリヤヒルフを散歩し、襟カッフ入れを買う。極めて高価なりし。

1902.12.17. 水 雪 午後より雨 風強し

午前、語学。服屋来たる。風邪の気味あり、少し熱あり。本日、温度急変。午前、0下六度、午後(午後六度)[行外追加]、雨降る。武内少佐、ブダペストへ出発す。寝前、麦酒を飲む。服屋、ズボンを持ち来たるも、合わず。

1902.12.18. 木 午前雨 後 雪 温度、急に変す。

午前、語学。昨夜及び今朝、キニイネを飲みしも、心地、^{なお}尚、悪し。午後、更に雨[降]る。寝前、麦酒を飲む。

1902.12.19. 金 晴、雪雨混合 概して雨天

午前、語学。服屋に至り、叱言を云う。中村中将に年始状を出す。本日、暖かなり。寝前、麦酒を飲む。

1902.12.20. 土 雪 後 雨

午前、語学。マリヤヒルフストラーセを散歩し、襟入れを買う。寝前、ビールを飲む。

1902.12.21. 日 雨

午前、教師と共に博物館を見物す。其の出来、^{すこぶ}頗る^{すべ}壯麗にして、凡て大理石を用い、柱の如きは、鍍金の装飾を加う。本日見物せしは、美術博物館にして、^{エジプト}埃及・^マ埃及・^{ローマ}羅馬・^{ギリシャ}希臘等の古代の石造品・棺・ミイラ等を始めとし、古代の武器・甲冑、^{その}其他油画等、中々壯麗なりし。次いで、リング^つ[濁点]の料理屋に至り、昼食を喫し、帰宅。午後七時、レストランにて晚餐を喫す。

1902.12.22. 午前曇雪 午後晴 月

午前、語学。午後、入浴。帰途、教師に托せられたる手紙を田中氏に渡さん^ととて同氏を訪えば、在らず。依りて、家婦に托し置き、武内少佐を訪えば、同氏は、既に昨日ブダペスト[フに濁点；へに半濁点]より帰り居れり。寝前、ビールを飲む。

ページ：23

1902.12.23. 晴 火

午前、語学。午後、煙草を買う。午後四時より市外を散歩して、Hof Markt に至れば、明日は Holige Abend の事とて、^{その}樅、^{ときわ}其他の常磐樹及び例の仮小屋に菓子・おもちゃ・果物・Weihnacht の装飾品等を販売し、衆人群集、^{けんまこくげき}肩摩轂撃の有様なりし。各商店は、今日を晴れと物品を飾り立て、中々立派なり。^{もっと}(尤も、数多の商店は、殆んど十五日以前より Weihnacht Occasion と大書して商買しあるも)[丸括弧]富者は^{この}此大祭日の為めに、^{あらかじ}予め衣服等を調弁し、貧者は今日等に金を工面して新衣を作る。明日夕は、各家、皆、樅を飾りて灯を点し供物をなして耶蘇を祭る。曰く、今夜、耶蘇、各家に至り、物品を恵与するなりと。而して、各人、お互いには^{この}此日に相当の贈物をなす。^{あらたま}歳暮新玉の贈り物の如し。又、明夜は、知人を招いて宴を張るを^{たとえ}例とし、而して、招かれたる者は必ず相応の贈物をなすを^{たとえ}例とす。^よ余も語学教師より招かれたれば、巻煙草入れ一個に煙草をれ、贈り物の用意をなせり。家嬢には絹ハンケチ半ダースを送るの用意をなす。散歩より帰れば、武内少佐、来けりと。^よ依りて、午後八時、同氏を訪えば、在らず。^と今村[傍線]阿久津[今村を阿久津に修正]・田中の両氏と一時間^{ばか}斗り談話して帰る。

1902.12.24. 曇 水

本日は、^{すなわち}即、Holige Abend なり。午前、語学。本日は、教師に招かれたれば、^{その}其贈り物を買う為めにスタットに至り、漆塗の箱及び酒二本を買って、送る。武内少佐、来たる。午後六時、田中氏と教師宅に同行するを約せしも、田中氏は手を痛めたりとて、^{これ}之を辞したりとて、余を訪うと殆んど同時に、

教師、来たり。余を^{とも}伴^{その}うて其家に至り、晚餐を喫す。料理、皆、魚のみなり。ビール・純ライン葡萄酒を飲む。^{その}其間、クリストバウムに点火し、余に見せしむ。菓子に果物・金線の装飾・数多の蠟燭等、^{すこぶ}頗る立派なり。聞く主人は、^{この}此装飾の為に半日以上を費やしたりと。^{しこう}而して、^{あらかじ}小児は、^{これ}予め之を祝[わ]んことを願い、主人は、^{これ}之を拒し、中々騒動なりしと。帰るに際して、教師、余に豚の巻煙草^{おさえ}抑を送る。帰れば、家には余の室にクリストバウムを装飾しあり。^{けだ}蓋し、余は十クロネを嬢に送り、余の送り物、最上位を占めん為めならし。装飾前と相似たり。中々立派なりし。嬢の教師なりとて二人の婦人、来たり。余が、日本服を着して、彼等に見せ^{しめ}べたるに、大^{よろこび}甚なりし。彼等は皆、衣服の絹なるに驚けり。^{ただ}只、惜む、余が羽織の紐を日本に忘れたるを。

1902.12.25. 晴 木

武内少佐、出発見送りの為め、午前八時、Nordbahnhof に至る。吉田・^{よだ}依田・肥田の公使館員及び下宿し人々(日宿)、見送れり。午後、Restaurant に至り、晚餐を喫す。寝前、ビールを飲む。

ページ：24

1902.12.26. 金 半曇 風強し

午前、語学。教師の言に^よ拠れば、近年、冬季、暖かなるが為めか、両三年前より、冬季大風起こること多く、昨年の如きは、街上、数多の人、吹き倒され、ケルントネル街にては、二頭曳きの馬車、吹き倒されたりと。午後、~~Paula Kenbue?~~より手紙、来たる。~~本夜来訪するとXう。即、午後五時、彼を訪う。午後十時帰宅す。後、XX 及び武内少佐の託したるXXX随分持て余したり。共に晚餐を喫したる、XXWeihnacht XX三十クロネXXXX[消去]。~~

1902.12.27. 土 半曇 又 雨 風強し

午前、語学。(十一月二十五日出)[行外追加]千代崎より手紙来たる。午後、散歩。帰途、Paula[消去]を^と訪うて、共に^{ママ}Restaurant に晚餐を喫し、午後十時帰宅す。

1902.12.28. 日 晴 温度六度

無類に好天気、小春の如し。午前九時半、Paulaを訪い、~~共に~~[消去]博物館に至り、天然物を見る。鉱石・化石・各地方の生活、^{その}其他に用うる材料等、豊富にて、日本の部には、仏壇・下駄・大工道具・衣類・面類・刀剣類・甲冑・^{その}書画、其他種々の物品を集めあり(各地方、皆同じ)[丸括弧]。ペリュの部にミイラあり。^よ能く出来居れり。又、古代の動物の骨等をも集めあり。^{その}其奇怪偉大なる一見、^{あわ}粟を生ぜしむ。本日は、^{その}僅かに其半を見たるのみ。帰途、Restaurant に昼食を喫す。午後七時半、Paulaを訪い、~~共に~~[消去]晚餐を喫し、午前一時帰宅す。武内少佐の菓子^{ほとんど}XX土X殆ど持て余XX[消去]。

1902.12.29. 月 晴

午前、語学。引き続き此頃このごろの暖かさは意外なり。小春の如き心地すれども、温度は本日は二度、すなわち即、
(華氏)[行外追加]三十九度位なり。手袋も用いず。散歩すれば、発汗を覚う。午後、~~Paulaを訪い、後~~
[消去]、散歩す。武内少佐より手紙来たる。~~本日XPaulaXX大XXX 彼XX~~[消去]となれり。

1902.12.30. 火 霧深し

午前、語学。午後、日本下宿を訪うて、武内少佐よりの言付・名刺を渡し、後、~~彼を訪うて、共に~~[消去]
散歩し、共に晚餐を喫し、午後九時半帰宅す。本日は霧深く、少しく離るれば、物を見るを得ず。霧
深き時は、煙、上より厭えんばく迫せられて上昇せず。故に、煤煙、臭きこと限りなし。

ページ : 25

1902.12.31. 水 曇 雨 霰あられ

午前、語学。彼等と(昼)[行外追加]晚餐を喫す[消去]。本日より、昼食は、下宿にて食せざることに定め
たり。午前より発熱、午後、腹痛・下痢。午後より、臥がじよく蓐し、万金丹を飲む。午後七時頃より、心地、
大いに好し。本夜十二時には、一同祝盃さきを奉たとえげて新年を迎うるが例なりとか。令嬢、来たりて、冷頭
し呉れし。親切なりし。令嬢、語りて曰く、本夜、上草履うわぞうりを頭上を越えて投げ、(後ろに自ら投ずるな
り)[丸括弧]其尖頭そのせんとう、入口に向く時は、来年は家を去るの徴、内に向く時は、家を去らざるの徴。又、
寝前、三人の男の名を書し、夜半、之これを探りて、其探り当てたるものは、其夫そのなるの徴。又、任意に書
物をまくりたる時、其紙の始めに書したる字の、例えば、Bなる時は、Bなる頭字の夫うを得るの徴等
なりと。しこう而して、兄弟は、皆、令嬢の□いなりと。

[明治]卅六年一月一日

1903.01.01. 晴 木

無類の好天気。心斗りばかの葡萄酒を買うて、大廟・陛下・故郷たいびょうへの祝意を表す。本日は、元気、全く快
復。平常の如し。午前十時、公使館に至り、吉田・依田・肥田よだの三氏に会し、次いで、教師つとを訪い、次
いで、彼と共に昼食を喫し、更に今村・田中・阿久津氏を訪う。田中・阿久津両氏、在らず。新年と云
えど、此地このにては、普通の日曜日に異ならず。教師は、昨日、明日来たりて普通の稽古をなすべし、と
云うに、驚きたり。併し、今日は、回礼等にて時間なければとて断れり。(午後五時)[行外追加]~~Paulaを~~
~~訪いで共に~~[消去]晚餐を喫し、午後九時半帰宅す。

1903.01.02. 晴 金 無類の好天気

午前、語学。~~Paulaと共に~~[消去]昼食を喫し、午後五時、更に共に[消去]散歩す。彼と共[消去]に晚餐を喫し(此日は家に於ること忘れたり)[行外追加]、午後九時半帰宅す。

1903.01.03. 土 霧深し

午前、語学。教師、提議をなして曰く、午前九時より語学を始め、十一時に終わり、次いで、一時間^{ばか}斗り共に散歩せんと。其^{その}厚意を謝して、之^{これ}に従い、来たる月曜日より実施することとなれり。レストランに昼食を喫し、又、共に晚餐をなす。本日より昼・晩食は家にてなさざることを定めたり。

1903.01.04. 日 午前晴 後 雨

Restaurant に昼食をなしたる後、共にシェーンブルンに遊び、更に Restaurant に晚餐を喫して、午後九時帰宅す。

ページ：26

1903.01.05. 月 曇 細雨

午前、語学。服屋に至りて不工合を直す。田村病気なりとの事を聞き、見舞状を出す。定期報告を依田^{よだ}少佐に出す。共に晚餐食を喫す。(□)[行外追加]。

1903.01.06. 火 晴

午前、語学。本日、プラーター に遊ぶ。天気晴朗。温度十度(五十四度半)なりと称す。共に晚餐~~昼食を~~喫す[消去]。

1903.01.07. 水 霧深し

午前、語学。^つ次いで、公使館に至り、学業報告及び亜米利[加]の便船の一覧表の受け取りを呈す。午後、~~プラーターにて?~~[消去]入浴す。

1903.01.08. 木 霧深

午前、語学。午後、武内少佐の^{ロシア}魯西亜よりの手紙を見る。

1903.01.09. 金 霧深し

午前、語学。記事なし。平常の通り(教師と共に散歩、昼食・晩食を外に喫す)[丸括弧]。

1903.01.10. 土 霧深し

午前、語学。記事なし。

1903.01.11. 日 霧深し

午後、市街を散歩す。他、記事なし。市街を

1903.01.12. 月 午前雨 午後雪

午前、語学。本日、泥濘、言語に絶す。本日、三十三年従軍記章を受領す。

1903.01.13. 火 曇

午前、語学。本日、少しく寒し。零下二度。

1903.01.14. 水 半晴 ^{やや} 稍、寒し

午前、語学。探偵小説(読本として)[丸括弧]、Ansichtskarte Album・煙草を買う。本日、^{とみくじ}富 鬨の当り紙^こを買うて検査したるに、当らず。

1903.01.15. 木 晴

午前、語学。教師と散歩す。他、記事なし。零下七度。千代崎へ手紙を出す。

ページ：27

1903.01.16. 金 晴 零下~~十八~~[10を8に修正]度

午前、語学。他、記事なし。田村より手紙来たる。小野田より手紙来たる。過料二十五クロイツを払う。

1903.01.17. 土 晴 零下七度

午前、語学。他、記事なし。

1903.01.18. 日 晴

^{りくつい}山田陸 槌より手紙来たる。他、記事なし。

1903.01.19. 月 晴 零下八度なりと

午前、語学。~~Paula~~^{がじよく}[消去]、病気なりとて臥蓐。玉子を送る。他、記事なし。本日より、作文を始む。

1903.01.20. 火 午前霧深し

午前、語学。他、記事なし。夜、^{よせ}寄席に至り、午前一時、帰宅す。

1903.01.21. 水 霧深し

午前、語学。他、記事なし。

1903.01.22. 木 雪 0下九度

午前、語学。頭痛、悪寒し為め、半途にして中止。^{ろも}爐を燃す。

1903.01.23. 金 霧深し 0 下十度以上

感冒の爲め、臥^{がじよく}蓐^よ。教師、余の爲めに、小説を朗読す(枕頭^{ちんとう})[丸括弧]。爐を焚く。昼食、鶏卵二個。晚餐、米を食す。他、茶・(二皿)[行外追加]バームパンを食す。

1903.01.24. 土 霧深し 0 下十度以上

本日も、尚^{なお}、臥^{がじよく}蓐。教師、来たりて、枕頭、小説を朗読す。ビール二本、普通の昼食を喫す。茶、二皿パンを食す。

1903.01.25. 日 半晴 0 下三度

本日、既に快癒。記事なし。本夜、アーサーストラッセに火事あり。最下階なりし。同家の他のものは、家より頭を出して、之^{これ}を望む。奇怪ならずや。

1903.01.26. 月 半晴 正午六度 急変^{おどろくべし}可 驚

午前、語学。教師に訂盟士の話聞く。道路、泥濘。不快、極まりなし。

ページ : 28

1903.01.27. 火 晴 路、泥濘、如昨 温度正午十度

余と同じく^よに 蓐^{じよく}に入りたる隣室のアメリカ人は、其後、経過悪しく、~~本日~~^{このごろ}此頃[本日を此頃に修正]は熱高くして、口語を吐くと。病の何たるを知らざるも、稍^{やや}、奇険なるものの如し。余は、遥かに東に向けて、余の幸運を謝す。午前、語学。^{ひるしよく}午 食 後、シェーンブルンに□う。煙草を買う。チョッキ(毛)[丸括弧]を買う。

1903.01.28. 水 霧深し 0 [下]二度

午前、語学。川合某の馬鹿に驚く。

1903.01.28.9.[8 を 9 に修正] 木 霧深し

午前、語学。他、記事なし。

1903.01.~~29~~.30.[29 を 30 に修正] 金 霧深し

午前、語学。久邇宮へ手紙を出す。夕方より、悪寒、甚^{はなは}だし。早く入寝す。

1903.01.~~30~~.31.[30 を 31 に修正] 土 晴

マラリヤにて、此日より更に臥^{この}蓐^{がじよく}。午前、教師、来たりて 蓐^{じよく}前に読む。公使館より招待せられたるも、辞す。夕方、阿久津・今村両医学士、来訪す。

1903.02.01. 日 霧深し

なお がじょく
尚、臥蓐。阿久津学士の診察を受け、服薬。今村君、また亦、来訪す。心地、大いに好し。

1903.02.02. 月 半晴

尚、臥蓐。午前、教師、来たりて、床前に読む。午後、阿久津君、来訪す。

1903.02.03. 氷火 [水から火に修正] 晴

午前、語学。時計、直り来たる。約一週間前、破損せしなり。この此日、元気。殆んど全く快復。

1903.02.04. 水 雪 道路泥濘

午前、語学。つ次いで、阿久津君を訪う。と疲労、尚、はなは甚だし。一旦、起きたるも、更に床に入る。

1903.02.05. 木 晴

午前、語学。銀行に至り、服屋に払う。

1903.02.06. 霧深し 金

午前、語学。記事なし。

ページ : 29

1903.02.07. 土 霧深し

午前、語学。公使館に至る。阿久津君に謝礼の為め、料理屋に至りて、共に酌くむ。

1903.02.08. 日 霧

少しく熱あり、全日、がじょく臥蓐す。薬を買う。

1903.02.09. 月 霧

なお がじょく おうこく
尚、臥蓐す。奥国公使より手紙来たる。新小説を買う。教師、自ら買
求れるなり。午前。語学。

1903.02.10. 火 晴

尚、臥蓐す。午前、語学。島岡・中島、中川より手紙来たる。

1903.02.11. 水 霧

尚、臥蓐す。午前、語学。風強し。

1903.02.12. 木 晴 風強し

尚、臥蓐す。今村君を訪うて、外の薬を貰う。午前、語学。

1903.02.13. 金 晴 風強し

尚、臥蓐す。今村君来訪。午前、語学。明日、公使館に来るべき様、招待せられたるも、病気の為、辞せり。

1903.02.14. 土 晴

本日、離蓐^{じょく}。午前、語学。午後、阿久津君来訪。田中君来訪。

1903.02.15. 日 曇 雨 雪

本日、記事なし。終日、蟄居^{ちつきよ}。蓋し、病後直ちに外出するは悪しとて、医師に止められたればなり。転居の通告をなす。

1903.02.16. 月 晴

ページ：30

午前、語学。本屋に至り、小説を買う。父上・高橋・伊丹より手紙来たる。千代崎へ手紙を出す。

1903.02.17. 火 無類の晴天 0下四度

午前、語学。セーンブルンに遊ぶ。午後、留守中、依田少佐^{よだ}、来訪せりとの事を聞く。依田少佐より、重見・橋本両氏の手紙及び十一月分の給料を送らる。

1903.02.18. 水 晴

午前、語学。銀行に至り、金を預く。昨日の散歩にて、又々、発熱^{がじょく}。臥蓐す。

1903.02.19. 木 晴 十度

午前、語学。臥蓐^{がじょく}。小松宮殿下、御墓去^{こうきょ}のことを聞く。

1903.02.20. 金 晴 十度

午前、語学。河合^とを訪う。馬鹿博士^{ほか}、驚く外なし。

1903.02.21. 晴 土 十三度

午前、語学。近来の暖天、不思議と云うの外なし^{ほか}。

1903.02.22. 晴 日 十四度 午後十八度なりと

ジロッコ、アフリカ^{アフリカ}より来たるが為めに、如^{かくのごとき}此 暖気なりと云[う]。午後、依田少佐^{よだ}を訪う。

1903.02.23. 晴 月 十三四度

午前、語学。他、記事なし。今村君、午前、来訪。

1903.02.24. 火 十二三度 昨夜雨降る 半晴

午前、語学。他、記事なし。

1903.02.25. 水 晴 十二三度

四十二年前、今年の如き暖気なりしと云う。^{きちがい}気^{ほか}狂暖気と云う外なし。午前、語学。^{しよし}書肆に至り、小説を買う。

1903.02.26. 木 晴

午前、語学。記事なし。中村中佐より手紙来たる。

1903.02.27. 金 晴

ページ：31

午前、語学。午後、教師と共にステフワン・プラッツに至り、膝掛を買う。帰宅後、荷物を片付けり。

1903.02.28. 土 晴

午前、語学。宇垣より手紙来たる。引越しの準備を終わる。

1903.03.01. 日 晴

煙草を買う。午前十一時半、引越し車、来たり。VIII Albertplatz 1 Thur 4 に引っ越す。午後、シェーンブルンに遊ぶ。

1903.03.02. 月 晴

午前、語学。記事なし。中川より手紙来たる。

1903.03.03. 火 晴

午前、語学。公使館に至り、手当てを受け取る。午後四時、銀行に至り、^{これ}之を預く。午後七時、教師、来たり、膝掛けを持ち来たる。

1903.03.04. 水 午前雨 午後晴 大風

午前、語学。教師、雨傘を持ち来たらざる故、送りて、^{その}其家^{ママ}に到る。六田・山岡・旧王より手紙来たる。^{午後、眼鏡を忘れたり}
^{とて、教師、来たる。}

1903.03.05. 木 晴

午前、語学。記事なし。

1903.03.06. 金 晴

午前、語学。記事なし。松石中佐より手紙来たる。

1903.03.07. 土 半晴

午前、語学。記事なし。河合少佐より手紙来たる。

1903.03.08. 日 雨 雪

^{ちつきよ}
終日蟄居。記事なし。

1903.03.09. 月 半晴 雨

午前、語学。大井少佐、永山元彦少佐、より手紙来たる。

1903.03.10. 火 雪 雨

ページ：32

午前、語学。千代崎へ手紙出す。煙草を買う。ケルントネルストラッセに至り、小説を買う。

1903.03.11. 水 霧深し

午前、語学。本日より、教師に午前九時、必ず来たるべきを請求す。

1903.03.12. 木 雨

午前、語学。記事なし。

1903.03.13. 金 雪

午前、語学。記事なし。教師に小説三冊を貸す。

1903.03.14. 土 曇

児島少佐より手紙来たる。

1903.03.15. 日 曇

午後、シェーンブルンに遊ぶ。斬髪。

1903.03.16. 月 曇

午前、語学。ケルントネルストラッセに至り、杖を買う。

1903.03.17. 火 晴

午前、語学。記事なし。剃刀を破損し、修理せしむ。

1903.03.18. 水 晴

午前、語学。公使館に至り、依田少佐^{よだ}より、六月一日より隊付^{たいつき}のことを聞く。千代崎より手紙来たる。
午後、ノイワルデックに遊ぶ。

1903.03.19. 木 晴

午前、語学。剃刀、直り来たる。

1903.03.20. 金 晴

午前、語学。杖の金環、破損せるを発見し、修理せしむ。

1903.03.21. 土 晴

午前、語学。午後、ノイワルデックに遊ぶ。

ページ : 33

1903.03.22. 日 晴

午後、ヒュテルドルフに遊ぶ。官馬貸与願を出す。煙草を買う。

1903.03.23. 月 晴

午前、語学。午後、スタットパークに遊ぶ。

1903.03.24. 火 晴

午前、語学。散歩杖、直り来たる。

1903.03.25. 水 晴

午前、教師来訪。本日は祭日なること忘れ、同僚と図らずもプラーターに遊ぶべきを約したれば(とて)[行外追加]、科業を断る。□□クールザルンに遊ぶ。

1903.03.26. 木 晴

午前、語学。午後、服屋に至り、明日十一時、来訪すべきことを命ず。

1903.03.27. 金 晴

午前、語学。午前十一時、服屋、来たり。夏服を注文す(教師と共に服屋に至り)[丸括弧]。

1903.03.28. 土 晴

午前、語学。書肆^{しょし}に至り、小説を買う。

1903.03.29. 日 半晴 後 雨

午後、ノイワルデックに遊ぶ。

1903.03.30. 月 晴

午前、語学。記事なし。

1903.03.31. 火 曇 半晴

午前、語学。午後、永山少佐の下宿^{けん}を検す。煙草を買う。

1903.04.01. 水 半晴

午前、語学。午後九時半、北西停車場に永山少佐を迎えて、共に、馬車^かを駆けて其下宿^{その}に至り、麦酒を飲し、午後十一時半、帰宅す。

ページ：34

明治 36 年

1903.04.02. 木 晴

午前、語学。午前十一時半、永山少佐^とを訪うて、共に公使館に至り、次いで、書肆^{しよし}に至り、更に料理屋にて共に晚餐を喫す。

1903.04.03. 金 晴

午前、語学。午後、永山少佐の、昼食^{はず}を喫し外れたるに会し、伴^{とも}うて料理屋に至り、次いで、共に散歩して後、Volksgarten に晚餐を喫す。本日は、日本人会ありとの事なるも、辞して行かず。

1903.04.04. 土 曇

午前、語学。午後、永山少佐^とを訪うて、共に市内運河近傍を散歩す。留守中、依田^{よだ}少佐来訪。隊付決定^{たいつき}のことを書き置けり。

1903.04.05. 日 雨

午前、永山少佐^とを訪うて、共に依田^{よだ}少佐を訪う。依田少佐、奇妙のことを云えり。午後、永山少佐と共にシェーンブルンに遊ぶ。

1903.04.06. 月 晴 雨 交^{こもごも}至

午前、語学。昼食後、少しゴタゴタあり。午後五時、永山少佐、来訪せしも、不在なりしも、次いで、更に午後六時、少佐^とを訪えば、又、不在。

1903.04.07. 火 晴

午前、語学。午後、永山少佐と共にノイワルデックに遊ぶ。煙草を買う。

1903.04.08. 水 晴

午前、語学。午後、永山少佐と共に、靴屋に至り、次いで、マリヤヒルフに至り、贈り物・帽子を買う。

1903.04.09. 木 晴

午前、語学。正午、不在中、内村獣医来訪。午後二時、同氏をラツアレットガッセ^とに訪う。

1903.04.10. 金 雨

午前、語学。永山少佐と共に、フサーレン騎兵連隊に至り、昼食を喫したる後^{シャンバ}_{ンを抜く}、Offiziersverein に至り、鞍、^{その}其他を買う。

1903.04.11. 土 雨

午前、語学。永山少佐来訪。此日、家婦、余^よの手紙を失いたるを以て、諸所其出先を尋ね回り、^{ようや}漸く公使館にて依田少佐よりの急手紙なることを知る。蓋し来たる十八日皇帝^{けだ}拝謁^{はいえつ}の案内状なりしなり。午後二回内村氏^とを訪い、共に麦酒を

ページ：35

飲む。後、内村氏の友人二人、小出某・稲垣某来訪せるを以て、余と永山少佐は辞して、共に^{その}其家に晚餐を喫す。此日、鞍、^{その}其他を持ち来たる。

1903.04.12. 日 雨 暴風雨

オスターン祭日、散々なり。午後、永山少佐来訪。

1903.04.13. 月 晴

オスターン祭の一日、晴れにて、市民は^{よろこ}嬉^とびたるならん。午前、語学。午後、永山少佐来訪。次いで、内村・永山両氏をラツアレットガッセに訪い、午後五時頃より、ガルテンバウに遊ぶ。

1903.04.14. 火 曇

午前、語学。銀行・帽子屋・服屋・靴屋に至り、注文及び直し物等を交附す。永山少佐来訪。

1903.04.15. 水 晴

午前、語学。手袋を買う。午後、内村君来訪。午後六時より、更に同氏^とを訪い、共に晚餐を喫す。

1903.04.16. 木 雨

午前、語学。肉入れ、破損せるを以て、新しきを買う。靴屋に至る。午後、明日観兵式予行見学打ち合わせのため、教師来たる。手袋を買う。

1903.04.17. 金 雨

午前、永山君来たる。観兵式予行あるや否や不明。次いで、挙行せざるを知る。例の通り、語学。帽子、出来上がる。服屋に寄り、催促す。ラック靴、出来上がる。煙草を買う。

1903.04.18. 土 雪

四五日前より、寒気、強く、ウィン^{マ マ}の近郊は、雪、降りたると聞きしも、当地は降らざりしが、夜来、霏雪^{ひせつ}、花の如く、今朝、積もりて、三四寸に至る。午前、語学。午後、永山君来訪。靴出来上がる^{直しなり}。午後七時、永山君来たる。正装にて、共に馬車を駆けて、先ず公使館に至り、次いで、同道、皇居に至る。大広間は、花卉にて飾り、柱は、皆、大理石。中々壮麗なり。各国公使・貴族等、男女、合わせて約三百人もありしならん。婦人の服装の立派なるは、驚けり。午後八時半、皇帝、出御^{しゅつぎょ}。皇族、之れに従う。騎兵師団長宮妃、

ページ：36

皇后代理を勤^{つとむる}ならん。皇帝は男子方、皇后代理は女方に少々挨拶して談話せらる。勤めたるものと云うべし。羅馬法王^{ローマ}の大使は、第一の上席なりとか。余も、又、吉田代理公使の紹介にて、皇帝と数語を交えたり。看楼上には、常に音楽を奏し、愉快なりし。但し、其傍に男女十五六人、手に望遠鏡を持ちて、下の有様を下瞰^{かかん}するは、甚^{はなは}だ体裁を失し、奇異の感ありし。午後十時、式、終わる。此間、全くの立ち詰めにて、僅かに一盃のレモン水と菓子を得たるのみ。第一盃の甘きにほれて、第二盃の白盃を取れば、全くの水。之れにも驚きたり。式、終わりにて、又、馬車にて家に帰る。時に、十時半。

1903.04.19. 日 半晴 寒し

本日は、千代崎への手紙を認^{したた}めたる外^{ほか}、何事もなし。永山君来訪。千代崎より手紙来たる。

1903.04.20. 月 曇 寒し

午前、語学。内村より手紙来たる。午後、散歩。書肆^{しょし}に至り、注文し、葉巻切り、買う。千代崎へ手紙を出す。

1903.04.21. 火 晴

稍、暖かし。近来し天気。午前、語学を休みて、練兵場に観兵式予行を見る。其途中、ウィン^{その マ マ}の図を失う。歩調、足、突き上がりず。足は伸びる様なり。但し、高くは上げず。余り踏み付けざるが如し。整頓は極の上等ならず。列を通して見[る]を得ざるもの、多かりし。負銃、外套を着、脚絆なし。騎兵の

並足分列、何となく間の抜けたる観あり。連隊の楽手、中大太鼓を馬に曳かせたるあり。兵の、組して
前に揃えたるあり。帰路、マリヤヒルフに大柳行李やなぎごうりを買う。

1903.04.22. 水 晴

午前、語学。ラック靴出来上がる。服屋に至り、催促す。午後、ノイワルデックに遊ぶ。午前、永山君来訪。

1903.04.23. 木 曇

西書記官より、手紙、来たる。午前、語学。西へ返事を出す。服屋、来たる。

1903.04.24. 金 曇

午前、語学。服屋、来たる。永山君来訪。鞍を貸す。

1903.04.25. 土 曇

ページ : 37

本日は、春季観兵式挙行日なるを以て、午前七時、西書記官を訪えば、^{もつ} 恰^とも、練兵場不潔の故を以て、取り止めの通知来たり。若干、談話の後、午前十時半、帰宅す。午後、Paula を送りて Franz Joseph ^{あたか} 停車場に至り、帰途、永山少佐を訪い、共に Offizier-verein に至り、望遠鏡・目覚まし・葉巻煙草入れ・手紙入れを買う。

1903.04.26. 日 晴 夕、驟雨 にわか

午前十時、永山少佐を訪えば、昨晚、児玉・岩崎と共に諸方を回り歩き、午前四時半、帰宅せりとて、
 尚、なお 薜じよくしあり。午後、市内を散歩す。依田少佐を訪えば、在らず。よだ

1903.04.27. 月 晴

午前、語学。服屋に至る。午後、服屋、来たる。永山少佐を訪い、共に晚餐を喫す。西書記官より、観兵式、来たる三十日に延期せられたるの報に接す。

1903.04.28. 火 晴

午前、語学。公使館に至り、西書記官と打ち合わせをなす。午後、Franz Josef 停車場に ~~Paula~~[消去]を迎う。

1903.04.29. 水 晴

昨日、栗田少佐より本日朝七時半当地着し報を得たれば、午前七時、Nordwest 停車場に至り、同氏及び河村少佐を迎え、同車して、一旦、宅に帰り、次いで、Grand Cafe に朝食を喫し、公使館に至りて、

よだ あ
依田少佐に遇う。同時、永山少佐、公使館に来たる。次いで、一行五人、Reise Bureau に至り、更に Volksgarten にて昼食を喫したる後、依田少佐に別れ、一行四人、Prater に、次いで、Stadtpark に至り、後、依田少佐を訪うて Stephan-kelleru^{ママ}に至り、同氏の馳走を受け、更に同少佐に別れ、四人、Cafe Seitz に至り、十一時、帰宅。河村は永山少佐の宅に、栗田は余の宅に同宿す。

1903.04.30. 木 晴

本日は、西書記官と約束したれば、早朝、栗田少佐を宅に残し、同氏を訪い、同車して、練兵場に至り、観兵式を見る(妻君子供と)[丸括弧]。風強し。兵の、分列中、帽子を飛ばしたるもの、数多あり。歩調は、種々なり。足尖^{あしさき}の上がるもの、敲くもの、足の反るもの、あり。歩き方は、日本と同様なり。整頓は、余り見事ならず。列を通じて見^な為したるもの、三分の一に上らず。分列中、兵の、

ページ : 38

下を見るもの、傍を見るもの、互いに話すもの、笑うもの、あり。将校は、小声にて叱り、剣にてつき、或いは、傍を見て知人と会釈するものあり。軍紀の程度、如何^{いかが}□。一中隊の人員は、約百人前後なりし。服装は、脚絆なり。皆、負銃をなす。標兵は、乗馬者を配置し、其^{その}発起点の傍には、旗を樹立す。騎兵・砲兵も並足。頓と気の移らざるの感あり。砲兵は、黄銅砲四門中隊六馬。前車に三人乗り、軸座に一人乗る。騎砲兵は、六門中隊なりし。[改行]
午後、シェーンブルンに遊ぶ。

1903.05.01. 金 晴

午前、語学。銀行に至る。

1903.05.02. 土 半晴

午前、語学。午後、永山少佐来訪。

1903.05.03. 日 晴

午前、永山少佐を訪う。午後、Kahlenberg に遊ぶ。山上、永山少佐に^あ遭う。

1903.05.04. 月 晴

午前、語学。名刺を注文す。服屋に至る。靴屋、来たる。永山少佐来訪。

1903.05.05. 火 晴 夜雨

午前、語学。「サンチロン」[かぎ括弧]を直す。本日、Paula に最後の通告をなす。永山少佐を訪う。午後三時、Paula 来訪[消去]。

1903.05.06. 水 晴

午前、騎兵宮に至り、新たに買わんとする馬に乗る。Paula[消去]に最後の手紙を出す。永山君来訪。

Paula 来訪。XXXXX 持ち来たり[消去]。シャツ、^{その}其他を買う。

1903.05.07. 木 晴

午前、語学。^{よだ}依田少佐を訪う。^と午後、銀行にて依田少佐に会し、共に永山少佐を訪う。皇帝より Budapest 夜会の案内を受く。辞して、行かず。

1903.05.08. 金 [天気記入なし]

ページ : 39

午前、語学。名刺、出来上がる。午後、服屋、来たる。

1903.05.09. 土 雨 疾風 後 晴

午前、語学。永山君を^と訪う。午後、Mödling に遊び、^{ここ}此に宿す。風光明媚。奇巖・佳石・^{とっこつ}突兀・松樹。多く日本の景に似たり。

1903.05.10. 日 晴

午前、Mödling を発し、Baden に遊び、更に Vöslau に遊び、^{ここ}此に宿泊す。風光、Mödling に似たり。公園・松樹、大いに神気を壮ならしむ。

1903.05.11. 月 晴

Vöslau を発し、帰維。家に帰れば、家婦・教師、大いに心配し、教師は、永山君を^と訪い、巡査に搜索を依頼するの相談をなす等、大困りし果てなりし由。^つ次いで、永山君・教師来訪。^つ次いで、語学。永山君を^と訪うて、礼を^の述ぶ。

1903.05.12. 火 晴

午前、教師を訪うて、(^{その}其母と共に)[行外追加]共に Sc(h)[行外追加]atzkammer を見る。帝冠頭飾・帝笏等、皆、^{その}金剛石、^{もつ}其他の宝石・純金を以て造り、^{ばか}壯麗。目を驚かす斗りなり。次いで、教師と共に昼食を喫し、午後、シェーンブルンに遊ぶ。

1903.05.13. 水 晴

午前、語学。午後、~~Rodaun に遊ぶ。~~[消去]午後、^{しょし}書肆に至る。

1903.05.14. 木 晴

午前、語学。午後、Rodaun に遊ぶ。

1903.05.15. 金 半晴

午前、語学。本日にて、読本(小説)[丸括弧]を終わる。斬髪。午後、撮影。服屋に至る。

1903.05.16. 土 晴

午前、語学。午後、プラーター・ヴィネーデヒに遊ぶ。宿屋に泊まる。

1903.05.17. 日 晴

午後、永山少佐^とを訪う。

1903.05.18. 月 晴

ページ：40

午前、語学。千代崎へ手紙を出す。

1903.05.19. 晴 火

武藤より手紙来たり。停車場に至れば、時間、既に遅し。諸所を探し廻り、後、ラッアレット街にて、
依田少佐^{よだ}がの[がからのに修正]、同氏を伴えるに会す。午後、オパーに至る。室の結構の壮麗なる、照
光の奇巧なる、装置の完全なる、驚く^{ばか}斗りなり。ミニオンを演ず。

1903.05.20. 水 晴

午前、依田少佐^{よだ}と共にベルデンに至る。帰宅後、直^{ただ}ちに、武藤^とを訪い、武藤の、荷物を忘れ来たりたる
を取る為め、停車場及び旅行のビュローに至る。次^ついで、依田少佐に会し、御馳走になる。次いで、玉
突に至る。

1903.05.21. 木 晴

午前、教師^とを訪えば、不在。次いで、武藤を訪えば、不在[薄く消去]。公使館に至り、後、シェーンブ
ルンに遊ぶ。

1903.05.22. 金 晴

午前、陸軍省^{よだ}に依田少佐と共に至る。服屋、名刺屋に至る。午後、武藤^とを訪えば、不在。公使館に至る
も、亦、^{また}不在。

1903.05.23. 土 晴

午前、教師と共にステフワン塔に上る。午後、武藤・永山来訪。千代崎より手紙来たる。

1903.05.24. 日 晴 午後 ^{にわか}驟雨

午前、服屋に至る。午後、武藤、訪問。永山少佐のみ在宅。次いで、シェーンブルンに遊び、午後七時、武藤・永山を訪^とうて、共に晩食す。

1903.05.25. 月 晴

午前、武藤を送りて、スタート停車場^つに至る。次いで、語学。

1903.05.26. 火 晴

午前、教師と共に~~ヌテフ~~ラートハウス[ラートハウスに修正]博物館を見る。梱包を始む。ライヒ將軍(監督)[丸括弧]来訪。裸の時にて、大不体裁なりし~~ヲ~~[括弧を消去]。博物館に、ナポレオン一世の死者模写あり。英雄を追想して、^{うたた}転、^た感慨に勝えず。

1903.05.27. 水 晴

ページ：41

午前、語学。服屋に至る。夏外套出来上がる。

1903.05.278.[2 から 8 に修正] 木 晴

午前、教師と共にアーセナールに至る。室の結構、中々立派なり。クストツアの戦場の模型・古英雄の遺髪・剣等あり。教師を招待し、後、吉田・依田^{よだ}・肥田・西を訪問し、銀行に至り、名刺屋に至り、小刀を買う。本日、服、^{ことごと}悉く出来上がる。ノイワルデックに遊ぶ。

1903.05.29. 金 晴

教師・依田^{よだ}・永山・佐藤(順天堂)[丸括弧]・今村・田中の諸氏と訣別し、銀行に至る。次いで、宿屋に宿泊す。1. Frugergasse 11.。

1903.05.30. 土 晴

午前八時、家を発し、「ウエスト」[かぎ括弧]停車場に至る。教師・依田^{よだ}少佐、来送。~~パウラ同車し、サンペルテンに至り、此に分かる。~~[消去]午後四時半、ザルツブルク着。Österreichischer Hof に宿泊す。独^{ひと}り初めて西洋旅に至る。不持^{ふもて}、此上なし。副官に手紙を送れば、不在。大当惑。午後、副官代理より手紙^うを得。

1903.05.31. 日 晴

午前、副官より手紙来たり。明一日、午前^{ついたち}十時、連隊に至るべきを通知す。午後、ザルツブルク市街を散歩す。

1903.06.01. 月 晴

午前十時、連隊に至り、次いで、一大尉と共に諸所にメルデンに趣く。初めて将校集会所に会食す。千代崎へ手紙を出す。

1903.06.02. 火 晴

記事なし。

1903.06.03. 水 晴

記事なし。

1903.06.04. 木 晴 後 雨

訪問のため、午前、馬車にて諸所を回る。午前、練兵場に至る。

1903.06.05. 金 晴

午前、訪問を継続す。午後、射撃演習参観のため、Gaisberg に至るべき為、午後三時三十三分、Klement 大尉と同車

ページ：42

すべきを約せしも、乗後れ、中佐 Poblitson を訪い、徒歩にて山に上り、此に宿泊す。本日、従卒、馬匹受け取りの為、出張。

1903.06.06. 土 半晴 後 雨

午前六時より射撃演習を始む。小隊の一斉射撃距離、1600、1800、2400 歩位、命中 41/300。最良なりし距離の誤測もありたり。(横隊的・縦隊的)[行外追加]将校に任務も与えず、地形の利用もせず、講評もせず。将校は、射撃部隊の後方近距離内に群集して、高声に話し、戯れ歌い、兵卒、亦、側方近距離に坐臥して、高声に話し、「静かに」[かぎ括弧]とて、将校の、(中佐も亦)[丸括弧]之を制せしも、数十回、尚、戯れて止まず。「豆煎」[かぎ括弧]をなせば、~~兵~~[消去]此等の兵卒は、大勢にて笑う等、軍紀の何れにあるを怪わしむ。「豆煎」[かぎ括弧]、又、頗る多かりし。帰営後、中佐は、一斉射撃の号令の掛け方等を説明し、各将校は、何時何処にて余は一等の命中点を得たり等、語る。日本の軍隊よりは劣るにはあらざるか。[改行]

演習後、徒歩にて帰る。靴(長靴)[丸括弧]、小にして、足痛、甚だし。昨夜、シャンパンを振舞う。将校は、家族の健康を祝すとて、ザルツブルクの写真帖を送れり。

1903.06.07. 日 晴

午前、宅の訪問回り、他隊長訪問をなす。他、記事なし。

1903.06.08. 月 晴

午前六時、出発。リンツに趣く。師団長始めにメルデンをなす。後、Pöstlingbergに登る。景色絶佳。
午後晩く帰宅す。

1903.06.09. 火 晴

午前、乗馬して郊外散歩後、或中隊の塹溝掘開を見る。別に殊に変わりもなし。工事遅し。壕、幅狭きを覚う。

1903.06.10. 水 晴

午前、大隊教練を見る。隊長の、部下将校を召集するや、駆足にて来らず、ノロ～～たり。(演習の)[行外追加]時間を失うい[うをいに修正]、外見悪し。他隊の将校には、□□を与えず、可笑なものなり。四十歩前にある敵歩兵に向けて既に散開し、敵騎兵に向けて中隊縦隊は両側に開かずして一側にのみ規則的に開く等、無意味の演習多し。只、大隊縦隊の側面散開、稍、見るべし。後発中隊より散開。先方中隊は、駆足にて距離を取る。大隊には、副官の外に喇叭長、乗馬す。□□に妙なり。テニス遊びをなす。午後、将校射撃あり。

1903.06.11. 木 雨

本日は、祭日。ウィンには、皇帝、徒歩にてステファン寺に至る日なり。連隊将校と共に午前七時ドーム寺に至り、式を見る。午後、散歩。

ページ：43

1903.06.12. 金 晴

密集大隊教練を見る。歩調を取るもの少なく、大隊長、常に大いに怒る。整頓も出来ず、列中の兵は右顧左盼。気の乗らぬこと夥し。然し、常に一想定を設けて演習をなすは可なり。対騎の演習をなすや、各中隊は一側にのみ規則的に開く。応用に欠くるのみならず、射撃し得ざる際は、後方にて着剣し停止するは可なるも、更に他側より敵騎の来たるや、該部隊の半、之に向けて射撃し、他は、ぼんやり然たり。何故なるやを問えば、更に敵騎の他側より来たることあるべきを顧慮し、全力を使用せずと。如何のものにや。散開演習中、将校、挙動、妙ならず。但し、之れは大隊長の罪か。散開中に休めの号令を下したり。之れは、森林に掩われて将に進出せんとする敵に向けて 予め散開したる演習なるも、将校は剣にて土をいじ[っ]たり、或いは、跪座し、或いは、側臥、更に敵方を監視するの模様を見ず。演習は、講評せずして、やりっぱなし多く、頓に角、強国の軍隊としては欠くる所多し。

1903.06.13. 土 晴

三日間施行せらるべき師団幹部演習に参列を乞いしも、師団長は許可せず。残念なりし。演習員は、佐官及び尉官^{大尉}の一部にして、兵力は師団^{この}なる由。此日、連隊一大尉の主宰する幹部演習を見る。連隊長・連隊付中佐・大隊長も来らず。放任も^{はなは}甚^{がい}だし。該大尉は、先ずやり手ならん。他中隊長等に比すれば、大いに確ありしたる所あり。即^{すなわち}、他演習員大尉に向けて、厳確^{ママ}に指導し、他大尉も能く^よ其言^{その}を聞く。学力の差ある所より、然るならんか。兵力は、旅団、但し概言すれば、只、運用を試むるのみにて、実際に於ける、大隊・中隊の展開法、散兵線及び予備隊の位置等(退路の関係、砲兵の進路、如何に砲列^しを布くや等)[行外追加]は、知らぬ顔の半兵衛^こ。之れにては、連隊にて行^こう幹部演習にならず。殊に、皆、乗馬なれば、尚、^{なお}少しく適當の方法もあるならん。

1903.06.14. 日 半晴 雨

記事なし。本日、豪遊を Drachenloch に約したるも、喰い違^{ちご}うて果たさず。

1903.06.15. 月 半晴

午前、分隊・小隊・中隊教練を見る。運動の緩慢なる、士気の振るわざる、何時も同様なり。

1903.06.16. 火 半晴 雨

午前、昨の如く、練兵を見る。例によりて例の如し。殊に、号令を用いざる演習に行進隊形変換、射撃の後、^{なお}尚、号令を用いざる演習を継続して、遂に突貫に至る等、無意味も^{はなは}甚^{はなは}だし。独立小隊に予備をたくわ^{たくわ}う。斥候が敵の斥候を独力攻撃(敵状の、尚、不明なるに際して)[丸括弧]する等、兎戯に類したるもの多し<sup>突撃前
の並足〇</sup>

ページ：44

1903.06.17. 水 晴

二中隊^{ごう}を合して野外演習をなす。一中隊の将校のみ出場。他は、休みを与えたり。但し、中隊長は、出場^{この}。此方法は、適當ならん。演習に至りては、殆ど価値なし。ザルツブルクに宿泊する旅団が、峻^{しゅんけん}峻なる山を越えて掩護、前哨の為に一中隊を派遣し、敵の一小隊が山路中に其前進を遅滞する、の演習。小隊長は、奇襲を試みんとして、道路を離れたる所に陣地を求め、其結果、遂に退却することを得ざるに至り、演習を中止して、敵の中間、<sup>即、中
隊なり</sup>を退却せしける等、奇妙なりし。次いで、小隊長は、余り^{しょうへい}障蔽せる森林内に陣地を占め<sup>尤も、例により
て予備を貯う</sup>敵に迂回せられて背後より射撃を受くる等、話にならず。中隊長は、演習後、各有階者<sup>上等兵に
至るまで</sup>を^{ことごと}悉く集めて講評をなす。其講評も通り一遍のものにて、小隊長を呵責教訓<sup>その
かせき</sup>する等のことなり。是にては、役に立たず。演習中、兵卒及び幹部も気が乗らず。敵前百歩を平気に

て闊歩・散歩する等^{かつぽ}、^{之れは中隊長大いに怒りたり}、実戦の景況を呈せず。講評中、将校は砂糖をかじり、各中隊長の講評に反言する等、足らぬ所、多し。演習後、中隊長は、隊を離れて先に返り、他の将校をして中隊を引率せしむ。

1903.06.18. 木 晴

此日も、二中隊を合しての野外演習なりし。何分、峻嶮大山なれば、道路の両側は運動自在ならず。否、許さざる所多く、為めに、台湾的戦法を此に見るの概^{ここ}あり。此演習には、中隊を二部^{二小隊と一小隊}に分けて二道より前進せり。地形を知るが故に、間違いも起こらざりしが、山地にて兵を割くは如何か。少なくも、自活しうる隊にあらざれば、危なからん。余は、此二隊が如何に連絡するやを問いしに、方法なしと答えたり。然^{しか}り。方法なからん。但し、演習の実際を見れば、斥候を如何なる難地にも多く出す癖ある如く見ゆ。此日も、随分多くの斥候を峻嶮なる山を越えて出したるを見たり。如何か。山地演習は、如何なる所にて、只、迂回のみを行う。此方法は、可ならん。此日も、仮設一小隊は退路を失へり。次いで、多年の実際の経験なりとて、中隊を四小隊に分けて、小隊毎に二三百歩の距離を取り、行進せしむ。曰く、全隊挙げて敵の伏兵に^{おちい}陥らざる為めなりと。可ならん。此日も、敵前散歩。中隊長の早帰りを見る。

1903.06.19. 金 晴

射撃号令発射撃を行うを見る。一斉射撃の為めならん。抱腹の至りなり。而^{しこうして}も、兵卒は、若し命中の悪^あしきあらば、将校は、直ちに其銃を取りて、自ら射撃す。曰く、残余の弾は、返納するを要せず。故に、目下、殆ど中隊に五千発の剰余弾ありと。結構なることなり。射撃後、各、^{きょきん}抛金して、懸賞射撃を行う。適当ならん。但し、射撃場にて喫煙し、^{けんそう}喧噪なる等、軍紀の如何を見るに足る。全四発、皆命中したる兵卒には、賞として金を与える。

ページ : 45

1903.06.20. 土 半晴

午前、天幕の張り方(四[人]、若しくは、三人の為に二枚の布を以て張りて、形四角柱体にし、高さ一銃の長さと同様、底一辺の長、一米五十もあらん。銃剣を装し、一兵、^{これ}之を保持し、他二人若しくは三人にて地に杭を打ち込んで張る。(木にて掘るを(銃を用いざるを)、正則とす。)数多、^{これ}之を横結すべし。)[3重丸括弧]倉庫を見る。(予備兵の戦時用はHallにあり。政略上、^{かくのごとく}如此大隊を分割するなるべきも、不便極まりなし。)[丸括弧]射撃手を尋、給養表・^{ママ}罰人表(随分多し。独乙兵は可なる

も、伊兵は困る、と云えり。罰人は、各多しとか。伊兵は、之^{これ}を各連隊に分配し、一連隊に集合せず。反乱を恐れてなり)[丸括弧]等を見る。照星摩擦に注意せざるには、驚く。兵は、之^{これ}を腋下に入れて平気なり。将校、又、之^{これ}を咎めず。

1903.06.2~~2~~1. [2 を 1 に修正] 日 雨

パウラ来訪。食事中、過早に喫^{きつえん}煙するもの、食堂に余計な者を携え来たるもの、不体裁なことをなすものへ、罰として十文を徴す。又、公務にあらずして遅刻するものも、罰として金を徴せらる。

1903.06.2~~3~~2. [3 を 2 に修正] 月 雨

操典の質問をなす。将校が講評の際、厳密を欠き、口^{くちごたえ}答をなし、不体裁なり。ハレトル男爵に招待せらる。

1903.06.2~~4~~4. [4 からまた 4 に修正] ^{ママ}火 晴 [次の日と順が反対]

本日は祭日。連隊の将校、あまねく集まり、連隊長は、祝^{しゆくし}詞を述べ、楽隊は君が代を奏す。^{尤も、奇なりし。}博物館を見る。

1903.06.2~~4~~3. [4 から 3 に修正] ^{ママ}水 晴
記事なし。

1903.06.25. 木 午前 雨

午前八時出発。インスブルクに向かう。正午、同地着。中尉チレアに既に停車場にて余^よを待つ。共に餐食後、パノラマ(仏軍を)[行外追加]防ぐの図・射撃場・博物館等を見、ハルに宿泊す。

1903.06.26. 金 晴

軍団長にメルデンをなし、午後一時、オイゲン親王に招待せらる。^つ次いで、Igls 山に遊ぶ。夜、活画の下稽古を見る。

1903.06.27. 土 晴

ハルの大隊に至り、メルデンをなす。昨日インスブルクにてチロール全アルプス山の模型を見る。皆、石にて作り、此石^{この}は、皆、本家の山

ページ : 46

より取り来たりたるものなりと云う。此日^{この}、大隊の将校と共に会食。

1903.06.28. 日 晴

この

此日は、ハル市建設の六百年祭に相当し、行列(古代の軍装にて)[丸括弧]・活画等、中々見事。軍団長
オイゲン親王は、皇帝の代理として臨場あり[と]聞く。古来、チロールの民は、尤^{もっと}も勇敢にして、ナポ
レオン一世に対抗して、十八年間、戦を継続し、遂には、其^{その}攻略^{まぬが}を免れたりと云[う]。

1903.06.29. 月 晴

午前七時出発。午後一時、ザルツブルクに帰着す。

1903.06.30. 火 晴

戦時中隊の演習を見る。将校分隊長等は、散開・陣地の占領するの際、先行して其^{その}位置を探索せず。兵
は、のろ～～。講評者は、煙草をくわえ、将校の態度、亦、甚^{また}だ不軍紀なる如くを見受く。

1903.07.01. 水 晴

午前、大隊教練。大隊長が一小細事に至るまで一運動毎に注意講評するは、親切なり。其^{その}運動も、密集
教練の整頓・歩調等は、余り八釜敷云わず、主に、戦時動作演習を行なう。適当なり。将校射撃会あ
り。第四等賞を得たり。[改行]
千代崎へ手紙を出す。

1903.07.02. 木 晴

午前、夫連[大から連に修正]隊教練。昨[消去]密集隊の運動。楽隊を奏して行ふ。午後、Werfen に、
Paula^とを訪い、同処に宿泊す。

1903.07.03. 金 晴 本日発熱三十七度

午前六時半、ザルツブルクに帰る。午前八時、大隊長・副官と共に郊外に乗馬散歩をなす。本日は、二
中隊連合戦時中隊の演習ありしも、大隊長は臨場せず。大隊長・連隊長は、屢々^{しばしば}練兵場より隊の先頭に
立ちて帰るも、解隊の時は、何時も前へ室に入る。何の事やら。[空白]同時に敬礼する前哨もあれど
も、多くは同時ならず。三步を待たず□。殊に、兵卒、前哨の傍にある時、然^{しか}り。[空白] 演習は、平
均午前六時乃至七時開始。

ページ：47

1903.07.04. 土 午前雨 後 晴

対抗演習の筈なりしも、取り止め。午後、皇弟 Ludwig Victoria[ia を消去]に招待せられ、連隊の将校と
共に午後六時、其^{その}宮殿に至る。皇帝弟[帝を弟に修正]、観楼にあり。附武官、余と余の大隊長を紹会^よせ
んとて、其^{その}者を通すれば、彼は、アイスクリームを喫して待て～～と云い、余等の顔を眺めて平然たり。

癪にさわりて堪らず。後、女の客来たれば、食を棄てて之を迎え談笑快話。武官、更に紹会せんとすれば、後にて〜〜と云い、又、アイスクリームを喫し、じろ〜と余等の顔を眺む。腹の虫は既に承知せず。如 此 輕蔑は、受くべきにあらずしむ。直ちに帰らんかとも思いしが、目下の況遇の情 なさけ。虫を抑えて約三十分間辛抱し、遂に紹介の機を得たり。武官は、気の毒がりて、何卒少し待つて呉と云い、少佐は、西洋にては女は第一なれば致し方なしと云う。何等の亡状。

1903.07.05. 日 晴

午前十時半、連隊長は、連隊の将校を会して若干の話をなす。曰く「ミラベル」[かぎ括弧]ホテルは毎週三回連隊の楽隊を招いて奏樂せしむることを約せしも、七月十五日にて此約を解きたり。無礼なれば、将校は、「ミラベル」[かぎ括弧]に行くべからず。然るときは、彼に窮して、更に連隊の楽隊を雇うに至るならんと。丸で高売根性なり。次いで、奥村は帰れと云う。口に秘密無しと云えど、其実は、然らず。可笑なものなり。午後、Reichenhall に遊ぶ。皆は、寡婦・孤児の為に慈善祭をなし、良家の妻及び娘、為に色々な品を売りて(極めて高価に)[丸括弧]、七丹[最後の文を後で追加したので、先に書いた「七月」を消去]之を施す。

1903.07.06. 月 半晴及び雨

午前、大隊教練。大隊長が、一兵卒の動作に至るまで綿密に講評修正するは、適当なれども、今度は如 此 せよ、次は斯く〜と、余り干渉し過ぎはせずやと思わる。即、各官の独立動作の範囲に入り過ぎればなり。散兵線の運動、極めて俊慢。駟足をを用うべからずと云い、□□及び敵前二三百米の地も平気にて、普通の歩度にて前進す。射撃陣地・射撃の種類等には、余り頓着せず、只、形式的散兵線の構造に汲々たるものの如し。但し、目下は、大隊教練の初期なればにや。但し、大隊教練の時様には、是等のことは、既に十分に兵卒を訓練しあらざるべからず。将校の悪き所を講評するならん。奥村は副官と共に乗馬散歩をせよと云う。呵々。何時も〜包翼攻撃にて半小隊・半中隊を両翼に派遣するの癖あり。小隊が三名の斥候を両翼に放ちて敵を包翼すと云う。可笑の至りなり。午後、メンチ男爵に招待せらる。

ページ : 48

1903.07.07. 火 雨

午前、大隊教練の筈なりしも、取り止め。午前、中隊の学科を見る。下士の学科なり。机上に地形を現出し、毛布上に松葉を散布して森林、赤糸を引っ張りて大道、黒糸を引っ張りて小聖、青糸にて川、毛

布下に諸種のもを入れて高地等となす。学科は高尚に過ぎ、兵卒は解せず。あくび、眠り居るもの多し。兵卒は、互いに話し、寝ける上に、腰掛けて、不体裁なり。之れは、内務書が許せるならん。

1903.07.08. 水 雨

大隊野外教練。働きのなき演習なりし。殊に、大隊長は、大雨となるや、余は、十時に官房にてなすべき事あり、帰らざるべからず、とて、^{ただ}直ちに帰り去る。始めよりの計画にて十時には衝突せざるの計案なれば、雨を恐れてならん。^{かしよう}可笑。余はずぶ濡れとなる。自転車を買う。

1903.07.09. 木 雨

連隊教練の筈なりしも、取り止め。午前、学科を見る。火曜日の如し。(過日の演習に、敵が退却するや、直ちに陸地の後端までの追撃せずして、先ず隊を整え、後、追撃退隊を出す。考えものならん。)

1903.07.10. 金 雨

午前、射撃の筈なりしも、取り止め。学科、昨の如し。午後、死亡将官を見に[を見からにに修正]葬式に列す。

1903.07.11. 土 雨

午前、学科。午後、Werfen に^とパウラを[消去]訪い、瀧及び古城を見る。

1903.07.12. 日 晴

本日は、Chiem See に行く筈なりしも、引き続いての天気都合にて取り止め。Werfen に滞留し、午後十時、ザルツブルクに帰り、ゴラ、カロリー等と Kiosk に会飲す。

1903.07.13. 月 半晴

午前、大隊教練。大隊長が懇篤^{こんとく}、将校等を教訓するは感心なるも、将校が極めて単純なる動作も時として能わざるは、其学才の短薄^{その}なるを知るに足る。^{ただ}但し、操典に罪ありとは云え、退却する軍隊が収容隊の前面をノゴ^{い か}〜散歩的に行進するは、如何にも見苦し。余り形式に拘泥したる如く見受けらる。午後、ヘルブルンに自転車にて散歩。

1903.07.14. 火 半晴

午前、^{ママ}Geisberg に上り、戦闘射撃を見る。射撃は戦時編成の小隊、距離 800 歩より始む。中隊長、想定を与え、

大隊長、連隊長は、高見より見物、不相^{あいかわらず}変。小隊が二三部に分かれての躍進前進。小隊長は、昨日より既に距離想定等を承知し居り。何の演習やら訳が分ならず。地形の利用の如きに至りては、殆んど将校の眼中になく、只、兵卒各個の位置に^{ただ}汲^{きゅうきゅう}々たるものの如し。即、800歩の地は、敵と谷を距てて^{すなわち}相対する適當の射撃陣地なりしにも不^{かかわらず}拘、若干、停止射撃の後、敵前に^{かんしゃめん}緩斜面を下りて前進す。演習の計画が悪しきか、指揮者が悪しきか、標的は、散兵的・起伏的なるも、起伏現出等の時間、何から割り出したるや、訳が分ならず。^{すなわち}即、敵の小隊の予備隊が、十分間も依然として我散兵射撃400歩の地に現出する等なり。此^{この}標的の指揮者は、新たに軍団学校を卒業せし中尉なりしが、如何にも気の毒なり。大隊長・連隊長・中隊長等は、演習後に一言の講評もせず。不思議に勝^たえず。只、命中の多きのみ^{ただ}を是に争うものの如し。午後、連隊長 Roschatt・連隊付中佐 Popletsan と共に、^{ママ}Geisberg の絶頂に上り会食す。午後五時、伊達大尉、来たる。

1903.07.15. 水 晴

大隊の対抗演習なりしも、勤務休みを乞うて、[伊達]大尉を Hellbrunn に導く。後、共に集会所に昼食。古城を見、射撃会に列す。

1903.07.16. 木 晴

連隊教練の筈なりしも、勤務、休みて、[伊達]大尉を停車場に送り、教師 Hofbauer を迎う。千代崎より手紙来たる。

1903.07.187. [8を7に修正] 金 晴

午前、対抗演習((一中隊の)[行外追加]仮設敵に対する三中隊の演習)[丸括弧]。一中隊長、審判官たり。
^{しこう}而して、演習大隊長よりは列序上に新参(此大尉は、実は、古き大尉なるも、一度予備となり、又、現役を志願せるを以て、目下、其試験中なりと。若し試験に合格すれば、不^{とおからず}遠、少佐に進むを得るなりと)[丸括弧]。余は、^よ□□は知らざれども、大隊長も、^{ぼうぎょ}臨場せり。橋梁の後方に防禦する敵に対して、演習大隊の前^{えい}エが橋を越えて前進したる為め(橋と仮設敵との距離、百米に過ぎず、地形も亦、適當ならざりしとは云え、ヘルンブルンの近傍)[丸括弧]、逐次、二中隊斗り橋の越えたるを、該^{がい}審判官中隊長は、不可能なりとて、退却を命ず(大隊長、^{とど}停めたるに不^{かかわらず}拘)^{その})[丸括弧]。其後、該中隊長は、其^{その}演習を指導せんとするの模様、見えたるも、少佐は常に口を入れて、実際は少佐、演習を指導したり。大隊長少佐が演習を指導

ページ：50

するなるは、該中隊長が少佐の傍にあるに不^{かかわらず}拘、専断、退却を命じたるは、不可。又、大隊長が、該中隊長をして演習を指導せしむるなれば、如^{かくのごとき}此口を入れて、其後の経過を自己指導したるは、不可。

要するに、両者とも軍紀に害あり。殊に、演習中、少佐が、実員の中隊長に(中尉なりし)[丸括弧]、目下は、余なれば如^よ此^{かくのごとく}すべし、君も如^{かくのごとく}此^{その}するならん、等と、常に其為すべきことを云う等は、教育か啓発か。若し中尉・大尉等が、如^も此^{かくのごとき}注意を受けざれば演習をなす能わずとすれば、可^{あた}憐^{あわれむべし}。若し不然とすれば、此手法は遂に習慣をなし、下級者は自己に与えられたる動作の範囲内の自由行動を拘束し、遂に独断力を失うに至るならん。講評も、亦、只、瑣細^{また ただ ささい}のことにのみにして、陣地の占領戦闘の経過等に就いては、毫^{ごう}も及ぶ所なし。(尤^{もっと}も、散兵線の位置[について]は、少々は可否を云いたれども。)[丸括弧][改行]

演習の指導が、日本に比すれば、大いに困難なるは、損害要償の高価なる為め、地形を利用するを得ざるにあり。過日の戦闘射撃の時も、一日の演習の為に、樹木・草地の損害として百グルテンを払[傍線]い、軍団演習には、一日に三万グルテンを払うこと[傍線]あり、と云えり。為めに、平常の演習には、此^{この}損害を恐れて、多くは道路外を前進せず。地形の利用に大いに窮屈なり。

1903.07.198. [9を8に修正] 土 晴

余の中隊は勤務中隊にて、休み。午後、Werfen に至り、途中、自転車、破損。犬一匹を殺す。過料二匁。

1903.07.2019. [20を19に修正] 日 晴

教師・パウラ?と共に[消去]Blühn Bach Kram に至る。絶景。

1903.07.210 [廿一の一を縦斜め線で消去] 月 半晴 雨

本日は、連隊の将校及び其^{その}知己の大郊遊にて、一行百余人。午前九時発車、Wolfgang に至り、次いで、汽船にて湖水を渡り、Scharfberg に上りしも、雨来たりて眺景なく、遺憾極まりなし。且つ、寒気劇^かし。下山後、ボート遊びをなし、Wolfgang に晚餐を喫す。陸軍の楽隊、常に楽を奏し、舞踏あり。夜半一時、帰宅す。此日は、(衛戍地にては)[行外追加]一中尉、戦時中隊の演習をなせり。

1903.07.221. [2を1に修正] 火 雨

戦時中隊の演習の筈なりしも、取り止め。

1903.07.232. [3を2に修正] 水 雨 後 晴

歩砲連合の弾薬補充の演習。併し、全く役に立たず。中隊の弾薬車は、旗を以て標し、実際の為めには毫^{ごう}も益する所なし。而も、此演習は、一年に只一回なりと云う。可^{しか}憐^{この}。前衛大隊の演習なりしが、大隊長は、敵を距てる二三百米の地に全大隊を展開し、深重に余に説明して曰く、前^{へだ}エなるが故に、予備を要せずと。大隊長は、嘗^{かつ}て参謀官たりし人、無能。可

憐。該演習中、師団の、弾薬排列を概したる砲兵車(実際の弾薬車なり)[丸括弧]を急射せしめ、弾薬車は驚きて、只、^{ただ} 駢足^{かけあし}にて、敵地を脱する等。是^{これ}にて砲歩の連合なりと云う。憫笑^{びんしょう}の至りなり。兵卒は百発、下士六十発、を携行し、中隊の弾薬車に約六十四発、師団弾薬車に約 [空白] 発の弾薬を有す。 [傍線] 千代崎へ手紙を出す。

1903.07.24. [4 を 3 に修正] 木 晴

ローマ^{ローマ}法王死去せるを以て、将校の多くは、寺に至りて其祭^{その}に列す。戦時中隊の演習。余は、dittrich と Reichenhall に外乗す。帰り来たれば、教師、来たり居れり。パウラ来訪。共に Hellbrunn に至る。

1903.07.25. [5 を 4 に修正] 金 雨

勤務休みを乞うて Königssee に至る筈なりしも、雨天の^やため止め、連隊教練を見る。連隊長は、敵前の散兵線の運動^{かけあし}は駢足^{しか}ならざるべからずと云う。適当^{しか}。併し、併立二個大隊が六個を群をなして常に躍進すると、敵前二三百歩まで前進するの癖あるは、同じ事なり。但し、此^{ただ}連隊演習^{この}にては、大隊の演習等よりも、大いに火戦術に適當なる所あるを認む。

1903.07.25. 土 雨

戦時中隊の演習なりしも、取り止め。

1903.07.26. 日 晴

午前、出発。Hankenstein [と]共に、Gmunden に Reich^と監督^{よだ}を訪い、依田少佐に邂逅^{かいこう}し、共に船にて Traunsee を渡りて Spitzwinkle に遊び、午後十一時、帰宅す。

1903.07.27. 月 雨

連隊教練なりしも、取り止め。

1903.07.28. 火 晴

~~連隊教練。想定を与えて散開演習をなす。~~ [消去] 午後、ハルより第四大隊来たる。停車場にて迎う。

~~1903.07.29. 水 晴~~ [消去]

^{えいじゅち}連隊及び衛戍地一般の競点射撃。余は、^よ第十等賞を得たり。

1903.07.29. 未水 [木を水に修正] 晴

連隊教練。想定を与えて、散開の演習をなす。射撃陣地近きに過ぐ。併し、此演習は、前来の演習に比すれば、大いに可なる所あり。連隊長の講評、亦、大戦の術に適當なる所あるを認む。但し、行進速度は並足多し。但し、近距離より展散開せり。依田少佐、来たる。共に Hellbrunn に遊び、後、Pitter に会食す。

1903.07.30. 木 雨

連隊教練なりしも、取り止め。依田少佐を訪問す。

1903.07.31. 金 晴雨[晴を雨に修正]

午前、連隊教練の筈なりしも、取り止め。依田少佐を訪い、共に古城趾を散歩す。

1903.07.31. [7 から 8 に修正] 土 雨 半晴

皇嗣 Franz Ferdinand 来たり。連隊の検閲(隨時検閲なりし)[丸括弧]をなす。一大隊の密集・散開教練。一大隊を戦時中隊に編成し、大隊外の一大尉をして、之を指揮せしむ。散開・密集。此兩検閲の時には、皇嗣自ら、敵状を与え、中隊長の下したる号令・目標等を部下が能く了解せるや否やを見る為め、自ら下士・兵卒に目標等を尋ねる等、中々人形にあらず。騎兵の襲撃を仮想すること、日本の演習に同じ。次いで、連隊の散開野外演習的運動。此日の出来、尤も可なりし。但し、敵前二三百歩の並足前進(突撃隊？[疑問符])[丸括弧]は、如何にも妙なり。次いで、集会所に会食。皇嗣、余に対しては、極めて親切。嘗て十一年前、日本にありし人なりとて、日本の話もあり、軍隊・軍艦等を大いに賞揚す。西洋の皇族は親切にして高慢ならざるは感心なり。

1903.08.02. 日 晴

依田少佐と共に馬車を駆けて、Königssee に遊ぶ。湖深百七十米を越、大ならずと雖も、湖辺の山嶽屹立、屏風の如く、瀧あり。極めて絶景なり。夕方、将校を招待す。

1903.08.03. 月 雨

大隊教練の筈なりしも、取り止め。依田少佐を訪う。~~依田大佐、連隊の将校を招待す。~~ [消去]

1903.08.04. 火 半晴

連隊教練なりしも、勤務口を乞う。依田少佐、出発。之を見送り、次いで Werfen に Paula を訪う。

1903.08.05. 水 晴

連隊教練。四大隊の演習・師団予備あり。敵の前進する一部を撃迫するの任務を以て前進。開進もせず
(損害要償の点ありならんか)[丸括弧]。前衛^{もう}を設け、其^{その}状、全く独立連隊の動作^{こと}に異ならず。而も、其
師団は直ちに其^{ただ}前面^{その}にあり。連隊は、開進もせず。併し^{しか}、展開は可成なりし。寧ろ、全般の形況、翼に
戦線^{こと}を向けずに異ならざりし。

1903.08.06. 木 雨

連隊野外演習。常ながら、此^{ここ}に附記す。前日の会合に、若し雨天なれば、午前五時半、連隊長に実施か
取り止めかを尋ねることを、記せり。而して、雨なるが為め、一時間出発を見合^{しこう}わし、次いで二十分間
行程斗^{ばか}[り]前進せし時、連隊長、来たりて取り止めを云う。無益のずぶ濡れ、何の事やら分からず。出
発せし位なれば、実施すべし。出発後取り止めけるなれば、早朝、連隊長に態々^{わざわざ}尋ねるを要せず。妙な
ことなり。午後、芝居を見る。

1903.08.07. 金 晴

練兵場に、連隊教練。一二の運動をなせしに過ぎず。實際、練兵場に於ける連隊の密集教練は、余り必
要なし。此^この国にても数多く行わざるは、理あり。

1903.08.08. 土 晴

来たる月曜日に軍団長の臨時検閲あるが為め、其^{その}下稽古の演習なりし。何処も同じ。泥縄的？[疑問符]
演習、半^{なかば}にして中止。蓋し演習連隊長の意に適せさしむなり。無益の演習、之^{これ}に過ぎず。何の事や
ら。次いで、連隊長は、大周章にて佐官等を会^いし、如何にすべきやを会議し、一中佐の意見上申にて演
習地を決定し、直ちに其^{ただ}地形^{その}を実査^{この}す。此際、乗馬将校は皆、隨行せり。次いで、連隊長は、防者は一
部^{もつ}を以て何処、營力を何処、攻者の歩兵は何処に、前^{えい}エは何処に、首^{しゅりよく}力^いは如何に展開し、攻撃点は何
処と詳細に決定す。前膳立の演習、笑うに堪えたり。

1903.08.09. 日 晴

羅馬法王、新撰^{しんせん}せられたる為め、寺院にて其^{その}式^よあり、余も参列す。将校等の、寺行きを嫌う、甚^{はなは}だ
し。殊に、連隊長の起立せるに拘^{かかわ}らず、部下将校が平氣にて腰掛居る等は、何彼に付けて軍紀の程度を
見[る]に足る。

1903.08.10. 月 曇 後 雨

軍団長親王の臨時検閲あり。後^{えい}エが不適當。過長の陣地を占め、優勢の前^{えい}エが過度の迂回をなし、後エ
が退却すべからざるに至る

迄、陣地を占領する等、不適當の点、多し。殊に、攻者が適當の陣地(射撃の為)[丸括弧]を有するに 拘^{かかわ}らず、之^{これ}を占領せず、森林をくぐりて、大いに時間を失う等、^{あやまち}過 の大なるものか。昼食の時、連隊長退去後、将校が勝手の講評をなし、及び、軍団長見送りに大尉以下は行かずとて、之^これは、一大隊長、^{すなわち}即 、古參中佐、の意より出たりとて、満悦するものある等、ごた～～[濁点]たり。

1903.08.11. 火 晴

軍団長の検閲にて、本日は休み。インスブルク屯在の部隊が当地に来たる(機動演習の為)[丸括弧]為、乗馬将校は、練兵場迄出迎。懇親の意、見るべし。軍団長の過日の演習の講評は、^{よろ}宜しかりしも、聞く所によれば、親王等より悪しき講評を受けたるものは、最早、進級するの見込みなし、故に、親王等^{つと}は、力めて悪しき講評をせずと。

1903.08.12. 水 晴

午前、連隊の競点射撃。標的三人勝的(二百歩^{初年兵}三等射撃[初年兵を三等射撃に修正])[丸括弧]・同□的(二百五十歩、^{二年兵}二等射撃[二年兵から二等に修正])[丸括弧]・同(三百歩一等射撃)[丸括弧]。中央^{ただ}の的に圈を描き、満点十発六十点、最高点は五十一點(初年兵)[丸括弧]なりし。十発発射後、只、点数を示すのみにて、各発、弾着を示さず。賞品は、皆(将校の^{きょきん}醵金なり)[行外追加]、金貨及び銀貨にて、勲章的に装飾を施す。クレメントに招待せらる。

1903.08.13. 木 雨

午前、連隊の競点射撃。昨日の競点射撃とは異^{こと}なり、昨日のは、大隊の高点競争射撃にして、今日のは、連隊のなり^{もつ}マイスターシャフトシーセン。昨日は、高点を以て争い、今日のは、命中弾の多きものを最高とす。命中弾同一大尉は高点者優となる。引越の準備をなす。

1903.08.14. 晴 金

乗馬の左足、腫れ上がりたるの報に接し、^{ただ}直ちに療治を施されむ。練兵場に連隊教練なりしも、行かず。昨日、Felix Müller の小児に小箱を送る。^{この}此日、宿所を転じ、Hotel Römischen Kaiser に入る。

1903.08.15. 土 晴

午前八時、自転車にて出発。Golling に遊び、^{ママ}Salzachöffen を見る。夕方、雨、来たる。

1903.08.16. 日 晴

この マ マ すこぶ や
此日、Lichtensteinkramに遊ばんとせしも、昨夜の雨にて、道路、頗る泥濘となりたる為、止め、
Golling の瀑布を見る。壮大。絶景なり。夕、ザルツブルクに帰る。

ページ：55

1903.08.17. 月 晴

練兵場附近に連隊の野外演習。地形、沼地「モーア」[かぎ括弧]なる為め、大いに運動の自由を欠きた
れども、一中隊斗りの兵が、独断に敵を攻撃し、百米足らずの所に敵と衝突し、連繫運動の出来ざる
等、演習としては、見るに足るもの毫もなし。丸で小供の遊びなり。是は、地形の為に大いに恕すべ
きものもありたり。其後、連隊長は一方に退却を命ず。其状、退者・進者共に分列式をなすの状あり、
抱腹の至りに堪えざりし。

1903.08.18. 火 雨

この
此日は、皇帝の誕生日なれば、練兵場に分列式ある筈なりしも、雨の為に取り止め、寺にて式あり。
この この マ マ ひしゅう
此頃は、此地方の村祭りなりければ、晩方、公園に訊灯を見る。卑醜、云うべからず。

1903.08.19. 水 曇 雨

機動演習の初日。午前六時半、出発。三十五 キロメートル 吉 米 を行進して(一時十五分の大休止)[行外追加]、
Friedburg に宿営(午後二時半着)[行外追加]。此地の大人の模型を見る。彼は二十八歳にて死せりと。身
長八尺六寸。落伍兵は、意外に少し。一時間の大休止。午後三時四十分着。

1903.08.20. 木 曇 雨

約四十 キロメートル 吉 米 を行進して、Moos に宿営。落伍兵、稍、多し。連隊長、大いに怒る。但し、初めの二日
に 如 此 行軍をなすは、礎なり。

1903.08.22. [2 を 1 に修正] 金 晴

戦闘射撃の演習あり。弾薬二十五発。師団長、^{また}亦、来たる。部隊の動作は、^{やや}稍、適当なりしも、目標の
現出する毎に、右に左に^{しばしば}屢々目標を変換するは、面白からず。実際は出来ざるならん。目標の配置動作
は、全く空想同一の目標を^{あらわ}現したり立てたり。何の事やら。故に、一実員[一を実に修正]部隊は、初め
より終わりまで一照尺にて射練せり(射練開始の陣地は、^{すなわち}即、最終の射撃陣地なりしを以て、攻者な
るに^{かかわ}拘らず)[丸括弧]。別に^{みょう}妙はなかりし。此演習は、戦時人員の大隊にて行えり。終で、立□戦闘
射撃を行う。^{すなわち}即、両部隊、相並んで^{同人}員、同じ目標に向けて射撃し^{目標は、命中}すれば、^{その}命中すれば、其部隊より一
人を減らす。^{しこう}而して、^ままず、百分の五十を^{たお}斃せし部隊、^{かち}勝を得るなり。勝ちたる部隊は、連隊長より

五十クローネを得たり。時間と弾薬と教育とに余裕あらば、^{かくのごとき}如 ^ま此 演習も先ず可ならん。先ず遊びの演習と云うて、可なり。^{この}此日、^{キロメートル}演習後、十 吉 米 ^{はがき}を行進して、Haag に宿営す。千代崎へ端書を出す。

1903.08.24. [4 を 2 に修正] 土 晴

ページ : 56

^{この}此日、Haag に歩砲連合の戦闘射撃あり。目標は、昨日のものと全く同一にして、^{ただ}只、砲兵的を若干附加したるのみ。師団長も来たりたり。歩兵の展開射撃法は、^{まずまず}先々上出来ならん。但し、^{ただ}昨日の講評にて師団長、^{最初}一斉射撃をなすが、^は適当ならんとの意を奉じ、^{ほう}散兵線が、数次、小隊の一斉射撃をなせしは、滑稽なりし。^{その}其後、頻次の目標の変換、昨の如し。砲兵の射撃に至りては、^{ごう}全く要領に合せぬ弾着こそ^{しら}調べて距離を知れることとて、^{ぶんかく}適当の所に^{これ}落着せしも、信管分画、之に一致せず。高く低く着発等、無気なりし。殊に、歩兵が、千二三百米の所より展開して、七八百米の距離にて^{りくぞく}陸続行進せしに^{かかわらず}不 拘、^{これ}之に対する援助射撃の打法は、丸で見るを得ず。^{えい}殊に、^{ひと}前エ歩兵が、^や少しく暴進して、独り敵前六百米の地に達せんとせし時、砲兵は、俄然、射撃を止めて、陣地変換をなし、^つ次いで、第一発を射撃せし時までも二十五分以上を費やせり。□□、第二陣地の進入の如き、敵前に側面行進をなす等、何事やら。^{あ あ}嗚呼、^{この}此二十五分間！[感嘆符]前膳立の演習、昨の如し。起伏、^{ごう}理由に合せず。本日の射撃は、歩兵一大隊・砲兵一小隊^八の^{しか}連合射撃なりし。而し、師団長の講評は、極めて良好にして、前後^{かくのごとき}如 ^か此 静肅、且つ、欠点なき射撃は見たることなしと。抱腹の至りなり。命中 30/100^{尤も、的数なり}。[空白]歩兵の行軍力の強き点、感心の外なし。Haag より Grieskirchen まで^{ほか}十六 吉 米 ^{キロメートル}以上を三時間以下。二時半少し以上にて行進せり。嗚呼、^{あ あ}此行軍力！[感嘆符]午後五時、Grieskirchen に到着 ・ ・ [点 2 つ]何時もながら、兵卒は、^{しか}納屋に^{しばしば}藁上の宿営。将校は、常に室に入る。而も、将校は、^{この}屡々、贅沢を云い、^い此室は悪し、替えよ、等と設営士官に謂う。嗚呼、何等のこと□。

1903.08.253. [5 を 3 に修正] 日 晴 休日

^{この}此日、Passau に遠征を試みんとせしも、^{ちつきよ}連隊長は外出を禁じ(理由なし)たる為め、終日、蟄居。ズボン及び小説を得たり。

1903.08.24. 月 晴

午前六時、出発。四大隊・砲一中・騎一小の部隊と歩二大・砲一中・騎一小の部隊との対抗演習あり。騎兵部隊の小なる為め、^{この}十分に搜索をなすを得ざると、地形の面白からざる為め、演習は兎戦に類するものとなれり。正午、宿営地に帰る。此日の演習は、大いに不出来にして、攻者の前衛は孤立して、敵

前百歩まで近接したり。蓋し、本攻部隊は、大いに迂回して敵の左翼に回りたいばかり。[空白]演習には、従卒は出場せず、戦闘正面も、亦、過広なりし。

1903.08.25. 火 晴

午前、二大隊、砲二門ずつ、騎兵十二騎ずつの対抗演習あり。午前六時出発。十時、既に帰宿す。演習は、先ず上出来の方なりし。但し、地形上、砲兵陣地なかりし為め、此れには余程窮したるものの如かりし。東(北)[丸括弧]軍司令官が防禦に決心せしは、適當ならず。

ページ : 57

本日、第一期予備兵、Hall に帰り、昨日、第二期予備兵、Hall より来たる。演習時日、十三日間。第一期のものは、只、Hall より此地に行軍せし位のものに過ぎず。往復に偉大の旅費を費やし、収支相償す。可 憐。

1903.08.26. 水 晴

午前、旅団の対仮設敵演習あり。歩五大隊・キー小隊・砲二中隊。本日ののは、地形が、稍、適當なりし為め、諸兵の動作連繫、始めて大兵团の火戦戦術に適當なるものを現出するを得たり。射撃の開始、射撃陣地の撰定(約四百米)[丸括弧]、先ず～～可なり。理想に合したる演習なりし。第二次予備兵、来たる(午後二時半)[丸括弧]。

1903.08.27. 木 晴

師団演習(旅団対抗演習の初日)[丸括弧]。想定 of 作り方(食事□□及び其攻撃)[丸括弧；行外追加]か、或いは、出発時間規定(宿营地移転)[丸括弧；行外追加]の、悪しかりし為め、一方、軍は集合所に集合して、支隊長が想定を話す最中、既に敵襲を受けたる等、ザマなし。地形の不適當なると、耕作物を顧慮すること非常なるとの為め、演習は全く見るに足らず。両敵、初めより二百歩位に衝突し、只、両翼に戦線を迎して、遂に突貫に終われり。又、一方、軍は退却するに当たりて、百米位ずつに歩みの後エ戦をなす等、理屈に合せず。殊に、奇なりしは、該隊長、初めより一中隊の騎兵を派遣せしに、敵と衝突後に至るまで、毫も敵状を報告せざりしにあり。如 此 結果は、両軍の滞在地が余り近接し過ぎたる為ならん。敵旅団は、Peuerbach にあり。何故に、演習中、宿营地を転せざるやを問えば、安値なるが為なりと云えり。但し、是のみにてはあらざるべし。尤 も、軍団演習は戦時の通り行ふと云えり。後、連隊付中佐に問えば、又、安値なるが為なりと云えり。一地に止まりて旅団・師団の演習をなすX[消去]ことを得る時は、宿营地を転せずと。我国の方が適當なり。

1903.08.28. 金 晴

仮設敵に対する師団の演習なりし。今日のは、展開の方法・射撃等、先ず適当なり。遂に突貫迄行う。
師団長は、師団予備の隊長が、其所在地・隊形等を報告せざりしとて講評し、且つ、自己の意に反して
攻撃が右翼に偏し過ぎたりと云えり。但し、師団長が、一小部隊長に至るまで、懇ろに自己の見たる
所を講評し訓誨するの親切なるは、感心なり。

1903.08.29. 土 晴

此日、皇嗣 Franz Ferdinand 及び軍団長 Eugen 親王、来たりて、師団を検閲す。最初は、旅団の対抗に
して、両敵共、営力を森林中に用い、其結果、遂に、云うべからざりし混戦となり、殆んど価値なき演
習となる。師団長は、良好なる兵器を有する軍隊の演習としては、注意すべきこと、森林は、大吸引力
あり、兵を呑む、慎むべし、とて、之を戒めたり。第二回は、師団の

ページ : 58

仮設敵に対する演習にして、此演習は上出来なりし。何時も仮設に対する演習の上出来なるは、不思議
なり。軍団長及び皇嗣が、他力を借らずして、是等の演習に 着 し、講評するは感心なり。又、余に
は、握手の礼を与えられ、手前共に対せらるに感服の外なし。

1903.08.30. 日 曇 後 晴

本日は休日。午前、五六の将校と共に汽車にて、独乙バイエルンの一都、Passau に遊び、寺等を見物
す。昼食の際、北清事件に支那に行きし一中尉に遇う。午後三時、汽船にて Donau 河を下り、Linz に着
す。Passau は、Inn・Donau・Ilz 三河の合流点にあり、Ilz は黒、Donau は赭線、Inn は濁三色線をなし
て流るの状、奇なり。Donau の兩岸は、高からざる山にて、景色、随分可なり。後、汽車にて、九時
半、宿营地 Neumarkt[-]Kallham に帰る。

1903.08.31. 月 晴

午前、旅団の対抗演習あり。演習の出来は指揮官によることなれば、一般に、講評すべからざるも、本
日の程出来の悪しきは先ず～なし。敵状を察しせずして、前衛が孤立前進するは、本日も亦、然り。
適当なる射撃距離にあるに 拘 らず、どし～前進するは、突貫戦術を尚貴ぶにはあらずや。但し、本
日の講評に、師団長は、射撃戦と射撃距離に就いて懇々訓諭する所ありたり。退却者が、五歩十歩に止
まりて敵を抑止しつつ退却する等、全く現況に反す。而も、是は出来得べしと考え居れり。甚 だしき
は、部隊の混乱錯雑せるにも 不 拘、退者が第一戦陣地を距てる六七百米の距離に止まりて、敵を逆襲
せんとするにありき。兵卒・将校は、のらくら、疲労にもよるべけれども、退者も進者も駆歩を用い
ず。演習的行動の 甚 だしかりしは、副官等が、伝令の為め、劇烈に射撃せる我部隊の前面を、平気にて

さま ぜん しか
様の然す等。而も、審判官等は、之を見て平然たり。豈 甚 だしからずや。本日は、親王少佐が、旅団
を指揮せり。是、脱格ならんか。本日、演習に就いて注意すべきは、本隊先頭の部隊を支隊長が他に使用したるに、連続の保持と命令の連繋とが十分ならざりし為め、後方の本隊は皆、此部隊に続行し、肝心の場合に前^{えい}は孤立。支隊長は、本隊を求むれば、己れの欲する所にあらざりし等、注意すべきことなり。[改行]

損害賠償が馬鹿に高価なるは、可 驚 。此原因よりして、演習の指導が非常に困難なるに至るならん。
一後備騎兵連隊は、二日の検閲の為に三千グルデンを払い、騎兵師団、附属せらるる演習、重に^{おも}軍団皇帝[軍団を皇帝に修正]演習等にては、一日一万グルテンの損害賠償をなすは、常なりと云えり。其作物は、牧場野菜なり。旅団演習・師団演習に戦時的行動をなさしめざるは、

ページ : 59

一地に止まるに比して、金を要し、当軍団の如きは、チロールより上部エステルライヒ迄、軍隊を引き出^{とど}しての演習なれば、其^{その}予~~✕~~行軍[行軍に修正]・宿泊等に大いに金を要したる為め、なさざるなり、と云えり。或いは、然らん。併し、如 此 は、十分に戦時的運動をなすを得ず。他の軍団にては、旅団演習より既に戦時的、即^{すなわち}、日本の如く行う所あり、と云えり。蓋し、チロール附近にては、山高く谷深く、面白き演習をなす能わざればなり。

1903.09.01. 火 晴

戦時人員の旅団を編制し、仮設敵に対する演習をなせり。仮設敵に対する演習が常に取付けにて、実際に過ぎ状況を視察現出[視察を現出に修正]するは奇なり。此日の演習も、火戦の術に適当なる射撃開始・其^{その}持続等を見るを得たり。殊に、仮設敵には、指揮の自由を与え、逆襲をなさしける等、適当なる所ありたり。[改行]

本日午後、Schärding に、Wunsch 中尉^とを訪い、同地に宿泊す。

1903.09.02. 水 晴

此日、休日。宿営地に帰る。新兵増加案、^{おうこく}奥国議^{こうこく}会に招賛せられて洪国議^{こうこく}会に招賛せられざる為め、三年兵は、^{けだ}帰休するを得ず。蓋し、新兵、入営するを得ざればなり。中隊長は、中隊を集めて此^{このゆたつ}論達をなし、次で、如何なる感情を与えたるやを問う。^{おう}奥兵は、殆んど無感覚なるも、伊兵は、泣けり。様なし。蓋し、^{けだ}帰休兵は、九月五六日頃には帰休することを得るものと心得、夫れ〜糊口の道を求めありしに、突然帰休することを得ざることとなりたれば、是等の口はオジャン[ひらがな表記]となりたるも、^{おう}奥兵の自若たるには感心なり。或いは、鈍漢なるが為ならんか。

1903.09.03. 木 晴

^{この}此日より、師軍[師から軍に修正]団演習(対抗の師団)[丸括弧]開始の爲め、宿営地を転じ、Lambrecht
に至る。^{この}此地方に集まりしもの、我師団、第八師団、国防師団。行軍力は強し。一時間に休憩時間を加
えて優に五 ^{キロメートル}吉 米 を行進す。演習中、一見習士官は、自転車に乗り、百姓の商人服を着、敵状を偵察せ
り。

1903.09.04. 金 晴

師団の対抗演習あり。^よ余は、左側支隊と共に進出したれば、^{その}其詳細を知るを得ず。遺憾なりし。十七大
隊対十二大

ページ：60

^{ただ}隊。但し、大隊長以下が、敵が何処にあるやら、戦闘兵力は幾何なるや、如何なる区処を以て、敵の、
^{むけ}向て前進するや、の詳細を知らず。^{けだ}蓋し命令の与え方に不適當なるが爲なり。演習後、Taiskirchen に
宿泊す。

1903.09.05. 土 晴

我師団対国防師団の演習あり。本日、演習は、真に新戦術演習なりと称するを得べし。^う射撃・展開・持
続、^{その}其他、殆んど皆、要領に合し、^{ごう}適當なる演習なりし。国防師団は、一年兵役なるも、今日の演習に
て見れば、決して三年兵役の他師団に劣らず。^{ただ}但し、^い實際は如何や。^{かん}只、形のみにては、決して判断す
べからざるなり。[改行]

機動演習は、本日にて千秋楽。天候は申し分なかりしも、一回も前哨・露営・戦闘後の真の追撃・退却
等を演習せず。日々^{くしよ}の区処をなす爲め、軍隊は演習開始前に無益の行軍をなさしむべからず。「チロー
ル」[かぎ括弧]より遥かに軍隊を上部エステルライヒ迄引き出して演習すと迄は、感服せず。^{ただ}但し、兵
の戦時的行動、殊に、前哨・夜間の演習には、非常損害要償を要すと云えり。

1903.09.06. 日 晴

帰路行軍。午前五時出発。Waldzell に宿泊。酷熱なりし。[改行]
将校の従卒・馬卒は演習に出場せず。一将校(大尉)[丸括弧]が家族の用を弁ぜしたる爲め、従卒を家に残
したることを聞けり。^{はなは}甚 だしからずや。

1903.09.07. 月 晴

午前五時出発。Strasswalchen 宿泊。[改行]

機動演習の終日。^{すなわち} 即^{わが}、吾軍団長オイゲン親王は、狩兵第十大隊の一下士及び兵卒に金側・銀側の時計
を与えたり。^{これ} 是は、賞にて、先般、夜間演習の際、一下士哨が盗賊と誤認せられて憲兵より射撃せら
れ、指揮官たる一年志願兵は即死し、軍曹・兵卒は負傷したる際、^{がい} 該軍曹の指揮、^{よろ} 宜しきを得たり、と
の賞なり。^{この} 此兩人も共に負傷したるものなりし。[改行]

ページ：61

下士教育は、中隊にて行ふ。当国にても再役者は少なし。中隊長は、日く、高業国(^{ドイツ}独乙の如き)[丸括
弧]^{その}、其生活、百姓の如く^{ゆたか} 裕^か 且つ^{たい} 平らならざる為め、適当なる下士の再役者^う を得る、難しからざるも、
当国の如き百姓国は、百姓が一般に富める為め、再役者^う を得ること、^{はなは} 甚^{けだ} だ難し、と云えり。蓋し、再
役しての給料よりも、家にて遙かに^{たい} 平ら^う に生活するを得ればなり。[空白]新兵中の適当なるもの^{えら} を撰
び、^{これ} 之に特別の教育を与え(^{新兵卒業}後なり [括弧閉めなし]、六ヶ月乃至八ヶ月の後、下士となす。一年にして、一
等軍曹の階級に進むことを得ると云えり。又、定員外には、兵卒の給料を与えて下士に任ずることを得
ると云えり。

1903.09.08. 火 晴

午前、出発。目出度く、^{えいじゅち} 衛戍地に帰る。Römischen Kaiser に入る。

1903.09.09. 水 晴

訪問を始む。^と Felix Müller を訪う。夜十一時、Stadt Brücke 上にて、^{はからずも} 不^あ 計、中村健一郎氏に遭い、共に
Peterskeller に到る。夜、雨[降]る。

1903.09.10. 木 晴

今日は、先皇后の命日なれば、停車場前の肖像前に集まりて花環を供し、^つ 次いで、寺に至る。午後、中
村氏と共に古城址に到る。夜、中村氏と飲む。

1903.09.11. 金 雨

本日、外乗す。訪問をなす。寒し。

1903.09.12. 土 雨

寒きこと、冬の如し。近郊、雪降る。四顧の満山、皆、白し。1896[年]の皇帝演習には、一日に五万六
千グルデンの償金を払いたりとの話を聞く。

1903.09.13. 日 雨

休み。記事なし。

1903.09.14. 月 雨

記事なし。

ページ：62

明治 36 年

1903.09.15. 雨 火

記事なし。

1903.09.16. 雨 水

旅行準備の^{ほか}外、記事なし。

1903.09.17. 曇 木 [伊瑞旅行第一日]

午前三時二十五分出発。午後二時四十五分、Zürich に着し、Hotel St. Gotthard に宿す。

1903.09.18. 曇 金

伊瑞旅行第二日。午前七時、Zürich 出発。午後一時、Genevè に着し(Hotel Central) [行外追加]、散歩・見物す。噴水、盛んなり。午後、^{はからずも}不^あ計、小西君に遇う。

1903.09.19. 晴 土

瑞伊旅行の第三日。午前七時、出発。列車中にて、不計、下村君に遇い、Bern の停車場にて、不計、齊藤君に遇う。午後二時、Luzern 着。Hotel St. Gotthard に^{こせき}宿泊す。古昔グレッチャー時代の掘り穴、見事なり。

1903.09.20. 日 晴 瑞伊旅行の第四日

昨日、齊藤阿具君と、共に Rigi に登ることを約したれば(齊藤は Zürich に宿泊せり) [丸括弧]、本日は Luzern に滞在す。午前九時、船、^{まさ}将に発せんとするの際、齊藤、来たる。本日は日曜日なれば、切符に大いに割引あり、普通は約二十フランを要するも、本日は六フラン半を価するに過ぎざりし。朝来、^{どんてん}曇天。昨来、晴雨計下降。大いに天氣を怪しみたるも、決意出発。十時、船、Vitznau に着。^{ただ}直ちにアプト式鉄道にて登山す。傾斜は、^{はなは}甚だ急ならず。列車、約四千尺の高きに登るや、霧、^{たちま}忽ち晴れて、日本晴れとなり、下界は一面の雲にて、余を雲上の人となれり。アルプ連山は新たに雪降りて絶景、云わん方なり。下界の霧は、漸次、消滅して、湖水・山・市街・森林等、漸次、現出。其有様、又、云わん方なし。Hotel Rigi Kulm に昼食を喫す。高いこと、^{おどろくべし}可^つ驚。次いで、齊藤に別れ、^{おく}後れて三時、下山。又、船に乗れば、湖岸の景色、絶佳、墨画の如し。^{けだ}蓋し往路は霧の為に見えざりしなり。午後五時、家に帰る。

1903.09.21. 月 晴 半曇 瑞伊旅行の第五日

ページ：63

午前五時半、船にて Fluelen^{ママ} に至り、次いで、Mailand に至る予定なりしも、昨日 Rigi 行きに、Vierwaldstättersee を航行したれば、今日は、午前九時の急行列車にて急行することに決心したるも、運行表の見方、足らざりし為め、該列車は、最急行の Express にして一等のみの列車なれば、若し此列車に乗らんとすれば、十フランを払わざるべからざることを知り、更に計画を変えて、午前十一時の急行列車にて発足す。St.Gotthard 列車線の風光の明媚なる、草子に絶す。山高く、谷深く、懸崖、幾尺、流れ、^{すこぶ}頗る急、玉瀑と「トンネル」[かぎ括弧]の数は、其幾許なるを知らず。最長のトンネルは、殆んど三里半に余れり(十五 ^{キロメートル} 吉 米) [丸括弧]。及び、湖水の数も無数にして、山村落森林の関係、絶美。日本こそ、此位の景色は少なからん。午後八時半、列車の後れたる為め、初めて旅館 Pozzo Central に入り、晩食後、寺院の近傍を散歩す。百鬼夜行の有様、遙かに他に優る。十一時入寝。

1903.09.22. 火 晴 半曇 瑞伊旅行の第六日

伊太利^{イタリア}の氣候、他に比して、^{やや}稍、暖かなり。伊太利に入りて、直ちに眼に触れしものは、道路・家屋の、他に比して粗悪なる^{日本の道路に似たり。}、街道の狭き、道路の汚き、小便所等の設備の立小便的なる、^{その}其他種々の点に於て、欧州の他に劣れるものあるを認む。[改行]

午前八時、寺院に至る。壮麗、眼を驚かす斗^{ばか} [り]。次いで、百米以上の高塔に上る。寺は、^{ことごと}悉く石造。家上、^{ことごと}尽く歩行すべし。世界一と称するも過言ならざるべきか。次いで、Brera の博物館^{悉く耶蘇の國なりし}・墓場^{宏壮可驚。石碑の意匠、人を泣かしたるものあり。} [空白] ^{例えば、天使来て、小供に十字架の所に來たらんことを勧むるに、小児は合掌して、而も悲し相ながら之に従うの有様。婦が夫前の燈の何故に消ゆるかを怪しんで蓋を明けつつ不思議がるの有様、死者が其前、寝床に臥せるの有様、婦が泣きつつ夫の写真の上を眺めつつある有様等なり。一墓の価、数十万円に上るもの、多し。} [改行]

競馬場・凱旋門・死前の晩餐^{有名なるものなり}及び公園等を散歩し、手袋を買い、午後四時、旅館に帰る。此日、夜、出発(午後八時) [丸括弧]。十一時半、Genoa に着す。旅館 Hotel Germania。

1903.09.23. 水 晴

瑞伊旅行の第七日。今日は当地に滞在し、Maria Carignano 寺、海岸、Garibaldi 街、Roma 街、及び博物館等を見物す。道路、粗悪狭小、臭気^{はなは}甚^{ただ}だし。但し、景色は佳。尚、有名なる墓場等も見度ありしも、随分疲労せると、言語全く不通の為め、見合わせたり。蓋し、墓場は、Mailand に有名なものを見ればなり。書肆に至りて、写真画をかうに、^{しよし}賈金を与えて平然たり。直ちに観破して返却すれば、笑いて之を免納する等、根性の腐り加減、云う斗^{ばか} [り]なし。午後七時出発。

ページ：64

1903.09.24. 木 晴 瑞伊旅行の第八日

午前八時、Roma に着し、旅館 Max Weser に投宿。^{ただ}直ちに公使館を訪^とえば、書記官[消去]留守番一人あり。大山公使と共に来たりたりと云う。^{すなわち}即、僕と共に蔵田大佐を訪え、不在。更に公使館に帰れば、書記生甘利あり。正午、再び、蔵田を訪え、家にあり。快談し、共に昼食を喫し、午後四時、共に馬車^かを駆けて Garibaldi 銅像の山に登る。眺望絶佳。^つ次いで、Pincio (Popols を経て) [丸括弧]公園に遊ぶ。

1903.09.25. 金 晴 熱し [独国からの海軍将校と会う]

瑞伊旅行の第九日。甘利書記生、余を^よ伴^{とも}うて Pietre Kirch に至れば、不^{はからずも}計、独国駐在の伊東海軍中佐・築土海軍大尉^あに遭い、共に見物す。次いで寺院の博物館に至る。彫刻・画畫等逸物屈指するに暇^{いとま}あらず。^{ひるしよく}午食後、四時、更に共に電鉄にて、「セルサルム」[かぎ括弧]より持ち来たりしと云う(耶蘇の説教せし階段) [丸括弧]階段に至り、~~次いで~~^{すなわち}即 [次いでを即に修正]、Scala Santa、次いで、St. Giovanni に至る。~~八十本の~~大柱[消去]寺院は、左程大壮ならざるも法王を埋める寺なりと云い、且^かつ、高貴の人の墓あるを^{もつ}以て有名なり。次いで、更に Sepulcrum Cesti に至る。八十本の大柱、皆、御影石。^{おどろくべし}宏壮、可驚。海軍士官と共に晚餐を喫す。

1903.09.26. 土 晴 熱し

瑞伊旅行の第十日。午前十時、甘利・伊東・築土の諸氏と Museum National・羅馬^{ローマ}の旧市の城墟 Fora Rom 及び Colosseum に至る。博物館には、絵画・彫刻等あり。^{その}其建築は、矢張り、旧時の城墟の中に^{えら}撰びたり。美術心なければ、一向、分からざるも、世界一の博覧会物館[覧会を物に修正]なりと云えり。^つ次いで、馬車^かを駆けて、古代の大浴場 Tetrmen Caracalla[tt を r に修正]及び地下の墳墓 Catacomben に至る。浴場には、数百人浴することを^う得ると云い、地下墓には二十万人を埋めれるを^う得べしと(其延長、十七^{その}吉^{キロメートル}米^{おどろくべし})。可驚。^{その}其以前、Museo Capitol、Palast Conservatoren に至る。皆、博物館なり。

1903.09.27. 晴 日 熱し

瑞伊旅行の第十一日。昨日の諸氏と共に、先帝・先々帝を葬れる寺院(?) [疑問符を行外追加]Panteon に至り、次いで、Pincio を散歩す。午後、郊外、伊国統一戦の時、^マピエモン^マの兵隊が城壁を破壊して城中に進入せし旧蹟(今は修理しあり。紀念として此に文字を彫刻し花環を供せり) [丸括弧]を見る。伊藤^マ乙二^マ郎・築土^マ次郎氏、今夜発足す。

1903.09.28. 晴 月 熱し

瑞伊旅行の第十二日。午前、蔵田大佐訪問。次いで、市街を散歩し、襟留めを買う。又、Custozza の地図を買う。^{ひるしょく}午食後、大佐を^と訪い、夕刻、大佐の御馳走を受け、午後十一時五十五分発の汽車にて発足す。

1903.09.29. 晴 火 極熱

瑞伊旅行の第十三日。午前七時、Neapel 着。^{ただ}直ちに Hotel Haßler に入る(此宿は悪しき宿なりとか後に~~て聞けり~~。但~~て~~[消去；この日の最後に回している]Pompeji 行きの切符を買い、午前九時半着。途中、^{マ マ}Venus 噴火の状を見る。壮大なり。山は、先月噴火、^{はなは}甚だしかりし^{きけん}為め、危嶮なりとて、中腹までこそ登らせずと聞きたれば、余は登らず。案内人は五フランを請求す^よ。一時間五フランの約束なりと^{てごまかさんとせり。狡可惡}面倒臭ければ、一フラン多く与えて放ちけり。ポンペイの城墟は、人をして追憶の念に堪えざらしむ。古代の風俗も、見るを得。^う枕画あり。敷石の上に陰茎を画くもの、石像に殊文・付けたる陰茎あり^{聞く陰茎は幸福を持ち來たすの福印なりとか。目下、西洋婦人の頭飾りに角等を用いたるもの多し(ぶら下がる)}。
[さらに2行表記]。之れは、古代の此風、即、此時代には、^{ママ}金と陰茎との重さを^{ママ}重り比べるものあり。陰茎からの噴水あり。女郎屋の看板には、石造の陰茎あり。妙なものなり。風呂屋の構造、大理石にて造り、湯の温め方等、適当なり。モザイクの構造、能し。博物館には、人、猫・犬・馬・鶏等の石化したるもの、器具の発掘せられたるもの等、多し。□鼻の^{きわみ}極なり。道路は狭し。家も低し。一階ならん。道上、人道・車道の区別あり。車は、奴隷が引きしものなりとか。右側より左側に移る為めに、途中に大石二三を並べたり。成る程、馬等にては、邪魔になり、行けざる訳なり。帰途、^{マ マ}ヘタス山に登る。裸美人を見よとて勧む。うるさし。^よ余は見ざりしも、危嶮^{この}此上なしとか。二時五十五分発の汽車にて帰る。Neapel 着後、一仏婦人に^あ遇う。共に妙に、着後^{ただ}直ちに^{ママ}Pocillipo 及び Aquarium を見る。景色は、全く見るを得ざりしも^{時、賑かり}夜^{ければなり}景、又、大いになりし。Hotel Haßler に入る。後にて聞けば、^{この}此宿は^あ悪しき宿なりとか。余には、何事もなかりしは、幸福なりし。

1903.09.30. 晴 水 熱し 瑞伊旅行の第十四日

午前七時、宿を出て、途中、^{はがき}画端書等を^つ買い、次いで、博物館に至る。館は、目下、整頓中にて、上階を見るを得ざりしは、残念なりし。大理石銅像の古きもの、ポンペイの掘出物等、中々見るべきもの多かりし。次いで、S. Martino に登る。^{ママ}Sailbahn なり。^{この}此地方の^{やつこぎ}奴気の車案内等を^{さうよう}勧めけるの蒼蠅さ加減、^{たま}溜まらず。^よ余の、常に黙して通過せり。^{この}此寺にも博物館あり。

見事なりし。^{この}此寺よりの眺望は絶佳。全く昨日の欠を補いたり。午後二時五十七分^{停車場にて食事す。}発^{高さこと夥し。}にて、Rom に^{ただ}帰^とり、直ちに蔵田大佐を訪い、晩食を御馳走になり、十一時十分発の汽車にて発足す。

1903.10.01. 木 晴

瑞伊旅行の第十五日。午前六時、Hotel Helvecia に入る。午前十時、Museo Nazionale・Ufficio・Pitti を遊覧す。彫刻・絵画等の蒐集の盛んなる、草紙の尽くす所にあらず。Ufficio にて、^{はからずも いしわた}不計、石渡博士に^あ遇う。同氏は養蚕研究の為に渡来せし人なり。共に昼食を喫し、^つ次いで、馬車を^は馳せて Cascine・Boboli 両公園に遊び、晚餐後、別る。

1903.10.02. 金 晴

瑞伊旅行の第十六日。午前十時より S. Lorenzo、Accademia delle Belle Arti、Palazzo Crocetta を見物し、正午少し過ぎ、帰館。午後三時発、同十一時半、Venedig 着。旅館 Italie Bauer に入る。

1903.10.03. 土 曇、後、晴

瑞伊旅行の第十七日。成る程、Venedig は水上都なり。但し、水は汚し。^{ただ}蓋し、全市街の汚物、^{けだ}尽く^{ことごと}此に入る為めならん。馬車の如きは、一台もなし。只、^{ただ}Gondle^{マ マ}は、至る所、^{しか}数を知らず。併し、徒歩^{おびただ}にて行けざる所多ければ、足元を見て高価なることを云うこと、^{おびただ}夥し。町中は狭し。橋は少なし。
町中は、先ず二米位ならんか。時に、稍、広きもあり。非常に地図を研究するにあらざれば、行くこと、非常に困難なり。午前八時頃より市街見物に出掛け、Parazzo Marco、S. Marco、Palace Ducale (Dogenpalast) [丸括弧]、Academia、Fraru、及び公園絵画博覧会等を見、大運河を小蒸気にて下る。眺望絶佳なりと称せらるる Maggiore の塔に上がらんとせしも、^{てんらく}昨年顛落せし為め、今は、再建中なりとの事を聞き、見合わせ、午後六時出発。同九時、^{ママ}Verona 安着。Hotel riva St. Lorenz に入る。小島・佐々木・浄法寺等も^{ここ}此に宿れりとの事を聞けり。

1903.10.04. 日 晴

瑞伊旅行の第十八日。午前、銀行に至り金を換え、^つ次いで、古代の劇場を見る。日曜なれば入場料なし。次いで、Villa Franka に至り(汽車行) [丸括弧]、昼食後、Custoza に至る。目下、桑樹繁茂。^{せきじ}昔時の戦況を追想するに^{よし}由なし。余の登りし塔は、^よBelvedere に在り、視界極めて広く、一目全戦場を見る^うを得。塔下、古骨、山の如し。内に頭骨に銃丸を附したるものあり。

ページ : 67

姓名の分かりたるものは、^{その}其名を記す。午後九時、帰館。本日、昼食の時、^{ただ}贗金を渡さんとせり。直ち^{かんば}に観破、返却す。

1903.10.05. 月 晴、後、曇

瑞伊旅行の第十九日。午前五時出発。Desenzano に至れば、舟、既に^{おく}発して、^{ぼか}後るること三分間斗[り]。同国内に於て、而も、連絡切符を発買するに似合わざること。但し、此れは、伊国汽車の常に遅

着するの罪なり。Gardasee の雄大、巧緻なる、草紙の尽くす所にあらず。遙かに Königsee に勝る。総て、Bozen 迄の溪間の景色、云わん方なし。七時半、宿 Victoria に入る。一度、Gardasee を超えて奥国に入れば、人、皆、独乙語を話し、故郷に帰りたらん心地せらるるも、可笑し。斬髪、丸頭となる。

1903.10.06. 火 晴

瑞伊旅行の第二十日。昨夜、中隊長の親属を尋ねたるも、姓名忘れたる為め、遂に見当たらず。午前八時四十分出発。午後一時、「インスブルク」[かぎ括弧]着。直ちに乗り換えて「ハル」[かぎ括弧]に至り、会食場に将校を訪う。

1903.10.07. 水 晴

瑞伊旅行の第二十一日。午前九時出発。インスブルクに至り、Hauptmann Andreatta を訪い、共に散歩後、昼食の御馳走になり、為に時間を後れて、午後九時、München に至る。伊達大尉、停車場にあり、共に晚餐を喫す。

1903.10.08. 木 晴

瑞伊旅行の第二十二日。伊達大尉と共に、Englisch[er] Garten・Denkmal・Pinakothek・Graspalast-Bavaria 等の見物をなし、後、当地滞在の日本人両三名に遇い、玉突の後、更に快飲す。

1903.10.09. 金 晴 後 少雨

瑞伊旅行の第二十三日。旅行出発以来、本日始めて小雨に遇う。伊達大尉に迷惑を懸けざる為め、本日は単独にて見物す。National Museum は、清拭中にして、見るを得ず。Glypothek・Schacksche Gemäldegalerie・Basilika・Propyläen 等を見る。

1903.10.10. 土 雨 後 晴

瑞伊旅行の第二十四日。午前、佐藤氏と共に Residenz 見物に行く約束をなせしも、同氏は来たらず。独り見物に赴く。壮麗、可驚。停車場にて入浴。三マルクを徴収せらる。

ページ：68

1903.10.11. 日 晴

午前九時出発。伊達侯爵と共に Chiemsee に至り、王宮を見る。金、又、金、壮麗、云わん方なし。午後六時、伊達氏に分かれ、午後九時 Salzburg に帰着す。此日、田村少将逝去のことを聞く。Römischen Kaiser に入る。

1903.10.12. 月 雨

朝、銀行に至る。家探しの外、記事なし。

1903.10.13. 火 曇

記事なし。新兵の一部、入営す。斬髪。服等、支給。入浴後、不動の姿勢等をなす。我国のものに異なる、なし。

1903.10.14. 水 曇

記事なし。此日、新兵の大部、入営す。蓋し、徴兵区の異なるが為めに、距離の遠近に従いて入営期に差あり、なり。不都合なく我中隊は、全員三十四名(病気等にて歸りしものもあり) [丸括弧]。外国より来たるものは、尚、遅く来たと云う。何等の不都合。新兵の人員は、中隊全員の数に応じて各中隊異なり、隣の中隊は、四十三名等、云えり。新兵は、五人乃至六人の各班に分け、班長は、軍曹・伍長・上等兵・兵卒等にして、定まりなし。適当なるものを取りて、班長、教官となすと云えり。助教はなし。倭を取ると云えり。一年志願兵は、別に教育す。其数、五十名に余れりと。

1903.10.15. 木 曇

新兵の姿勢の出来居るには感心の外なし。歩調も軍隊的にこそあらざれ、足並みを揃え適当に歩行す。習慣は、恐ろしきものなり。兵の教育は、我国のよりは遥かに易き様、思わる。殊に、チロールの民は皆、射撃を能くするが故に、一層便利なり。教え方は、曾て聞く独乙風とは異なり、従前の我国のものに似たり。新兵掛は古参将校を以てす。最初の教育が大事なりとの理由より推せば、此方、得策ならんか。

1903.10.16. 金 雨

新兵の教育は、最初は不動の姿勢、及び、柔軟体操・器械体操の一部のみなり。学科は午後一時間行うのみ。

1903.10.17. 土 曇

新兵、午前八時より十時迄。午後は、二時より四時迄。次いで、一時間の学科を行う予定なり。本日は、土曜日なれば、午後は柔軟

ページ : 69

体操のみを行う。午前も柔軟体操。新兵の姿勢の出来居るは、感心の外なし。本日、外の中隊にて、助教を用い居るものあるを見る。

1903.10.18. 日 曇、後、雨

新兵は、外出せず。舎内に滞り居れり。但し、日曜^{ただ}なれば、練兵はせず。

1903.10.19. 月 雨

二日酔にて、頭、痛し。新兵は、右向左向後転回、柔軟及び執銃の柔軟を行う。学科は、是迄^{これ}は、上官の官姓名・武器・被服の名称等を教ゆ。連隊番号及び連隊の大隊は何処にあるや等も教ゆ。本日、パウラに最後の通告をなし、公使館付武官に旅費請求書を出す。

1903.10.20. 晴 火

近郊の満山、皆、白し。競馬あり。早足にて人は二輪車上に乗る。妙な競馬なり。Trabrennen と云う。新兵は、例によりて柔軟・器械・執銃の体操を行う。馬の足、腫れたり。

1903.10.21. 晴 水

新兵の教育、全く昨の如し。最早、新兵は足並みを揃えて行進するを得。但し、教えたるにあらず。自然に歩かしたるなり。学科は、新兵掛、教授せず。曰く、上官の官姓名・武器の名称・大[消去]手入れ・部隊の称号・被服装具の名称・武装法等の如きは、見習士官・軍曹に教授せしめて可なり。^{ただ}(但し、毎々何を教えよと命令す。)[丸括弧](日課表を張り出す如きことなし。)[丸括弧]野外要務のみ。操典は、軍紀等に関する緊要なるものは、将校自ら之^{これ}を教ゆ。故に、最初は、時々看視に行けば足れりと云えり。[改行]

余^よの馬卒、突然帰休するとの報告^うを得。急に両大隊に馬卒を探せむ。第五中隊のは処罰中、第六中隊のは病気、他にはなし。突然にも程のあるもの。業務の連絡に於て、如何^{おい}あるべきか。余は、^い甚^{かな}だ迷惑せり。[改行]

連隊長、午後二時半、営庭に来て、新兵教育を見る。新兵掛一人にて、将校なし。連隊長、曰く、或者は、コーヒ室に眠り、或者は、カルタ遊びをなすと。一笑。

1903.10.22. 晴 木

新兵の教練、昨の如し。競馬ありたれども、行かず。午後、兵棋^{へいぎ}を見る。其施行の方法、能く細事に渡り、^{やや}稍、^{ただ}適当なるを見る。但し、一

ページ：70

大尉に任せ切りにて、連隊長も連隊付中佐も大隊長も出場せず。是^{これ}は、如何^{いか}[なる]教[え方か]、思わ

1903.10.23. 金 雨

新兵の教練、昨の如し。今日、右正面・左正面・叉銃^{さじゅう}を行なうを見る。中隊長に招待せらる。千代崎より手紙来たる。

1903.10.24. 土 曇

執銃柔軟・徒手柔軟・敬礼等。午後、室の整頓。寺行。五時より一時間学科。照準銃の名称等なり。

1903.10.25. 日 晴

午後、ヘルブルンに自転車遊びを試む。新兵、^{なお}尚、外出せず。

1903.10.26. 月 晴

執銃・徒手柔軟・分解の歩法・叉銃・器械体操の初歩等。自転車にてアルムゴークラムに至る。

1903.10.27. 火 晴

昨の如し。^{ただ}但し、本日より、分解の歩法を始む。行進を教ゆるは、容易なり。新兵は、始めより^よ能く歩行す。

1903.10.28. 水 晴

ルンツア大尉と共に「ガイスベルク」[かぎ括弧]に徒歩遊山を試む。風光の絶佳、云わん方なし。夜、「ゴラ」[かぎ括弧]中尉に招待せらる。

1903.10.29. 木 晴

^マジロッコ吹きて、厭な熱さなり。柔軟・分解・歩法等、余り変わらることなし。Landwehr 新兵の練兵を見れば、分隊行進・折敷・伏臥等を行うを見る。皆、背囊を負えり。重からずや。学科を見る。五時半より六時半までなり。中隊長・大隊長・連隊長を間違えるものあり。経験なき下士(三年兵なり)[丸括弧]に任せ切りなれば、^{その}其遣り方、随分まどろこし。学科の時に、^{これ}照準を教ゆ。是等は、助手を使うて、数班にて行えば、可ならん。^{イタリア}伊太利語を話す兵は、^{なお}尚、別に行えり。

1903.10.30. 金 曇

練兵。昨の如し。記事なし。

1903.10.31. 土 雨

執銃・柔軟、右左転回。記事なし。

ページ：71

1903.11.01. 日 曇

千代崎への手紙及び写真帖の説明を^{したた}認む。^{その}其他、記事なし。風邪にて心地悪し。^{しか}然し、^ふ臥せる程にあらず。

1903.11.02. 月 曇

午前、行進中の右向・左向・回れ右、前後、柔軟。午後、寺墓[寺を墓に修正]参りをなす。余等も墓坊^よに至る。芝居に至る。

1903.11.03. 火 曇

砲兵連隊の Jagtrennen に招待せらる。次^ついで、連隊の集会所に皇上の佳辰を祝す。

1903.11.04. 水 雨

行進中の右向・左向・転回^{おりしき}・折敷等を教ゆ。柔軟。芝居に至る。

1903.11.05. 木 雨

柔軟・銃の操法。今日、初めて室内射撃を始む。姿勢を模索して、六発(五発) [行外追加]射せしむるなり。此室内射撃は、各自の銃にて射撃するを得^う。銃口内清拭せられざる時は、最初の一二発は不正確なるも、三四発よりは確実にして、略信用すべき銃の偏避を知るを得べしと云う。即^{すなわち}、一種軽便^{けいべん}の狭^{きようさく}窄射撃なり。各連隊は、一ヵ年六百クローネを此射撃^{この}の為に受け取る。即^{すなわち}、一中隊に三十七クローネ五十^こへ^うラ[傍線]なり。此れにて全冬間射撃するを得ると云えり。動物園を見る^{椰子と豹・虎と大の雑居}。柔軟、可^{おどろくべし}驚。

1903.11.06. 金 曇

柔軟^{徒手・風銃}。行進中の銃の操法。以前の演習を行う。

1903.11.07. 土 曇

四列側面整頓行進の演習。

1903.11.08. 日 晴

記事なし。自転車にて独^{ひと}り郊遊を試む。新兵は、其^{その}教育を終える迄は、単独外出をなされしめずと云[う]。

ページ：72

1903.11.09. 月 晴

練兵、昨の如し。射撃をなさしむ(室内の) [丸括弧]。午後、舞踏。

1903.11.10. 火 半晴

新兵、初めて練兵場に至る。□し。千代崎へ写真を送る。

1903.11.11. 水 雨

室内射撃・銃の操法・装填を行う。~~行進も行う。~~[消去]午後、舞踏。

1903.11.12. 木 曇

四列側面あり。行進中に、正面及び反対の動作・行進・^{おりしき}折敷等の演習。

1903.11.13. 金 雨

舎内の動作・銃の操法・装填・室内射撃。

1903.11.14. 土 曇 雨

行進中の^{おりしき}折敷・^{かけあし}駈足運動。午後、舎内の整頓。将校は、未だ検査せしことなし。

1903.11.15. 日 雨

記事なし。「シエラ」大尉に招待せらる。舞踏。

1903.11.16. 月 雨 曇

午前、営庭・舎内の動作演習なり。午後、新兵、始めて射撃す。将校、射撃して弾丸散布を見せしむ。

1903.11.17. 火 雨

室内射撃・装填・銃の操法。午後、種痘。

1903.11.18. 水 曇

新兵、射撃す。命中は可ならず。^{りっし}立姿なり。舞踏。^{弾丸に余裕あればこそ、如此ことも出来るなん。尚、過早にはあらざるべきか。}

1903.11.19. 曇 木

練兵場に至る。演習なり。装填・照準等を行う。

1903.11.20. 金 雨 曇

ページ：73

練兵場に至る。昨の如し。舞踏。河合少佐妻君死去の報を得。^う

1903.11.21. 土 雨 雪

室内作業。~~ハートル~~[消去]シースラー大尉の家族と共にフロイスチャーヘルに至る^{居酒屋}なり。

1903.11.22. 日 雨

記事なし。

1903.11.23. 月 曇

練兵場の運動演習。^{その}其他、記事なし。

1903.11.24. 火 晴

午前、練兵場の運動。午後、射撃。今日、始めて教練射撃を始む。今迄のは、銃の性質・散布等を知らしむるなり。

1903.11.25. 水 曇

練兵場の運動。^{その}其他、記事なし。

1903.11.26. 木 雪

練兵、昨の如し。シュラフィヤのリッターシュラークを見る。馬鹿らしさ、加減なし。

1903.11.27. 金 雪

室内作業及び営庭の運動。

1903.11.28. 土 雨

室内作業。記事なし。

1903.11.29. 日 晴

大尉アンドレアッタ[濁点なし]の~~父~~義父[消去して、義父に修正](妻の父) [丸括弧]死去の報を聞く。^{ママ}
[閉じ丸括弧のみ]

1903.11.30. 月 晴

小隊教練。室内射撃。新兵^{がかり}掛の将校^がを[がををに修正]遊獵に行くとして休暇を許し、下士以下にも休暇^{しこう}を^も与う。而して、若し将校に休暇を与うるとき

ページ：74

は、他隊の将校来て、新兵掛となる^{二三日間}。又、若し中隊長に休暇を^{うち}与う中は、他隊の古参中尉来て、中隊長代理をなす。不思議なり。

1903.12.02~~1~~. [二から一に修正] 火 半晴

練兵場、^{ふくが}伏臥。小隊教練。兵卒は、左顧右盼、頭右左の運動十分ならず。整頓・分列行進、出来ず。クレメント大尉に招待せらる。

1903.12.02. 水 雪

室内作業。柔軟・装填・照準。他、記事なし。クレメント大尉に招待せらる。

1903.12.03. 木 晴

練兵場に小隊教練を行う。

1903.12.04. 金 雪

室内作業。銃操法・装填・室内射撃。

1903.12.05. 土 雪 雨

室内作業。

1903.12.06. 日 晴

記事なし。

1903.12.07. 月 晴

練兵場の運動。小隊教練。

1903.12.08. 火 晴

祭日にて、休み。記事なし。日本より衣類到着。税金 20 グルテンを払う。

1903.12.09. 水 晴

練兵場に小隊教練。

1903.12.10. 木 半晴

練兵場に小隊教練。

ページ : 75

1903.12.11. 金 半晴

練兵場に小隊教練。銃剣術を見る。兇戦に類す。

1903.12.12. 土 半晴

練兵場に小隊教練。[空白]室内の検査等は、一切行わず。

1903.12.13. 日 霧 曇

記事なし。

1903.12.14. 月 霧

練兵場の運動。午後、服被[服から被に修正]服の検査。

1903.12.15. 火 半曇 雪

午前、練兵場の運動。昨日、命令ありたり。明日、(第二大隊) [行外追加]新兵検閲、午後三時、営庭に整列しあるべしと。午後三時に至るも、連隊長、来たらず。三時十五分、始めて来たる。部隊の整頓は、出来居らず。連隊長は、閲兵もせず。（尤も、今日は、徒手・執銃の柔軟体操及び器械体操の検閲なりし。）銃は、銃へ蓋を附したるもの、或いは、附せざるもの、一定せず。各中隊の新兵は、中隊の順序に縦隊に整列せり。連隊長は、一新兵掛に命じて、第五・第八中隊と、新兵を合して、一中隊を編成せしめ、徒手・執銃の柔軟体操を、他の中隊をして器械体操を行わしめ、次いで、之を交換す。器械体操は、懸垂・飛び下り・高飛び等の極めて簡易なるもの、及び、枝登り・梯子登り等なりし。次いで、百米斗りの競争を行わしめ、第一着者に一クローネを与えたり。本日のは検閲やら何やら訳が分からず。

1903.12.16. 水 晴

午後、第一大隊新兵検閲。三時より開始の命令なりしも、連隊長は、三時十分頃過ぎ、始めて来たれり。検閲は、昨の如し。閲兵もせず。徒手・執銃の柔軟体操・器械体操・競点等なりし。部隊の整列始め、昨の如し。しか併し、整頓は、昨日のよりは多少可なりしも、未だ十分ならず。銃の蓋を附するもの、附せざるもの、うこさべん右顧左盼天張り。検閲やら何やら訳が分からず。連隊長曰く、「チロール」兵の眠れる如き癖を矯めんが為めには、常に彼等をして愉快ならしめざるべからずと。或いは、しか然らん。

1903.12.17. 木 晴

ページ：76

練兵場の運動。記事なし。本日、命令あり。第二大隊は午前八時十五分、第一大隊は八時三十分、兵営を発して練兵場に向かうべし。空包五発携帯と。新兵検閲なり。

1903.12.18. 金 晴

午前九時少し過ぎ、連隊長、練兵場に來たる。ただ直ちに、第一・第二中隊、第五歩兵中隊を合して、一小隊を編成し、正面行進・方向変換・射撃・散開を行わしめ、次いで、他の部隊も同様の事を行う(第三中隊を合して、一小隊、第七・第八を合して、一小隊) [丸括弧]。次いで、連隊長は、中央に立ち、各新兵掛に命じて、その其周囲に法定の運動を行わしむ。更に一大隊を合して一中隊を編成し、中隊運動を行う中隊運動は、本日が始めてなり。後、分列。連隊長は、講評して曰く、新兵の教育は、よ余、これ之に満足す、しか併し、なお尚、これ少しく凝固せるものあり、これ之を除かざるべからずと。二大隊の検閲は、十一時少し前に終わり、空包も使用せず。各個の動作も見ず。無論、学科の検閲等はなし。冬季学科のあらがためか何やら訳が分からず。其中、一年志願兵の分列行進は、よ整頓、能く出来たり。三日の検閲、他隊の将校・旅団長・参謀等、遂に一も来たらず。

1903.12.19. 土 霧

か兼ねての命令の如く、本日にて新兵検教[検から教に修正]育終結。か腹工合、少し悪し。且つ、風邪。

1903.12.20. 日 霧

^{この}此日、夕、「クーアハウス」[かぎ括弧]に、^{マ マ}Kegelpartie の Weihnachtfest あり。午前二時半まで継続す。

1903.12.21. 霧 月

中隊の新・古兵を^{ごう}合し、Zistel Alpen に行軍をなす。新兵検閲後、新兵は、既に衛兵等の勤務に服す。

1903.12.22. 霧 火

記事なし。

1903.12.23. 雪 水

記事なし。^{ママ}「(始めのかぎ括弧のみ) ^{この}此日は、クリスマス[傍線]の送り物の諸準備をなす。不幸なる日にて、連隊長への送り物、額を少し直さんとして硝子を破り、^つ次いで、行李より送り物を取り出さんとして誤り、ランプを^{こわ}毀し、石油を行李内に^{くつがえ}覆す。日本より送りたる絹衣類、ずぶぬれの為に、^{その}終日其乾燥に^{つと}力めたり。併し、幸にも「しみ」[かぎ括弧]を生ぜず。

1903.12.24. 霧 木

ページ：77

^{この}此日も、昨日の衣類の手入れに尽力す。送り物を送る。^{この}此日は、集会所の装飾にて、昼食は料理屋にてなすこととなる。午後七時、集会所に至れば、人、既に^{この}集集[書き直し]まれり。此頃はワイナハト休みにて、来たるものは半数にも満たず。準備整うや、号鐘と共に食堂に入れば、樅の縦索に菓子等を吊るし、卓上ランプに吊るして、中々立派に飾れり。次に、一室には「クリストバウム」[かぎ括弧]を飾る。次いで、^{くじ}闔引きにて、来会将校に種々のものを送る。方法は、一番より順次に一番気に入るものを取るなり。品物も中々立派なりし。連隊長は、^よ紀念の為に余に品を送るべければ^{くじ}闔は引かずに置けて、マッチ台を送れり。^{その}其前、ミューラー家族を訪う。樹も中々立派ながら、人より送りしもの、人に送らんとするものを飾り、夫は妻に、妻は夫と、色々の工夫して物を送る。入費、莫大ならん。樹に点火して、小児を室に入らしむるや、小児は狂毘して為す所を知らざる如き、愉快なりし。

1903.12.25. 霧 金

休み。午後、^とシー斯拉を訪う。

1903.12.26. 霧 土

記事なし。

1903.12.27. 霧 日

記事なし。

1903.12.28. 雪 月

シルハウスキーを訪う。記事なし。中将シルハウスキーに招待せらる。

1903.12.29. 晴 火

記事なし。

1903.12.30. 晴 水

記事なし。ヒューブナー中尉に招待せらる。

1903.12.31. 晴 木

記事なし。報告の学校を終わる。シースラー大尉に招待せらる。

ページ：78

明治 37 年

1904.01.01. 金 晴

無類に晴天。早天、葡萄酒を奉^うけて、遥かに皇室及び家族一同の万歳を祝す。

1904.01.02. 土 霧

射撃。^{その}其他、記事なし。

1904.01.03. 日 霧

記事なし。

1904.01.04. 月 霧

記事なし。練兵は、室内にて行^う。将校の語学、伊語始まれり。

1904.01.05. 火 霧

記事なし。

1904.01.06. 水 霧

記事なし。大尉一団、中尉の軍団学校の卒業せ[し]もの一団、他、新参中尉及び少尉一団、の兵棋^{へいぎ}、始まる。各団、一週一回の割。

1904.01.07. 木 霧
記事なし。野外演習。

1904.01.08. 金 霧
記事なし。

1904.01.09. 土 霧
大将シルハウスキーの婚礼あり(寺にて)。夜、クーアハウスに夜会舞踏あり。

1904.01.10. 日 霧
記事なし。

1904.01.11. 月 霧
営庭にて、中隊教練の方法を教ゆ。学科教科書の演じ方。

ページ : 79

1904.01.12. 火 霧
記事なし。学科。

1904.01.13. 水 霧
学科、机上に地形を現す。記事なし。

1904.01.14. 木 雨 暖かし
大体の行軍なりしも、行かず。記事なし。

1904.01.15. 金 曇 小雨 暖かし
学科。記事なし。本日、芸者^{@ @}[圈点]の芝居を見る。

1904.01.16. 土
記事なし。休暇を乞う。

1904.01.17. 日 晴
^{よ だ}依田少佐帰朝に付き、送別の為め、午後一時、サルツブルクを発して、^{ウィーン}維納に向かい、^{ハンケンスタイ}ママ^{ン大尉と共に}Lazaret
gasse 18、Kratzmayer の宅に入る。

1904.01.18. 月 霧

午前、依田^{よだ}少佐^とを訪い、共に昼食を喫し、午後、公使^{えっけん}に謁見す。午後、ハンケンスタインと共に Josefstadt Theater に至る。

1904.01.19. 火 霧

午前、西・吉田書記官を訪問す。午後、~~Kolosseum~~[消去]Orpheum に至る。

1904.01.20. 水 霧

午前、Wien strasse に、Vergè^ワ_□を訪う。

1904.01.21. 木 霧

記事なし。公使に招待せらる。

ページ：80

1904.01.22. 金 霧

記事なし。Reich 将軍に招待せらる。

1904.01.23. 土 霧

記事なし。Vergè に招待せらる。

1904.01.24. 日 霧

記事なし。Kolosseum に至る。

1904.01.25. 月 霧

記事なし。オパに至る。

1904.01.26. 火 霧

記事なし。Cirks^マ(チルクス) [行外追加；ルビ]に至る。

1904.01.27. 水 霧

記事なし。Reich に招待せらる。

1904.01.28. 木 霧

記事なし。

1904.01.29. 金 霧

記事なし。昼、公使に招待せらる。

1904.01.30. 土 霧

記事なし。依田少佐、出発に付、^{よだ}之^{これ}を送る。

1904.01.31. 日 霧

午前十時、^{ウィーン}維納を発し、午後四時半、ザルツブルクに帰る。

1904.02.01. 月 晴 暖かし

記事なし。千代崎、忠一氏より手紙来たる。千代崎へ手紙を出す。

ページ：81

1904.02.02. 火 晴 暖かし

本日は、祭日にて、休み。記事なし。

1904.02.03. 水 霧

大隊教練・中隊教練の未だ完全ならざるに、^{この}此教練を行う、^{はなは}甚だ不思議なるも、^{しか}条例を^{これ}而く規定し、
一ヶ月二回は之を行うと云えり。

1904.02.04. 木 霧

記事なし。訪問をなす。学科。

1904.02.04:5.[4 から 5 に修正]XX 金[金に修正] 霧

学科、下士以下を集めて、中隊長、一少尉に命じて、^{これ}之をなさしむ。大尉、又、出場せり。晩食の時、
一少尉^{新参}、三名の^{ママ}仮僕を^{とも}伴うて来たる。連隊長は、^{ただ}直ちに^{その}其傍に至り、共に快飲せり。人は、連隊長
としての所為としては、^{はなは}甚だ当を失すと非難するもの多し。

1904.02.05:6.[5 から 6 に修正]XX 土[土に修正] 霧

学科。記事なし。

1904.02.07. 日 晴 日本晴れなり

^{この}此日、Wiener Tagblatt の電報によりて、日露両公使の引き揚げたる報告に接す。Crusič、Schilhan の両
人、来たる。

1904.02.08. 月 半曇

学科。^{この}此日、写真を配る。Hübner 中尉に招待せらる。日露、^{いよいよ}愈、開戦。

1904.02.09. 火 半曇

斥候勤務の為、野外に至る。

1904.02.11. 木 半曇 後 雨 紀元節

洪水救助の為め、昨年 Mittersee に出張せし二大尉に賞与・紀念章下附なりし為め、分列式、授与式あり。Gschnas の夜会、舞踏・舟・アウトモビール・服装等、頗^{すこぶ}る奇なりし。

1904.02.~~11~~10.[十一から十に修正] 未水 [木を水に修正] 半曇

ページ：82

学科。記事なし。

1904.02.12. 金 霧

学科。記事なし。

1904.02.13. 土 晴

連隊教練、分列式のみ。他、記事なし。

1904.02.14. 日 晴

記事なし。

1904.02.15. 月 雨 雪

fach(s) [ch を消去して s を行外追加]ing fest にて、休み。記事なし。

1904.02.16. 火 晴

昨日同様、記事なし。

1904.02.17. 水 晴

山根より、手紙、来たる。帰朝の電命に接せりと。記事なし。

1904.02.18. 木 雪

浄法寺より手紙来たる。塙^{おうこく}国公使館附に補せられたるなり。但し、福田少佐^{ただ}の舞^{まい}るまでか。連隊教練。
^{ただ}但し、分列式のみ。

1904.02.19. 金 晴

連隊教練の筈なりしも、取り止め。帰朝の電命に接す。

1904.02.20. 土 晴

荷物の^{こしら}拵え及び^{いとまごい}暇乞をなす。

1904.02.21. 日 晴

昨日の如し。

1904.02.22. 月 晴 後 雨

ページ：83

昨日の如し。^{いとまごい}暇乞を終わる。浄法寺に催促の電報を出す。

1904.02.23. 火 雨 後 大雪

浄法寺より、返電、来たる。日く、何分の命令ある迄、^{なにぶん}其地に駐在せよと。^{その}閉口の^{ほか}外なし。

1904.02.24. 水 曇 雪

旅装を調べて、^{ただ}只、命を待つのみ。記事なし。

1904.02.25. 木 曇

早朝、手続き終了の電命に接す。早急の^{いとまごい}暇乞をなし、午後一時八分出発す。別れに際し、中隊長、中隊を整列して万歳を唱え、将校の大部は、皆、停車場より送り来たる。ラツアレツガッセの下宿に入る。

1904.02.26. 金 曇

早天、浄法寺を^と訪^つい、次いで、共に公使を訪う。

1904.02.27. 土 曇

銀行に至り、金を受け取り、書籍を買う。浄法寺に招待せられ、共に^{ママ}ローサハに至る。ライヒ、訪問。

1904.02.28. 日 曇

ライヒに招待せらる。公使に招待せらる。

1904.02.29. 月 雪

金を換ゆ。ライヒ、訪問。午後八時、Westbahnhof より出発。浄法寺、ライヒ・井出・佐藤の諸氏、見送りに来たる。

1904.03.01. 火 曇 雪

途中、露の婦人と道づれになり、其夫は、余に種々の配慮をなさしむる等、奇なりし。

1904.03.02. 水 曇

午前六時、^{ロンドン} 倫 頓 安着。少憩後、クック会社に至れば、切符、未だ出来居らず。更に午後三時来たるべきを約し、公使館を^と訪うて、家に帰れば、中川・宇垣・^{くにし} 国司等の一行数人に会す。午後三時、クックに至り、切符を受け取り、家に帰りて、宇都宮・^{しおだ} 塩田諸氏に会し、次いで、仏国より着し菱田一行を迎え、稲垣と共に、晩食を喫して、更にカッフェーに飲む。Mabe 差圧

ページ：84

高し。3.pf.

1904.03.03. 木 曇

午前八時五十五分、^{ロンドン} 倫 頓 発し、汽車にて Tilbury に向かい、^{ただ} 直ちに一万三千^{トン} 噸余の Mineapolis に乗船す。海、極めて静なり。白井少佐の一行、今朝、^{ママ} 倫 頓 に着す。

1904.03.04. 金 曇

海、静なり。午後、始めて、^{ドイツ} 独乙語を解する二三婦人に会す。午後、英国海峡を離れて、大西洋に出づ。

1904.03.05. 土 曇 雨

^{やや} 海、稍、荒し。記事なし。

1904.03.06. 日 曇 時々太陽を見る

海、荒きこと、昨の如し。記事なし。

1904.03.07. 月 雨

海、極めて荒し。記事なし。

1904.03.08. 火 雨

海、極めて荒し。三月は、^{この} 此海の ^{もっと} 尤 も ^あ 悪しき時なりとか。記事なし。

1904.03.09. 水 曇

海、荒きこと、昨の如し。記事なし。

1904.03.10. 木 曇

昨日の如し。記事なし。

1904.03.11. 金 雨

昨日の如し。記事なし。仏船^{であ}に出遭い、無線電信にて、日艦、浦港を砲撃したりと聞く。

1904.03.12. 土 曇 雨 雪

昨日の如し。鴨^{かもめ}、船に従いて、欧州より米国に渡る。本夜、午後十時、無線電信にて、紐育^{ニューヨーク}に通信す。私信をも取り扱う。

1904.03.13. 日 晴

初めて亜米利加の大陸を望む。船、ハドソン河口に近^{ちかづい}て、海、全く静穏に帰す。午後二時、紐育^{ニューヨーク}着。直ちに上陸。税関^{ただ}

ページ : 85

にて、日本人の一行、今朝上陸、Hotel Grand Majestic に至れりとの報を聞き、同館に至る。果たして、白井・稲垣の一行に会す。本夜、日本料理を食す。

1904.03.14. 晴 月

買物をなす。日本人一行と共に日本料理屋に午食^{ひるしょく}を喫す。午後六時、出発の筈なりしも、都合により、午後八時に変化し、為に、ニアガラ^{ママ}の瀑布に立ち寄りざることとなれり。

1904.03.15. 雪 火

早天、ニアガラ瀑布^{そば}の傍を過ぐ。朦朧として、能く見え^よず。乗り換えて、本線に入る。此^{ここ}に、梨本宮殿下の一行及び独乙^{ドイツ}帰りの一行に会す。

1904.03.16. 曇 水

只^{ただ}、トランプに耽^{ふけ}るのみ。記事なし。

1904.03.17. 雪 木

昨日の如し。勢人駒田彦之丞君^{はなは}に会す。雪、甚だしく、列車進まず、為に、遅刻するもの、六時間。

1904.03.18. 雪 金

昨日の如し。記事なし。広原、限りなし。

1904.03.19. 晴 曇 土

ロッキー山に掛かる。昨日の如し。記事なし。

1904.03.20. 晴 日

最高点五千尺の停車場を越えて、線側河岸の風光明媚、限りなし。日く、雪、岩、断崖、水勢。午後十一時、バンクバーホテルに宿泊。直^{ただ}ちに入湯。

1904.03.21. 月 晴 雨

午前、散歩。少しく買物をなし、後、領事館に至る。第二列車遅着の^{おく}ため、正午の出帆、後れて、午後七時となる。満数なり。

1904.03.22. 火 半晴

海、^{やや}稍、荒し。記事なし。

1904.03.23. 水 半晴

ページ：86

海、極めて荒し。記事なし。寒し。

1904.03.24. 木 半晴

海、^{やや}稍、静なり。記事なし。

1904.03.25. 金 半晴

海、静なり。記事なし。此^{この}日、駒田彦之丞氏より、日本食の御馳走を受く。

1904.03.26. 土 半晴

海、荒し。記事なし。

1904.03.28.7.[8を7に修正] 日 半晴 雨

海、荒し。記事なし。

1904.03.28. 月 雨

海、極めて荒し。

[1904.03.29.(火)の記載なし 下記注参照]

1904.03.30. 火水 [火を水に修正] 雨

昨二十九日は、経度の関係上、空過することとなれり。海、極めて荒し。記事なし。

1904.03.31. 水木 [水から木に修正] 半晴

海、極めて荒し。記事なし。

1904.04.01. 金 半晴

海、^{やや}稍、穏やかなり。記事なし。

1904.04.02. 土 晴

極めて穏やかなり。再び、駒田氏に日本食の餐座を受く。記事なし。

1904.04.03. 日 晴

海、静なり。

[その後記入なし；最後の 86 ページは字が乱れており、記入もほとんどない。]

ページ：87

[白紙]

ページ：88

明治 39 年

1906.04.04. 晴 水

午前七時半、大番町出発。八時三十分、新橋発。見送り人の^{おも}重なるもの、鈴木充^{みつよし}美、山田陸^{りくつ}槌、坂井兵吉、高梨慶三郎、近江屋兩人、島岡、青木文造、村瀬信太郎等にて、近江屋兩人、島岡は横浜まで見送れり。津久井屋に至り、午前十時半、備後丸に乗船す。船客の^{おも}重なるもの、内山少将・町田・小池・^{みやかわ}宮川・(奈良)[行外追加]・^{ママ}須藤・^{いしさか}石坂中佐、山根・武藤・山崎・徳永・津野田少佐・西郷大尉等にて、^{ほか}外に、^{ママ}栗野公使夫妻・黒井海軍大佐等あり。[改行]

正午、出発。^わ棧橋にて、両親始め、家族に分かる。遠州灘、海、荒し。奈良中佐、出発の際、船上にてカバンを窃取せられ、時計・指環等、貴重品を失う

1906.04.05. 晴 木

天気晴良。海、静なり。昨日の暴風の為めに、大いに船の進航を妨げられ、午後六時半過ぎ、^{ようや}漸く神戸港に入る。棧橋繫留の筈なりしも、都合により、遥かに沖合に碇泊せり。

1906.04.06. 晴 金

午前五時半、起床。^{ただ}直ちに三ノ宮停車場に至り、嵐山に至る。花、^{なお}尚、早し。三軒茶屋に昼食し、午後五時、一旦、船に返り、更に上陸す。黒井大佐・町田中佐も、^{また}亦、嵐山に至れり。^{この}此日、天龍寺及び釈

迦堂^とを訪う。天龍寺の法華堂、天井の龍及び其記、長八尺・幅三尺。尤も奇観なり。三十三年、鈴木
しょうねん
松年画之。

1906.04.07. 晴 後 曇 土

午前十時、神戸、出帆。海、極めて静なり。

1906.04.08. 日 雨

ページ : 89

昨来、雨歇まず。午前九時上陸。直ちに福岡に至り、宗一叔父^とを訪い、午後五時発、門司川^{もじかわう}卯に帰る。
内山少将・奈良中佐・武藤少佐あり。帰途、宗貞氏に手紙を出せしも^{電信なりし}、返事来たらず。石坂中佐、
翌朝、来たる。留守宅より小包^{ばこ}、時計函来たる。

1906.04.09. 月 雨

午前十時半、汽船に帰る。栗野公使夫妻、乗船す。海、稍^{やや}、荒し。玄海に出て、海、益^{ますます}、荒し。

1906.04.10. 火 曇 後 晴

天候、悪しく、海、益^{ますます}、荒し。記事なし。午後四時頃、揚子江下流の出口に至る。海、混濁、悪し。

1906.04.11. 水 晴

揚子江の下流に入る。水、全く混濁。味噌汁の如し。本日は、荷積み多数の為め、呉淞^{ウースン}より遥かに上流
に^{さかのぼ}溯り、領事館の近傍公園の前に碇泊す。午后四時半、一行、皆、上陸し、山崎・徳永等の諸君と共に、
松崎洋行に至り、晩食をなしたる後、「スマロー」[かぎ括弧]を散歩す。支那人^{ざつとう}の雑^{はなは}闇、甚^しだし
く、馬車^かを駆るもの、人力車^{かご}・轎等、全く、肩摩^{けんま}轂^{こくげき}撃の実況にして、東京の銀座も遠く及ばず。而^しして、
轎に乗るものは、多くは皆、支那芸者なりと云う。次いで、帰船の途次行に、盛装美人を見る。支
那人・西洋人にして、日本人は見ざりし。午後十一時、船に帰る。

1906.04.12. 木 晴

昨夜、荷積みの音響^{やかまし}矢^く釜敷、安眠するを得ず。午前八時、内山少将・黒井大佐等と共に、川崎造船所に
至り、長江の軍艦伏見の建造を見、次いで機器局及び装薬廠に至る筈なりしも、余等の馬車、疲れて進
まず。乃^{すなわ}ち、帰路^つに就き、豊陽館に昼食したる後、午後六時船に帰る。

1906.04.13. 金 雨

ページ : 90

午前九時、小池中佐等と共に、上陸し日本倶楽部に至り、玉突をなし、十二時、船に帰る。午後二時、船、出帆す。海、極めて静なり。

1906.04.14. 土 雨 後 晴

朝来、^{さいう ひ ひ}細雨霏々として、陰鬱限りなし。^{しか}而も、霧深くして、二分毎に汽笛を鳴らして警戒す。^{かまびす}喧しこと、云うべからず。午後、雨晴れ、天気晴朗。海、極めて静なり。本夜、坂田書記官の、明治忠臣蔵及びハイカラの芝居談を聞く。

1906.04.15. 日 晴

海、静して、油の如きも、午前十時よりは、霧、^{はなは}甚だ深く、昨の如く、毎二分時に汽笛を鳴らし、耳、^{ろう}殆んど聾せんとす。午後、雨、晴れ、航行、極めて愉快なりし。

1906.04.16. 月 陰雨

午前十時、香港に着す。昨夜、雷雨、強烈を極め、暗黒、^{しせき}咫尺を辞せず、夜半、^ま復た汽笛を鳴らし、雷鳴・笛声、眠るべからず。煩悶、^{はなは}甚だし。朝来、陰雨、^は霽れず。午前后[前から後に修正]、上陸。日本倶楽部に至り、玉突をなし、午後五時半、帰船。夜に入りて、香港パノラマの美観、云うべからず。煙草を買う。

1906.04.17. 火 雨 後 晴

朝来、陰雨、^{やす}息まず。午前十一時半、上陸。^{ボタン}釦を買ひ、清風楼に昼食を喫す。午前、郵便局に至り、手紙を出さんとせしも、香港貨にあらざれば、通用せず。大いに閉口せり。午後、又、日本倶楽部に至り、玉突をなし、午後六時、帰船す。

1906.04.18. 水 晴雨[晴を雨に修正]

ページ：91

午前八時、出帆。^{もうもう}陰雨、濛々。朝来、下痢を催し、終日、遂に、^{がじよく}臥蓐す。午前には、^{すいしゃ}六七回の水瀉をなせしも、午後、服薬後、便通、止まれり。昨日のビール若しくはラムネに中てられたるならん。

1906.04.19. 木 晴

朝来、天気快晴。気分、^{また}亦、大いに好し。昨夜は可成、蒸し熱かりしも、本日は、^や微風、止まず、快、極まりなし。

1906.04.20. 金 晴

海、静なり。玉突遊びをなす。^{その}其他、特に記事なし。夜は可成、熱し。

1906.04.21. 土 晴

海、極めて静なり。夜、熱く、頗^{すこぶ}る寝苦し。本日、船の進行、湮^{かいり}数に関する富籤を作る。余は、不賛成を宣言せり。

1906.04.22. 日 晴

海、極めて静なり。東京への手紙を認^{したた}む。

1906.04.23. 月 晴

海、極めて静なり。午前十時、船、新嘉坡^{シンガポール}に着す。碇泊地、極めて遠し。午食^{ひるしょく}後上陸し、直ちに馬來街^{ただ マレー}に至る。同行者は、山根・石坂^{いしさか}・武藤の三氏なり。今日は、驟雨^{にわか}屢々^{しばしば}来たる。

1906.04.24. 火 晴

昨来、上陸後、大いに熱し。昨夜、馬來街^{マレー}に、馬來劇^{マレー}を見る。西洋風なりし。本日も、亦、驟雨^{また にわか}、屢々^{しばしば}、来たる。

1906.04.25. 水 晴

正午稍過ぎ^{やや}、船に帰る。午後四時、出帆。海、極めて静なり。船に帰れば、船の涼しさ、云うべからず。

ページ：92

1906.04.26. 木 晴

海、極めて静なり。然^{しか}し、大いに暑し。記事なし。

1906.04.27. 金 晴

午前十時、船、卑南^{ベナン}に着く。大いに暑し。遂に上陸せず。驟雨^{にわか}、来たる。

1906.04.28. 土 晴

今日も、大いに暑し。遂に上陸せず。午後四時、出帆。海、極めて静なり。

1906.04.29. 日 晴

海、極めて静なり。本日は、清風、絶えず、殆んど暑を覚えず。午後六時、帆船、スマタラ海峡^{ママ}を出て、少しく波あり。

1906.04.30. 晴 月

海、極めて静なり。本日、東京に於て大観兵式挙行の日なれば、当船に於ても相当の祝意を表せんと
X[消去]て、余と宮川中佐と幹事となり、二等室の将校と相談し、夕食後シャンパンを挙ぐることを約
す。船にても、多少は御馳走をなし呉れたれども、前船の天長節の時とは、全く比較にならず。夕食
後、甲板上に日英等の国旗を飾り、小卓を列べ、一等船客全部、此に集まり、先の、内山少将、杯を挙
げて陛下の万歳を祝し、栗野大使は更に陸軍の万歳を、宮川中佐は大使の万歳を、船長は内山少将の万
歳を、内山少将は備後丸及び船長の万歳を祝す。西洋人の小児立ちて一場の談話をなし、大いに喝采を
博せり。午後十二時頃、散会す。

1906.05.01. 火 晴

ページ：93

海、静なり。記事なし。

1906.05.02. 水 晴

海、静なり。記事なし。明日着船の時間を顧慮せしものか、大いに速力を緩む。

1906.05.03. 木 晴

午前九時、船、古倫母に着す。清風来たりて、甲板上、大いに暑を覚えず。多数の船客は、上陸せし
も、余等数人は、陸上の暑を恐れて遂に上陸せず。宝石商人 Siones 来たり。五十円余の買物をなせり。
此商人は、大いに日本人の愛顧を受くるものにして、大いに掛値を云わず。全く信を措くに足るものの
如し。

1906.05.04. 金 晴

午前、上陸。徳永・宮川・山崎と共に、煙草を買い、若干の散歩をなす。案内者・乞丐等、纏い来て、
五月蠅きこと、云うべからず。正午、帰船す。人は皆カンデー等に行けども、二度目とて余は行かず。

1906.05.05. 土 晴

本日も船に留まりて上陸せず。午後一時、出帆の筈なりしも、荷積みの都合にて、午後五時、漸く、出
帆す。

1906.05.06. 日 晴

少しく波あり。記事なし。玉突をなす。

1906.05.07. 月 晴

海、静なり。清風徐来。大いに暑を覚えず。玉突をなす。右肩、大いに痛し。

1906.05.08. 火 晴

海、静なり。玉突をなす。清風あり。他、記事なし。

ページ：94

1906.05.09. 水 晴

海、静なり。清風あり。玉突をなす。北の寢室の風扇^{かざおうぎ}、毀^{こわ}し、室内、暑くして、眠るべからず。

^{すなわち}
即、甲板上に寝す。

1906.05.10. 木 晴

海、静なり。清風あり。玉突をなす。此日^{この}、小説、第1巻を通読す。本夜も、甲板上に寝す。

1906.05.11. 金 晴

海、静なり。清風あり。玉突をなす。正午頃、スコトラ島を望む。上面・平面・側面^{きつりつ}、屹立、真に奇観
なり。海豚^{いるか}、船側^{ゆう}に戯游し、其様^{そのさま}、頗^{すこぶ}る夥^{おびただ}し。或いは、空中に飛躍し、人をして、快哉^{かいさい}を叫ばし
む。

1906.05.12. 土 晴

海、静なり。玉突をなす。記事なし。左舷は、アフリカ大陸を望む。本夜の暑気^た、真に勝えず。

1906.05.13. 日 晴

海、静なり。玉突をなす。本日、紅海の関門を過ぐ。船、北に走りて、西日を受け、暑に堪えず。本
夜、一前夜に反し、涼風来て、大いに暑を覚えざりしを以て、寢室に寝ねしも^{もつ}、夜半、苦熱に堪えず、
又、甲板上に出でて眠れり^{ママ}。

1906.05.14. 月 晴

海、静なり。玉突をなす。記事なし。本夜、大使、蓄音機を奏せしむ。

1906.05.15. 火 晴

海、静なり。玉突をなす。記事なし。本日は、急に涼しくなり、全く昨日と異^{こと}なり、甲板に寝ることを
止^やむ。

ページ：95

1906.05.16. 水 晴

海、静なり。玉突をなす。温度七十度に下がり、全く春の如し。

1906.05.17. 木 晴

海、静なり。早天、右舷に^{アラビア}亜刺比亜(左舷に^{アフリカ}阿非利加)[行外追加]を望む。全^{しゃざん}くの赭山。人畜、草木、一もなし。午後四時、^{スエズ}蘇士に着す。女医、来て、検疫をなすのみ。午後六時、^{ただ}直ちに出帆す。

1906.05.18. 金 晴

朝来、晴天、^{やや}稍、暑気を覚ゆ。運河兩岸の荒涼、^{ただ}只、沙と雑草の処々に生茂するを見るのみ。暫^{しばら}くしてジロッコ吹き来たり。満天、^{ことごと}悉く砂塵を以て掩いし前途、^{もうもう}濛々。船、進むこと能わず。停止するもの、再三。^{いわ}況んや、風の熱せること火の如く、^{たちま}寒暖計、忽ち百度に昇る。此日、ポートサイドにて粉炭を積むとて、窓、^{その}其他にまきはだを込みしが、^{あたか}恰もジロッコ(の砂)[行外追加]を防ぐ^よ能き手段となれり。聞く、^も若し此風^{この}甚^{はなは}だしきときは、船は、二三日間は一所に停止するの、^や止むを得ざることありと。当船の機関長は、十数年郵船会社にあり。数十度^{この}此地を通過するも、^{かくのごとき}如^{この}此猛烈なるジロッコに^で出遇いしは二度目なり、と云えり。午後~~四~~三[四から三に修正]時頃、船、ポートサイドに着。風、^や止み、大いに涼気を覚ゆ。上陸して、^{はがき}絵端書及び煙草を買う。午後九時出帆す。手紙を出す。本夜は少しく涼し過ぎる位なりし。

1906.05.19. 土 晴

大いに涼気を覚ゆ。玉突をなす。記事なし。

1906.05.20. 日 晴

ページ：96

朝夕、大いに冷氣を覚ゆ。クリート島を右舷に望む。玉突をなす。記事なし。

1906.05.21. 月 晴

海、静なり。記事なし。

1906.05.22. 火 晴

^{イタリア}早天、伊太利・シタリー島間を過ぎ、シタリーのエトナ山、白雪を戴いて、^{やや}稍、絶景なり。午後、^{ひょうふう}颶風来たる。

1906.05.23. 水 晴

昨日の余波、少しく高し。荷物の片付けをなす。^{その}其他、記事なし。

1906.05.24. 木 晴

海、静なり。正午、船、マルセーユに着す。余は上陸せざる筈なりしも、事務長の、船に留まるを好まざるを聞き、吉岡哲太郎氏と共に Hotel Geneve に至る。荷物は、クック会社に命じて、直ちに維納に送らしめたり。而るに、余はクック社員に船に止まることを言い置きたる為め、手荷物に行き違いを生じ、夜に入るも、ホテルに持ち来たらず。大いに心配せしが、杉山作太郎氏の尽力により、夜半、到着せり。本日、山根・城山・大橋等の一行、又、此旅宿に来たる。本夜、山根・吉岡両氏と共に寄席に至る。泥にて人の似顔を作るもの、妙なりし。夜半、旅宿に帰る。

1906.05.25. 金 晴

午前、吉岡・山根・城山・大橋等の諸君と共にマルセーユ植民地博覧会に至る。四月十五日開会にして、

ページ：97

諸設備、尚、未だ充分ならず。見るべきもの、殆んどなし。遊覧二時間斗りにして昼食を喫し、次いで、動物園及び博物館見物の筈なりしも、時間、足らずして、旅宿に帰り、斬髪をなし、午後五時、吉岡君と共に旅宿を出て停車場に至る。杉山氏、送り来たる。仏伊連絡線は、主として海岸に通じ、隧道の多きこと、云う斗りなし。

1906.05.26. 晴 土

正午頃、マイラントに着す。渡辺氏・堀氏、吉岡氏の出迎えとして来たる。余は、吉岡氏と共に其家に至り、此に滞在することとなれり。本夜、打揃うて、マイラント見物をなす。

1906.05.27. 晴 日

午前より午後に亘り、吉岡・渡辺氏等とマルセーユイラント[ルセーユをイラントに修正]万国博覧会を見物す。此博覧会も、開会、日浅く、陳列尚終わらざるもの多く、日本商人の出品等も未だ飾付け出来ざるもの多し。格別見るべきものなく、只、仏国装飾品の飾付けは、室を暗くし電灯を点し、人目を惹けり。本夜、吉岡君の餐応を受く。

1906.05.28. 晴 月

午前、吉岡君は、博覧会事務員として、総裁を訪問し、余は、家に留まりて、暫く、其帰りを待てり。渡辺氏、午後二時頃、帰り来たり、吉岡氏は、尚、帰り能わざるを告ぐ。即、共に散歩に出掛け、午後四時頃、家に帰りて、更に吉岡氏等と共に散歩す。

1906.05.29. 晴 火

本日、午前、銀行に至り、^{おう} 塙貨と取換えを済まし、汽車の時間を問い合わせ、渡辺氏と共に博覧会見物をなす。午後九時、堀氏と共に馬車を^か 駆けて、停車場に至り、乗車の諸準備をなす。吉岡氏等、来たり、見送りをなす。十一時半発車。

1906.05.30. 晴 水

ヴィネーデヒにて、夜、明く。午後、セムンリングを^{はなは} 過ぐ。山高く、谷深く、景色、甚だ美なり。又、アルプ山を越ゆるの^{あたり} 辺、奇巖・白雪・川瀧等、景色の美なる所、多し。午後九時、南停車場に着す。
^{これ} 是より先き、山梨中佐には電報にて到着の時間を通告し置きしも、五月一日以来、汽車発着表に改正あり、^{すなわち} 為に、誰も来たり居らず。即、^か 馬車を駆けてラツアレット街に至らんとする途中、偶然、山梨中佐に^あ 会い、^{ただ} 同乗。直ちに下宿に至り、^つ 次いで、中佐と共に晚餐を喫す。

1906.05.31. 晴 木

マイランド[濁点]に比すれば、暑気、大いに^{なごやか} 和なり。午前十時、公使館を訪問す。本夜、船越氏より招待せらる。東京より手紙来たり。又、東京に葉書を出す。

1906.06.01. 晴 金

本日、荷物の片付けをなし、^{しょし} 書肆に至り、次いで、玉突をなす。

1906.06.02. 雨 曇 土

山梨中佐を訪問す。不在なり。本日は、船越氏等と共に^{ママ} ルクセンブルクに至る筈なりしも、^あ 天気都合悪しく、止めたり。井出氏を訪問せしも、あらず。手紙を^{したた} 認む。^と 山梨中佐を訪う。在らず。

1906.06.03. 日 晴

本日も、^{また} 亦、^{したた} 手紙を認め、正午頃、井出氏を訪え、^と 本日は船越氏等と会食の筈なりとて、同行してホテル

クランツに至る。本夜、飯島氏、オデッサに赴任するを^{もつ} 以て、北停車場に見送りをなし、^つ 次いで、船越・高木氏等と玉突に至る。山梨中佐を^と 訪う。在らず。

1906.06.04. 月 雨 曇

手紙を^{したた} 認め、公使館に至り、到着届を出し、午後、散歩の時、ライヒ將軍及び^{その} 其家族に^あ 遇う。

1906.06.05. 火 曇 後 雨

本日、手紙を書き終わる。午後、散歩し際、グラーベンにて、不思議にも、大佐ブラーフに出遭^{であ}う。午後、雨降る。寒気強し。

1906.06.06. 水 雨

寒風、強し。ブラーフ大佐来訪。山梨中佐を訪^とう。本日は、独乙皇帝^{ドイツ}、維納^{ウィーン}に来たる。市中は、国旗も樹^たてず。僅かに、ホテルに国旗を飾りしに過ぎず。単簡なものなり。但し、停車場等は、立派に装飾^{ただ}しありたりと云う。井出^とを訪い、日本楼に夕食を喫す。本日、手紙八十余本を出す。本日より、新聞を取る。

1906.06.07. 木 雨

連日の雨天、陰鬱限りなし。昨日、荷物到着の報を得たれば、先^まず、ブラーフ大佐を訪問し一時間余快談の後、公使館に至り、荷物受取の手続^{ひるしょく}をなし、午食^{ひるしょく}を喫して家に帰れば、シヤイヒ中尉より手紙来たり。直^{ただ}ちに返事を出し、更に午後四時より約束のライヒ將軍を訪問す。蓋^{けだ}し何処かへ共に外遊を試むる筈なりしなり。然るに、將軍、胃病^{がじょく}にて臥蓐し、又、共約者も、天氣悪しき為め外遊せずとの事なれば、ライヒ將軍の宅^{とど}に止まり、晚餐を喫して、家に帰る。過日修理に出せし帽子、出来上がる。本日、靴下一ダース半を買う。

1906.06.08. 金 曇

ページ：100

本日、遂に、雨、降らず。午前、銀行に至り、金を請け取り、午食^{ひるしょく}を喫して、家に帰れば、シヤイヒ、来訪して名刺を残し、午後六時カフエー・シュナイダーにて面会したしと云う。依りて、午後、同処に至れば、中尉、既に在り、暫^{しばら}くの快談の後、共に散歩し途^{みち}、ブラーフ大佐に遇い、共に料理屋に至り、午後十一時まで共に快飲す。他の将校も二三人来たり。本日は、独乙皇弟^{ドイツ}、自動車の競争者として、維納^{ウィーン}に着。同料理屋に奥^{おう}国の皇族と会食あり、大賑わいなり。

1906.06.09. 土 曇

昨夜、荷物到着。今朝、荷物の代価七四[7を4に修正]十円を取りに来たる。高きこと、驚^{ほか}くの外なし。而^{しこう}して、マルセーユにて結着せし木札は、皆、剥脱^{はくだつ}し、用心の為め更に張り付けたる紙、僅かに存^{むし}す。寧ろ意外なり。書物の行李^{こうり}は、中実^{なかみ}一杯ならざりし為め動揺し、小冊子は乱雑を極め、一見他人が行李を開けてかき廻せし如くなりし為め、書物の損したるものも少なからず。大行李の中は一杯に

て、毫^{ごう}も動揺しあらざりしも、取手破損し、側板に小孔を来たし、修理するを要するに至れり。午後、船越氏^とを訪う。

1906.06.10. 日 曇 雨

此^{この}頃の天気、陰晴、常なり。雨傘を持たざれば、散歩すべからず。閉口^{ほか}の外なし。午前、井出・高木両氏来訪。共にラクセンブルクに至る。池・森林等、大都会に住するものの為めには適当なる散策地ならんも、別に、絶景と云うにあらず。只、森林内を散歩して清涼の空気を呼吸する位のものなり。本夜、痛飲。珍しく吐きたり。

1906.06.11. 月 曇 雨

本日、入浴・斬髪。午後、ライヒ^とを訪い、依田中佐^{よだ}よりの言付物を渡す。將軍は、夏の仮宅^{かりたく}を捜さんとてサンペルテルに至り、不在。直^{ただ}ちに大佐レーベル^とを訪う。夫人在宅。御馳走になれり。

1906.06.12. 火 曇 雨

ページ：101

本屋に至り、若干の注文をなす。別に、記事なし。注文書物、来たる。

1906.06.13. 水 曇 雨

午前、久し振りにて、教師の家を訪^とう。家婦のみ家にあり、驚喜、余^よを迎う。曰く、教師は、既に帝国大学を卒業し、目下、一年志願兵として砲兵連隊にありと。若干談話の後、再会を約して將^{まさ}に帰らんとするや、明日は、大祭日にて例の皇帝徒步にしてステフワン寺に至るの日なれば、是非之を見るべしと。予は、前日、西書記官を訪いしとき、共に行くべき約束をなしたるも、西よりは何等の通知に接せざれば、少しく、其^{その}無情に驚きたるも、見ぬは損と思ひ、直^{ただ}ちに公使館を訪いて、約束如何を問いたるに、西、曰く、公使館の雇^{やとい}をして既に周旋せしめ、Kohlmarkt に一つの窓を得たり。22 番、Professor Zeissl の宅なり。若し欲すれば、共に来ては如何と。余は、其^{その}平然たるに驚きたるも、兎に角、行くを約し、次^ついで、明日の混雑を予想して、其^{その}家を確かめ、家に帰る。本日、煙草を買う。午後、教師より手紙来たる。曰く、早く会合したし、午後八時過ぎ訪問せんと。依りて、予は家にて待つべきことを返事し、其^{その}来たるを待つ。午後九時、教師来訪。若干、談話の後、共に Rathhauskeller に晚餐を喫し、午後十一時、家に帰る。高木氏来訪。教師と共に食事の際、砲兵連隊の将校、情婦^{とももの}を伴^{ママ}うて、公然、食堂に來たる。驚く外なし。

1906.06.14. 木 曇 雨

朝は、天気晴朗なりしも、^{やや}稍、模様悪し。天気、^あ悪しければ、皇帝は、^や徒歩を止めて馬車行きをなすが故に、行列は実につまらぬ者となる。如何せんとは思ひしも、兎に角、行くべしとて、午前七時、出発。Kohlmarkt に至る。随分の人なりしも、非常の混雑と云うにあらず。予は着し、皇帝、馬車にて行けば、借りたる家の窓よりは何も見ることを得ざれば、^{むし}寧ろ街道に立つの勝れるを思い、^{まさ}其俟立てり。^{そのまま}午前九時に至りて、見物人、益々多くなり、天気、^{ますます}益、^あ悪しくなる。九時五分頃、皇帝、果たして馬車にて来たる。^{あいしたが}相 従 うもの、皇族、^{わず}僅かに六七名の馬車に過ぎず。つまらぬ事、言う

ページ：102

^{ばか}斗りなし。見物人の中には、午前六時より立ち往生なり。こんな馬鹿なことはなし等、^{こぼ}溢すものもありたり。予も、足は疲れ、大いに閉口せり。皇帝の通過するや、hoch を呼ぶもの、^お僅かに数人に過ぎず。帽子をも取らず、^{ただ}只、^{その}其顔を見んとするもの多数なりし。^{しか}併し、予も帽子を取らざる一人なりしも可笑し。王宮前にて、九時半、教師と会合することを約したるも、大いに疲れたれば、九時二十分頃まで待ちしも、教師、^{すなわち}来たらず。即、家に帰る。帰れば、^{これ}満天暗黒、雨、来たり。雷、又、之に加わる。他、記事なし。

1906.06.15. 金 曇 雨

^{この}此頃の気違い天気、云う斗[り]なし。^{ばか}午前、散歩後、山梨中佐に遇い、共に公使館に至り、^つ次いで、ステフワン・ケラーにて、山梨・菊地両氏と共に昼食を喫す。午後、玉突をなし、井出を^と訪い、^{ママ}菊地と共に晚餐を喫す。本日、大カバンの修理、出来上がる。^{とみくじ}千代東京[千代を東京に修正]への手紙を書き終える。富籤を買う。

1906.06.16. 土 曇 雨

^{しょし}午前、書肆に至り、若干の買物をなす。他、記事なし。東京へ手紙を出す。

1906.06.17. 日 晴

天気、始めて晴る。^{その}其代わり、暑さ、大いに増せり。午前、井出を訪い、富田と共に一寸散歩せしのみ。他、記事なし。

1906.06.18. 月 晴

昨日迄は、黒衣のもの多かりしも、本日は、夏帽及び女の白服、大いに数を増せり。午前、服屋に至り、^{じょうぶくろ}ズボンの注文をなす。状 袋 及び紙及び寝用衣を買う。

1906.06.19. 火 晴

服屋に至る。ズボン、出来上がれり。価、十三グルデン。従来の変えズボンの虫喰を直さしむ。西書記官を訪う。

ページ：103

1906.06.20. 水 晴

昨今の暑きこと、言う斗りなし。温度三十度に昇る。ズボンを持ち来たりしも、熨斗を掛けしのみにて、虫喰を直さず。閉口せり。日本にて製せし上衣の袖を直さしむ。余の不在中、ライヒ將軍、来訪せり。教師より、寄席(夏歌)[丸括弧]に至ることを言い来たりしも、辞して行かず。本日、八月より射撃学校入校、許可の通知を受け、直ちに山梨中佐を訪問せしも、不在なりし。(八月十三日より九月十五日に至る間なり。)[丸括弧]午後七時、ライヒ来訪せりと。

1906.06.21. 木 晴

暑きこと限りなし。午前十一時、ライヒ来訪。共に公使館に至る。山梨、不在なり。即、分かれて、ステフツン・ケラーに昼食をなし、次いで、山梨中佐を訪う。不在。依りて、宅に在て其帰るを待ち、午後五時、共にカフェー・アルカーデンに至れば、ライヒ、既に在り、後、若干、共に散歩の後、分かれて、山梨中佐の御馳走になれり。東京より手紙来たる。

1906.06.22. 金 晴

午前、公使館に至り、次いで、井出を訪う。富籤を買いたるも、当たらず。本日、日本人会あるを聞く。

1906.06.23. 土 晴 驟雨

服屋に至り、直し物を注文し、午後、日本人会に臨む。参会するもの十七人。中々盛会なりし。服、出来上がる。

1906.06.24. 日 晴

高木氏と共に散歩・玉突をなし、次いで、西書記官を訪う。後、西と共に Tivoli に到る。

1906.06.25. 月 晴 驟雨

本日、料理学校にて食事をなす。大いに安価なり。午後、山梨中佐と共にライヒ將軍に招待せらる。入浴。斬髪。

1906.06.26. 火 晴

ページ：104

両三日以前、射撃学校入学許可の通知を得たれば、其都合、問^{その}い合わせの為、同校副官に書面を出したるに、本日、其返事、来^{その}たれり。午後、シヤイヒ・シルハウスキー兄両中尉とプラーターに遊ぶ。

1906.06.27. 水 晴 暑し

午前、マリヤヒルフを散歩し、午後、旧連隊将校四人とホルクスガルテンに食事をなす。毎夜、床虫に襲われ、不快、甚^{はなは}だし。

1906.06.28. 木 晴 暑し

午前、マリヤヒルフを散歩。シミユラト夫妻に会う。午後、高木と共にホルクスガルテンに至る。東京に手紙を出す。

1906.06.29. 金 晴 驟^{にわか}雨

午前、デットリヒ大尉、面会の為め、カッフエ・シュナイトルに至り、次^ついで公使館に至る。午後、山梨中佐と共にホルクスガルテンにデットリヒ大尉を招待す。山梨中佐の好意にて酒を奢られたり。(大尉日く、虜国は大いに日本に感謝せざるを得ず。露国は、今後二十年間は何事をも為すを得ざるべし。虜国は、露の国境の兵力を減らして、目下セルビア及び伊の国境に転配せり。是皆、日本のお陰なりと。)

1906.06.30. 土 曇 雨

本日、煙草を買う。記事なし。

1906.07.01. 曇 日

午前、山梨中佐^とを訪い、共に公使館に至り、次^といで、菊池、西を訪い、共に本日午後五時五十分来着の井上大使をウェストバーンに迎う。

1906.07.02. 月 曇

本日、入浴す。手袋を買う。本屋・服屋等に代金を払えり。

1906.07.03. 火 晴

午前十時、公使館に至り、次^{ママ}いで、山梨中佐と共に、侍従武官長・内事局長・陸軍大臣・参謀総長・コスマネック・

ページ：105

軍団長を訪問し、次^{ママ}いで、山梨中佐と共に、服屋に至り、共に昼餐を喫して帰る。本夜、西書記官に招待せらる。井上大使夫人、在り。

1906.07.04. 水 晴

しよし
書肆に至り、若干の買物をなし、マリアフィルフ^{ママ}にて行李^{こうり}を買い、又、ロクサンチッチ測遠器を買う。

1906.07.05. 木 晴後雨

昨日買いたる行李を持ち来たる。価、二十八グルデン半。帽子を注文す。書肆に至り、書物を買う。

1906.07.06. 金 曇 雨

過日注文したる測遠器ロクサンヂ[濁点]ツチを持ち来たる。価、十五グルテン。午後、高木氏来訪。次^ついで教師来たる。共にレーウェンブロイに至り、晚餐を喫す。

1906.07.07. 土 半晴

本日、書肆^{しよし}に至り、教育総監部の為めに兵事雑誌を注文す。散歩後、大尉ゴラに逢い、共に晩食を喫し、後、送りて、ノルド停車場^{はがき}に至る。端書六円余を買う。

1906.07.08. 日 晴

午前、公使館に至り、山梨中佐と共に昼食し、後、碁を囲む。

1906.07.09. 月 火 曇^{ママ}

本日、斬髪・入浴し、十回分の入浴券を買う。価十五クローネ。本夜、シルハウスキー中尉来訪。予は不在なりし。本日、インキ壺・灰入れ等を買う。価十四クローネ。

1906.07.10. 火 雨

午前、公使館に至り、山梨中佐と共に昼食を喫す。午後、時計 鏈^{ぐさり} 及びインキ壺を買う。価十七クローネ。

ページ : 106

1906.07.11. 晴 曇 水 [曜日が後にきている]

記事なし。暑きこと、云う斗^{ばか}[り]なし。

1906.07.12. 木 曇

本日は、^{やや}稍、涼し。帽子屋に至りしも、注文と違い、直させたり。

1906.07.13. 金 晴

午前、公使館に至る。午後、玉突をなす。本夜、大いに涼し。

1906.07.14. 土 雨

本日、風雨、急なり。^{やや}稍、寒きを覚う。^{しょし}書肆に至る。午後、高木君と玉突をなす。又、高木君と晚餐を喫し、又、玉突をなす。本日、蝙蝠傘を替えらる（昼食の時）[丸括弧]。代用の傘は、破れ、古し。用うべからず。閉口せり。

1906.07.15. 日 晴

東京へ手紙を出す。他、記事なし。

1906.07.16. 月 晴 少雨

本日、山梨中佐と共に、午前七時四十分、ウエストバーン^{ママ}発に汽車に^{とう}搭し、Türnitz に Reich ^とを訪う。
大佐 Löbl、又、在り。午前十一時半少過着。将軍、大いに^{よろこ}崑び、午後、共に山間を散歩す。

1906.07.17. 火 晴

午前、山梨中佐及び将軍と共に Forelle を漁す。大者七匹を得たり。午後五時、出発。午後九時少過、ウエストバーン着。ライヒ将軍は、旅（宿）[行外追加]賃・食料、皆、客なりとて受け取らず。困りし^{その}も、仕方なく、其好意を謝して帰れり。

1906.07.18. 水 晴

銀行に至り、^つ次いで、蝙蝠傘及びステッキを買う（傘三十クロネ、杖二十クロネ）[行外追加]。
他、記事なし。入浴す。本日、高木君より、扇及びふくさを送られたり。

1906.07.19. 木 晴

注文の帽子、出来上がる。価七クロネなり。又、旅行用化粧道具を買う。価四十クロネ。

ページ：107

1906.07.20. 金 晴 ^{にわか}驟雨

暑きこと、限りなし。公使館に山梨中佐^とを訪えば、西書記官と共にイッシュルに至れりとて、在らず。
未~~昨~~[本を昨に修正]日、大佐レーベル夫人、出産、男子を得たりと。^{しこう}而して、夫人は、昨日までチュルニッツに避暑しあり、午前、^{ウィーン}維納に帰り（少しく痛みを覚えたる後）[丸括弧]、午後、出産せしと。^{しか}而も、初産なりとは、驚くの外なし。少しく畜生に近きの威あり。

1906.07.21. 土 晴

大佐レーベル[夫人]及びライヒ夫人を訪問す。本日、産婦に花を送る。本夜、教師及び高木君とプラーターに至り、共に晩食をなす。

1906.07.22. 日 晴

高木君とプラーターに遊び、次いで、玉突をなす。

1906.07.23. 月 曇 雨

斬髪・入浴す。晩食後、高木氏と玉突をなす。

1906.07.24. 火 晴

暑きこと、無限。書肆^{しょし}に至る。本夜、シルハウスキーと共に晩餐を喫し、軍旗に関する答解を得たり。

1906.07.25. 水 晴

暑し。東京より手紙来たる。公使館に至り、軍旗の答解を^{あた}与う。中央金庫より八、九、十、十一月分の手当てを送り来たる。~~東京より手紙来たる。~~[消去]

1906.07.26. 木 晴

暑し。公使館に至る。書肆^{しょし}に至り、旅行用の書籍を買う。

1906.07.27. 金 少雨

ページ：108

東京へ手紙を出す。^{その}其他、記事なし。

1906.07.28. 土 少雨

午後、高木君と玉突をなす。

1906.07.29. 日 雨

午後、石坂・柳瀬両氏と、Klosterneuburg に野遊びをなす。景色、佳^かなりしも、道中、雨に^あ会い、大閉口せり。

1906.07.30. 月 晴

午前、ブラーフ大佐来訪。昨日、連隊長ロシャット、^{ウィーン}維納に來たりたり、^うとの手紙を得。午前、^{その}其ホテルに訪問し、^つ次いで、公使館に山梨中佐^とを訪う。午後四時、中佐と共に、連隊長^とを訪い、次いで、午後八時、ホルクスガルテンに晩餐を喫す。

1906.07.31. 火 晴

公使館に至り、山梨中佐に昨日の礼を述べ、次いで、共に昼食を喫す。高木氏と共に玉突をなす。

1906.08.01. 水 晴

本日は、しげ子の命日なるも、別になす事なし。夜半、眠り成らず。（高木氏と）[行外追加]玉突をなす。全勝を得たり。

1906.08.02. 木 晴 後 少雨

昨日、書肆^{しよし}に至り、字引を買う。本日、上靴を買う。字引二十六クロネ。上靴六クロネ。

1906.08.03. 晴 金

本日、午後五時半、日比翁助・教行両氏^{おうすけ}来訪。其玄妙^{そのげんみょう}に驚く、直ちに同行して、ホテル・クランツ^{ただ}に至り、次いで、プラーターを散歩す。

1906.08.04. 晴 午後雨 土

午前九時、両氏^とを訪い、共にシャツカンマー及び博物館を見物し、次いで、諸種の買物の世話をなし、午後九

ページ：109

時半、北西停車場に両氏^わに分かる。昨日、マイランド[濁点]万国博覧会に火事あるの新聞を見、直ちに吉岡君に見舞電報を発す。

1906.08.05. 晴 日

吉岡君より、返電来たる。午後、鶴見・高木両氏とノイワルデックに遊び、次いで、玉突をなす。

1906.08.06. 月 晴

斬髪・入浴す。書肆^{しよし}に至る。

1906.08.07. 火 晴

荷物の片付けをなす。旅行計画をなす。夕食後、玉突をなす。

1906.08.08. 水 晴

荷物の片付け、略終わる。他、記事なし。日比君より為替来たる。本日、ドイツホテルに日本人会あり。

1906.08.09. 木 晴

公使館に至り、午後、山梨・高木両氏と共に西書記官^とを訪う。

1906.08.10. 金 晴 曇

ライヒを訪う。射撃学校副官より手紙来たり。上官不在なれば、十二日午後、到着すれば差し支えなし、との通知あり。

1906.08.11. 土 晴 雨

午前、鶴見氏を訪^とい、共に散歩し、図囊^{ずのう}を買う。十六クローネ。夕食後、高木氏と玉突をなす。東京に手紙を出す。

1906.08.12. 日 晴

午前十時半、出発。スタート停車場に至る。停車場にて、不斗^{はからず}も旧連隊副官^あに会い、共にブルックに至る。副官、

ページ：110

一下士を派^よして、余を迎え、従卒も出来居り。ランプ・紙、其他^{その}インキ等、皆、室に備えあり、万事他前の好都合なりし。学校長は、休暇中にて、休職になるべしと評判せり。一少佐^{その}、其代理をなす。午後、シャード大尉と、余の専属大尉（教官）[丸括弧]を、ブルックに誘い、晚餐の御馳走をなす。

1906.08.13. 月 晴

ブルックは、空気清涼、心身爽快なり。本日、メルデンを終わり、直^{ただ}ちに科業に着手す。山梨中佐に手紙を出す。

1906.08.14. 火 晴

日課通り、本日始めて射撃をなす。肩、大いに痛し。五十発を発射す。

1906.08.15. 水 晴

本日は祭日にして休み。午前、教官、来て、不審の説明をなす。山梨中佐より返事あり。軍団学校入校の許可せられずと。午後、シャード大尉と共に公園を散歩す。

1906.08.16. 木 午前 雨 後 晴

本日は、日課表によれば、距離測量実施の筈なりしも、雨天なれば、室内作業となれり。

1906.08.17. 金 晴 後 雨

本日午後、射撃学校教官部の大競点射撃あり、午後の課業を休止す。本日の競点射撃には、皇帝より賞品^{たま}を賜い、一等賞は、金時計なり。余は、客分^よとして招待せられ、七十点満点の五十四点^うを得。客分の一等賞を得たり。教官部の一等賞は、同七十五点満点の六十四点なりし。射撃後、学校本部に招待せられ、晚餐を喫し、ケーゲル遊びをなす。

1906.08.18. 土 晴

本日は、皇帝の天長節にて、休暇。^{ひるしょく}午食は^よ盛宴を張りて、万歳を祝せり。余は、招待せらる。

ページ：111

1906.08.19. 日 晴

別に記事なし。本夜、シャード大尉と共にブルック市中に至り、共に晚餐を喫す。

1906.08.20. 月 晴 ^{にわか}驟雨

本日は、^{こうこく}匈国の大祭日にて、休暇の午後、Altenburg に行き、発掘物を見る。寒し。

1906.08.21. 火 曇

寒し。外套を ^{ちゃく}着せり。秋来の如し。記事なし。

1906.08.22. 水 晴

記事なし。

1906.08.23. 木 晴

暑気、^{やや}稍、強し。記事なし。

1906.08.24. 金 晴

本日、学校教官連より招待せらる。飲み過ぎて、射撃、^{あた}中らず。

1906.08.25. 土 晴

記事なし。本夜、ハーラッハ・ケラーに至り、伯爵の葡萄酒を飲む。酸っぱし。

1906.08.26. 日 晴

寒し。シャード大尉と森林散歩をなす。

1906.08.27. 月 晴 ^{にわか}驟雨

遠距離射撃にて、ゴイラスに至る。帰途、雨に降られ寒く、大閉口せり。

1906.08.28. 火 晴

ページ：112

寒し。風邪。心地悪し。本夜、将校集会所に招待せられたるも、心地悪しく、^あ直ちに室に帰れり。^{ただ}

1906.08.29. 晴 水

東京より手紙来たる。心地、尚、^{なお}悪し。

1906.08.30. 木 晴

風邪、尚、未だ直らず。撮影す。

1906.08.31. 金 晴

風邪、尚、未だ全く直らず。心地、大いに^{こころよ}快し。東京に手紙を出す。

1906.09.01. 土 晴

風邪の心地、大いによし。記事なし。活動写真を見る。何もかも日本なり。旅順の降伏・水雷艇・戦闘等、皆、作り物なり。

1906.09.02. 日 晴

午前、距離測量器の修正をなし、後、市街を散歩す。写真の見本、出来上がる。

1906.09.03. 月 晴

記事なし。暑し。

1906.09.04. 火 晴

別に記事なし。暑し。

1906.09.05. 水 晴

本夜、学校本部に招待せらる。暑し。

1906.09.06. 木 晴

本日も、^{すこぶ}✕[消去] 頗る暑し。午後、曇。記事なし。

ページ：113

1906.09.07. 金 晴

暑し。記事なし。

1906.09.08. 土 晴

本日は、マリヤの祭日にて休暇。シヤード・ワイトホーフワー・スラトラベック諸大尉と共に、ドナウを下りて、プレスブルグ[濁点]に至り、後、^{ウィーン}維納に至りて、高木氏の宅に宿す。プレスブルグ[濁点なし]にては、日本将校を珍しがり、群集、一行を囲んで喧囂^{けんごう}限りなし。

1906.09.09. 日 晴 驟雨^{にわか}

午前、高木氏を辞し、山梨中佐^とを訪う。然るに、過日来、屢々^{しばしば}出せし手紙は、悉く^{ことごと}従卒に盗まれて届き居らず。故に、競点射撃に寄附し賞品は準備でき居らずして、閉口せり。西氏^とを訪い、写真挿^{ざし}を貰い、漸く^{ようや}其責^{そのせめ}を塞^{ふた}げり。

1906.09.10. 月 雨

風邪の気味にて、頭、重し。昨夜来、下痢。午前、五回。スラトラベック大尉[に]寄送の銀製巻煙草入れ、到着す。写真、二十四葉、到着す。午後、臥^{がじよく}蓐す。スラトラベック大尉に煙草入れを送る。

1906.09.11. 火 曇

下痢、全く止^やむ。寒し。寒暖計、十度に下がる。□□中に戦闘射撃。閉口せり。

1906.09.12. 水 晴

記事なし。校長代理以下、十名を招待す。

1906.09.13. 木 曇

記事なし。

ページ：114

1906.09.14. 金 雨

本日、競点射撃あり。第三期将校学生の修学終わる。暇乞^{いとまごい}をなす。正午、学校本部に招待せらる。学校長代理及び副官に記念品を送る。午後、五時五十七分出発。スラトラベック大尉見送り来たる。午後八時、ラッアレットに入る。

1906.09.15. 土 半晴

午前、山梨中佐^とを訪い、共に公使館に至り、次いで、山梨・菊池^つと玉突^{しよし}をなす。書肆に至る。

1906.09.~~20~~.16. [二十から十六に変更] 日 雨

午前、西書記官を訪い、賞品恵与の礼を述べ、次いで、家に帰りて、諸般の整頓をなす。東京に手紙を出す。

1906.09.~~20~~.17. [二十から十七に変更] 月 半晴

午前、公使館に至り、明日訪問の手続きを問う。他、記事なし。

1906.09.18. 火 半晴

午前、陸軍省・参謀本部・宮中武官・軍団司令部に射撃学校終了の報告をなす。

1906.09.19. 水 半晴

午前、ライヒ及びレーブル大佐を訪う。本夜、西書記官に招待せらる。東京より手紙来たる。

1906.09.20. 木 雨

本夜、ホルクスガルテンに旧連隊将校十数名と会す。痛飲徹^{てっしょう}宵。

1906.09.21. 金 雨

砲兵連隊長ヤックシ大佐をグリーヒッセンバイテルに訪^とい、次^ついで、アポロ劇場に至る。

1906.09.22. 土 雨

在^{ウィーン}維納狩兵大隊に招待せらる。玉突をなす。

ページ : 115

1906.09.23. 日 雨

終日、室居。記事なし。

1906.09.24. 月 雨

午前、入浴。他、記事なし。

1906.09.25. 火 晴 後 雨

大いに寒し。寒暖計、五度を下る。正午、寒、極まる。

1906.09.26. 水 雨

寒し。午後、山梨中佐を訪^とう。記事なし。

1906.09.27. 木 晴

天気、始めて回復す。本夜、石坂氏と共にローナハ劇場に至る。

1906.09.28. 金 晴 曇

記事なし。

1906.09.29. 土 晴

記事なし。本日、射撃学校事件に付き、軍法会議に証人として、(来たる十月二日)[行外追加]出廷を要求せらる。

1906.09.30. 日 曇

本日、日本人会あり。次回の幹事に指命せらる。

1906.10.01. 月 曇

斬髪・入浴す。記事なし。

1906.10.02. 火 曇

ページ：116

語学教師来たる。共に佐藤氏を訪う。フェートル・バンベルクに赤十字社寄附の礼を述べたるケルナー中尉に礼状を出す。シェーンブルンに遊ぶ。軍法会議に至る。

1906.10.03. 雨 水

佐藤氏来訪。共に教師を訪う。本夜、富田氏の送別会あり。

1906.10.04. 曇 木

□の勲の願書を出す。西書記官を訪う。

1906.10.05. 半晴 金

午前、公使館に至る。玉突をなす。東京に手紙を出す。

1906.10.06. 土 曇

本夜、高木氏と共に寄席ローハナに至る。

1906.10.07. 日 晴 後 雨

午後、山梨中佐を訪い、共に玉突をなす。

1906.10.08. 月 曇 雨

午後、山梨中佐と共に玉突をなす。本夜、山梨中佐に招待せらる。

1906.10.09. 火 晴

午後、高木氏来訪。服屋に至り、仮縫いを合わす。シャイヒ中尉来訪。

1906.10.10. 水 晴

杉村少佐に「ストレッチフルール」[かぎ括弧]の催促状を出す。西書記官を訪う。

1906.10.11. 木 晴

ページ：117

午後、西書記官^とを訪い、（細君及び）[行外追加]高木氏と共にヒュッテンドルフに遊び、後、西一家と共にアポロに至る。

1906.10.12. 金 晴

公使館に至る。午後、玉突をなす。~~高木氏以下と送別の為、レーウエンプロイに晩食を喫す。[消去]~~

1906.10.13. 土 雨

~~高木氏、出発に付き、ウエスト停車場に至り、見送りをなす。山梨中佐、井出と玉突をなす。[消去]~~

高木氏以下、送別の為、レーウエンプロイに晩食を喫す。玉突をなす。

1906.10.14. 日 晴

高木氏出発^つに付き、ウエスト停車場に至り、見送りをなす。山梨中佐、井出と玉突をなす。

1906.10.15. 月 晴

襟及び襟飾りを買う。他に記事なし。

1906.10.16. 火 雨 曇

注文の冬服、出来上がる。本夜、池田君を訪う。東京に手紙を出す。

1906.10.17. 水 晴

錠木を買う。記事なし。

1906.10.18. 木 晴

山梨中佐来訪。玉突なす。本日、旅行の許可を得たり。

1906.10.19. 金 曇

~~ライヒに招待せらる。[消去]~~記事なし。西氏^{やすみごい}を訪い、休^{やすみ}乞^ごをなす。山梨中佐を訪う。

1906.10.20. [曜日と天候記入なし]

石坂氏出発、ウエスト停車場に見送る。射撃学校本部^とを訪う。ライヒに招待せらる。ハンケNSTAIN大尉と共にチル

ページ：118

クスに至り、次^{つい}でラートハウス・ケラーに至る。靴^{十二グ}_{ルデン}・カバン^{二十七グ}_{ローネ}を買う。

1906.10.21. 日 曇

記事なし。井出と玉突をなす。

1906.10.22. 月 晴 霧

銀行に至り、千五百クローネを取り来たる書肆^{しょし}に至る。公使館に至り、ク~~ラ~~[消去]ックに至り、切符を注文す。靴を取り替う。

1906.10.23. 火 晴 本夜、独^{ドイツ}乙旅行に出発す

クラック[ルをッに修正]クに至り、切符を取り、切符代二百四十八クローネ。靴屋に至り、昨夜の靴の到着せざるを詰責^{つかい}す。使^{つかい}は、家の番地を間違えたることを発見し、大いに混雑せしも、午後二時、漸^{ようや}く新靴を受け取れり。午後八時、(ノルド)[行外追加]ウエスト停車場に至る。切符の通絡^あ、悪しくして、八時四十分の汽車に乗ることを得ず。為めに、九時四十分まで待つこととなれり。進行^{ひとき}、壱時時斗^じりにして、機関車に故障を生じ、停止一時間。為めに、「クルーメッツ」[かぎ括弧]にて、三時間斗^{ばか}り無益に次の列車を待たざるべからざるの時間を減らし、余^よの為めには畢^{ひつきょう}竟、好都合なりし。

1906.10.24. 水 霧 晴 独乙旅行の第二日

「クルーメッツ」[かぎ括弧]にて、一時間半待ち、其間、只一人待合処に眠りたる後、午前六時五十分発の列車^{とう}に搭し、七時二十八分、[「」][前かぎ括弧欠如]ケーニツヒグレッツ」に着。ホテル・ホールツプに投宿。朝来、霧深く、戦地視察^{いかが}如何あらんと思ひしも、九時頃より晴れ、直ちに馬車を駆け、戦場^{ただ} Prim、Probluz、Langenhof、Chlum、Sweip-wald、及び其^{その}以東を回り、午後五時、旅宿に帰る。記念碑・墓標は、諸所にあり、無数なり。展望台には、番人居らず、登ることを得ざりし。帰宿後、夕食。直ちに

ページ：119

寝^っに就く。

1906.10.25. 木 霧

独乙旅行の第三日。午前、腹工合、悪^あしく、旅宿^{とど}に止まる。午後、「ケーニツヒグレッツ」[かぎ括弧]に於ける六十六年遺物博覧会を見、次^ついで、ケルナー中尉^とを訪う。不在。宿に帰りて寝ねしと欲すれば、ケルナー中尉来訪。直ちにバンベルク中佐を訪うべきを告ぐ。依りて、中尉と共に^{ママ}中佐^とを訪い、次いで、旅館グランホテルに共に晩食を喫す。

1906.10.26. 金 晴

独乙旅行の第四日。午前五時半、ケルナー中尉[長音記号]来訪。共に戦場視察に行くことを告ぐ。

ありがためいわく すなわち しっかい
難有迷惑なり。即、悉皆支払の決心して、同行を約す。六時三十分、ケーニツヒグレッツ発、スカーリッツに下車し、同戦場を視、次いで、馬車を駆けてナホード[濁点]に至り、スカーリッツに帰り、昼食し後、シュワインシェーデルの戦場を見たる後、午後八時、トラウテナウに着す。スカーリッツにて栗田・河村両氏の来たりたることを聞けり。本日は、大いに寒く、車上にて振り上れり。

1906.10.27. 土 霧 独乙旅行の第五日

午前七時、[ケルナー]中尉と共に出発、トラウテナウの戦場を見回り、午後一時半、発車。ケーニツヒグレッツにて中尉に分かれ、プラークに至る。午後八時、旅館メトロポールに宿す。昨日は、バンベルク中佐、余のプラーク[濁点]到着の時、在プラークの将校に停車場まで見送らしめんとて、大いに奔走し、中尉をして其時間を急報せしめしも、プラークに着すれば、誰もあらず。結局、余の為めには厄介なく、仕合わせなりし。

1906.10.28. 日 曇 独乙旅行の第六日

早天、旅館メトロポールを出て、ラートハウスの有名大時計を見る。時計は、約五百年以前のものにして、時を報ずる毎に時計

ページ：120

の上面にある両硝子窓先を開き、時を報ずる間、其内を天体に象れる人形、漸次回転し来たり。斧を振り、手を動かし、首を曲げ、諸種の動作をなす。時計の下に四人の人形あり、同じく、時を報ずる間、手首等を動かし時を報じ、終われば、鶏鳴一声をなす。奇なり。次いで、ドーム寺を見る。格別のことなし。ストラホーには、絵画博覧会ありしも、冬季は閉鎖して、見るを得ず。即、転じて、有名なワーレンスタインの住所を見る。当時の一部、尚存し、他は、其遺族、生存す活す[存すを活すに修正]。一二の室、殊に謁見室等は、中々立派なり。リュッツエンの戦にワーレンスタインの乗りし馬、敵弾に斃れたるもの、剥製として尚存す。次いで、宮城を見る。これも格別のことなし。只、舞踏室は稍立派なり。三十年戦の以前に、両市長の宗教上の争いより他の為めに、宮城の一室より三十間も深き庭面に投下せられたるもの、尚存し、下には記念碑あり。次いで、ルードルフィウムに絵画博覧場を見る。中々立派の画ありし。カールス橋は、市中尤も宏壮の橋にして、各柱、皆、尚、像を戴き、長さ五百（五）[行外追加]米、其一侧に古塔あり。中央の二橋節は、千八百九十一年の大水に流れたりとして、尚、像なし。第七、第六柱の間に、一僧正の、暴君の強迫に遇うて水中に飛び込み死せし紀念として、小大理石上に十字架を刻みしものを存す。行人、其上を撫して礼拝しつつ過ぎ行くを見る。本日、一大尉、ケーニツヒグレッツより電報を得たりとて、尋ね来たりと云う。午後四時過ぎ、旅行計

画を研究したる後、該大尉^{がいと}の住宅を訪う。大尉を Schwarz と云う。彼は「ケーニツヒグレッツ」[かぎ括弧]の「バンベルク」[かぎ括弧]中佐より手紙^{うよ}を得。余を尋ね回れりと云う。其間^{その}違いの本源は、日露戦以来、将校間に日本有名の将校^{あだな}の渾名を附すること流行し、バンベルク中佐は自ら上村^{かみむら}と称し、手紙にも^{しばしばその}屢々其名を書せりと云う。中佐は、廿七日に手紙を該大尉に出し、余の到着すべきを告げ、到着すれば停車場に迎えて万事世話すべきことを

ページ：121

依^{いしよく}嘱^つせり。次いで、「トラウテナウ」[かぎ括弧]より余の出発の時間の決定するや同行せし「ケルナー」[かぎ括弧]中尉は、直ちに其^{ただ}趣^{そのおもむき}を中佐に急報し、中佐は、又々、電報にて「午後七時、ヲクムラ到着す」[かぎ括弧]との電報を同大尉に送れり。然るに、同大尉が未だ手紙を受け取らざるが故に、其^{その}話なるを知らず。奥村と上村との差はあれども、多分中佐の到着することならんと思ひ、余の到着時刻に停車場に至り中佐を求むれども、在らず。空しく家^{むな}に帰り、次いで、午後十時の汽車到着時間に更に停車場に至るも、中佐、亦、在らず。該大尉は、何故に中佐が如^{かくのごとき}此無根の電報を發したるやを怪しみながら家に帰り、翌朝始めて手紙を受け取りて、始めて其到着する人の余なることを知りたるも、其何れの旅館に至りたるや不明なるが為めに、直ちに警察に電話を掛け、日本人の投宿せし処を尋ねたれども、分^{すなわち}からず。即^{その}、其妻と共にプラークの旅館十数軒を尋ね廻り、漸^{めぐ}く余の宿所を知りたるも、余は、偶然にも見物出掛け中にて不在なりしなり。聞けば、同中佐は、同じく在プラーク第七十五連隊付大隊長中佐「シヤイヒ」[かぎ括弧]にも手紙を出し、同中佐、亦、十数軒の旅館を尋ね廻りたりと云う。大尉は、此事^{この}を余に語りたる後、本夜は共に夕食せんとて「ソヒエンザール」[かぎ括弧]に至れり。期せず[圈点]して、及び、途中に於て、邂逅^{おいかいこう}したる同隊の将校十数名及び妻君連と一座し、午後一時半までごた〜[濁点]し、旅館に帰るときは、シヤイヒ中佐は、余を旅館まで伴えり。本夜、翌日の^{ひるしょく}午食に連隊に招待せらるべきことを約す。

1906.10.29. 晴 月 独乙旅行の第七日

午前、プラーク市の写真帖を買い、午前十一時に旅館にて待てば、連隊より馬車にて迎いに來たる。一中尉、來たれり。

ページ：122

依^よりて、直ちに同行し、連隊に至れば、連隊長は結婚せるにも不^{かかわらず}拘、特に余の為に來て昼食を共にし、其間^{その}、優遇を極む。連隊の楽隊は、隣室にありて、絶えず樂を奏し、中間、君が代を奏す。予は、午後三時四分発の汽車にて「ドレスデン」[かぎ括弧]に出発することに決定したれば、第七十五連隊の将校の、極めて熱心に、尚一夜をプラークに留まることを勧めたるも、固辞して午後三時別れを告げれば、楽隊は更に君が代を奏して余を送り、不^{はからずもママ}計も、冷汗、背に流るるを覚えたり。併し、同隊の将校^{しか}

かくのごときが、如 此 余を優遇し呉れたるは、実に感謝に 辞 なかりき。連隊の門に至れば、連隊の馬車は既に装を備えて余を待ち、「シャイヒ」[かぎ括弧]中佐、又、出発を送らんとて、予と同行し、停車場に至れば、「シュワルツ」[かぎ括弧]大尉、亦、見送りのために来たり居れり。午後三時四分出発、六時五十三分、ドレスデン到着。旅館「カイザーウイルヘルム」[かぎ括弧]に入る。

1906.10.30. 晴 火 独乙旅行の第八日

午前八時半、旅館を出て、先ず、Albertinum に至り、石膏細工及び蠟石細工等を見る。余には趣味少なりし。次いで、王城内の Grüne Gewölbe に至る。維 納 の Schatzkammer なり。金銀・宝石、眼を眩まする斗り。殊に、ダイヤモンド等は、其幾許なるを知らず。西洋の(国)[行外追加]王の宝物なれば、左もあらん。なれども、其贅沢、驚くの外なし。次いで、王城を見る。是は、格別の事なく、プラークの王城と大差なし。キエームゼー王城に及ばざるも、数等なるを覚ゆ。次いで、武器陳列場を見る。これは、宏大なるものにて、古代よりの武器を、其変遷に従いて類別して陳列し、其数、幾千なるを知らず。能くも集めたるものなり。其内、

ページ : 123

国王等の馬装等に、及び、剣等には、宝石を無数に 鏤 めたるものあり、光輝燦然、慥に一見の価あり。午後、後、有名なる絵画陳列場を見る。ローマのは忘れたれども、此処のも能く集め、皆、逸品らしく感ぜしめたり。内に、ラフワエルの絵は、唯一個ありたるのみ。故に、其羅馬及びフローレンツの絵画陳列場のものに及ばざる。甚 だ遠きは、これにても知るべし。午後四時、首藤中佐を訪えば、ステッチンに出発後にて在らず。写真帖を買い、午後六時、旅館に帰る。

1906.10.31. 水 晴 独乙旅行の第九日

午前七時、旅館を出て、同二十分発車にて伯 林 に向かい、同十時十五分伯林着。直ちに旅館ホテルベルビューに至れば、満客にて室なしとて浴室に入れらる。不愉快極まりなし。直ちに服装を整えて、大使を訪い、令夫人に遇い、次いで、公使館に至り、船越・明石両氏に遇う。中川少佐、又来たる。大使に面会の後、明石大佐に招待せられ、ホテルパラストに昼食し、後、中川の世話にて、柏 村 のパンションに入る。荷物を旅館より送らしめたる後、森邦武氏を訪い、更に中川の宅に至り、天長節に通常礼装を借りることを約し、後、船越氏に招待せらる。午後十一時、家に帰る。中川・森、送り来たる。

1906.11.01. 木 晴 独乙旅行の第十日

早天、斬髪・入浴す。明石大佐を訪い、東京に於ける交換問題の意嚮を問い合わせることを約し、(河合中佐を訪い、金谷少佐に遇う。)[行外追加]次いで、菊地中佐を訪えば、在らず。即 、徳永少佐を訪うも、亦、在らず。中川少佐を訪い、共に晚餐を喫し、旅宿に帰る。

1906.11.02. 金 晴 独乙旅行の第十一日

早天、^{かしわむら}柏村の家を出て、Wilhelmstrasse より ^へBrandenburger-Thor を^へ至て、国会議事堂及び戦勝紀

ページ：124

念碑・戦勝並木・unter den Linden を^へ至て、国寺・王城・Leipziger-strasse を^へ至、後、動物園を見る。国会議事堂は、中々立派にて、中央に鍍金の塔あり、^{ママ}ウインのよりは、遥かに立派に見え、議事堂前にビスマークの像あり。公園は、中々宏大にして、諸種の設計、^よ能く出来たり。戦勝記念碑は、下部に、六十四年・六十六年・七十年及び凱旋の四図を ^{あらわ}現し、碑の周囲外面を凹削して、^{これ}此に鍍金の砲を備え付け、上部には、鍍金の天使あり、月桂冠を^{ささ}捧ぐ。一目^{さんぜん}燦然。実に立派なり。碑に対して、モルトケの大理石像あり、戦勝並木には、千七百年代よりの普の国王・五百羅漢の大理石像ありて、^{その}其左右には、宰相・主将の像を相置す。ウイヘルム二世を大帝と彫刻しあり。wilt[cを消去]helm 街はつまらぬ町なりしも、unter den Linden 及び Leipziger 街は、中々立派にして、家の建築材料こそ普通の石を用いたれ、^{その}其立派さは、^{ウィーン}維納に勝るとも劣るとは見えず。寺は、例によりて例の如く、王城は、左程立派なりとも思えず。王城前に、^{この}ウイヘルム一世銅像あり。此像は、四隅に、獅子、武器・旗等を^{おさ}抑え、実に立派に^よ能く出来たり。^つ次いで、動物園を見る。中々、設計^よ能く出来たり。^{あたたか}恰も午後四時にて、獅子・虎等に^{えさ}飼を与うるときにて、^{その}其食を争うて^{ママ}猛獳の相を現す所、^{さかん}盛なるものなりし。次いで、森を訪い、晚餐を喫し、次いで、日本クラブに至り、天長節の為に集まりし在独駐在の諸氏に遇う。次いで、小池中佐と共に玉突をなす。

1906.11.03. 土 晴 独乙旅行の第十二日

本日は、天長節なれば、独乙駐在の諸官にして地方にあるものも、大部、^{ベルリン}伯林に集合したれば、共に会食せんとて、午後一時、

ページ：125

日本倶楽部に集まるもの、^{ママ}明石大佐・森・菊地・河合中佐・徳永少佐・中川少佐の伯林駐在者を始めとし、^{すとう}小池・^{かなや}奈良・^{すとう}首藤中佐・^{かなや}金谷・津野・宇垣少佐・勝野大尉等、随分沢山なりし。次いで、中川少佐を^と訪い、午後七時、共に大使館の夜会に至る。^{あい}相会するもの、無慮七十余名。飲む、歌う、大いに愉快なりし。午後十二時、^{しょし}旅宿に帰る。書肆に至る。

1906.11.04. 日 雨 独乙旅行の第十三日

本日は、日曜にして、殊に雨降りなれば、別になす事なく、大使の宅に至りて、昨夜の礼を述べ、^つ次いで、中川に招待せられて、(津野)[行外追加]宇垣・金谷・勝野と共に料理屋に至る。次いで、宇垣・

中川両氏と共に、市街を散歩し、次いで、寄席^{よ せ}Wintergarten に至る。次いで、カフエーに麦酒を飲む。

1906.11.05. 月 晴 独乙旅行の第十四日

時計の針、工合悪しく、直しに遣いせり。伯林^{ベルリン}の写真帖を買う。徳永君来訪。次いで、書肆^{しょし}に至り、午後、射撃学校等の研究をなす。

1906.11.06. 火 晴 独乙旅行の第十五日

午前九時半、徳永君来訪。共に見物^{おもむ}に赴く。ウイヘルム一世の宮殿は、立派なるも、規模余り大ならず。又、余り立派なる品ととてもなかりし。但し、何れも、鍍金の多きには驚くの外なし。次いで、Zeughaus に至る。或物は、ドレスデンに勝り、或者は、劣る。但し、品数多きことは、伯林^{ベルリン}、最ならん。格別、眼に留まるものはなかりしも、大砲の数は多く、ケーニッヒグレッツ・サンプリバーの模型戦場^よは、能く出来たり。次いで、王城を見る。これも、ウイヘルム一世宮殿と大同小異。只、現皇帝^{ただ}、時に、来たり住するが故に、稍^{やや}、立派なるの観あり。内、フレデリック一世時代に、純銀品^{もつ}を以て装したる室の飾り物・銃[消去]等を戦争当時、金を要する為め、鑄

ページ：126

潰せしものあり。今は、木筐^{きばこ}に鍍銀をなす。次いで、古ムゼウムに至る。塑像等のみにて、真につまらず。次いで、ペルガノン・ムゼウム^{ママ}に至れば、唯、千年以前の古物の掘り出したるものを有するのみ。フレデリッキムゼウム^{すべ}に至れば、凡て、仏臭きもののみにて、一向に趣味なし。即^{すなわち}、帰りて、午後四時、徳永君と共に、昼食を喫し、森・中川・菊地^{ママ と}を訪い、森・菊地両君と明日ポツダムに至ることを約す。本日、本屋にて一兩冊^{ママ}を買ひ、又、修理に出し置きたる時計、直り来たり。僅かに針の引掛かるを直すのみにて、四マルク^{むさぼ}を食^{おどろくべし}られたり。可^か驚。且つ、時計屋の如きは、決して約束したる時間に直さず処す。一兩日^{ママ}を過ぎずと、これ、利益少なきが為めなりと云うも、独乙人として可^{ドイツ}惜^{おしむべし}。欠点ならずや。或いは、真の物質的の特有性を出したるものか。

1906.11.07. 水 霧 独乙旅行の第十六日

午前八時半過ぎ、菊地・森両氏^{ママ}来訪。即^{すなわち}、直^{ただ}ちに出発。ポツダム停車場より乗車し、Potsdam に至り、Stadtschloß を見る。フレデリッキ大王の古城住所^{なお}にして、今尚、大王の所持品等、数多ありたり。殊に、大王の像及び画は、種々ありて、其人^{その}を想見せしむ。大王の軍事会議室^{すなわち}、即、秘密室は、二重戸となり円机あり。食事等は、其中央^{その}の円机下^{きわ}、際にて下より持ち上がり来たる様なり居り。以て、如何^{い か}に秘密になしたるやを知るに足る。其他、書籍は皆、仏蘭西書^{その フランス}にして、大王使用のイ（ン）[行外追

加]キ壺・机・椅子等もあり。宝は、余り立派にはなけれども、先^まず一通りのものなり。次いで、St[消去]Sans[s]ouci の絵画を見る。大王の集めたるものにて、数は少なけれども、皆、名画のみなりと云えり。サンスシー宮城は、大王自ら設計して立てたるものにて、室等も、可成立派なり。大王の遺物も数多ありたり。眺望、可なりと聞くも、霧深くして、見るを得ず。[改行]

ページ：127

第一に見たる Stadtschloß は、ナポレオン大帝も、亦、来^{また}たり住せることあり（攻略の時）[丸括弧]。當時、帝は特別の入り口を設けしめ、今は、之^{これ}を使用せざるも、ナポレオン階段と称して、尚^{なお}、存し居れり。各国の帝王・皇族等、来^{この}たるときは、此城に宿泊するもの多しと云えり。次いで、Orangerie に至り、北清事件^{ぶんどり}に分捕せし天球儀を見る。憤慨に堪えざるものあり。次いで、Neuschloß に至りしも、現在、皇帝、居住し、見るを得ず。昼食後、馬車^かを駆^{ママ}けて K rienicke 橋を渡り、Babelsberg に至りしも、霧、益^{ますます} 深^{もつ}きを以て、見物を止め、直ちに Neu Babelsberg より乗車し、伯林^{ベルリン}に帰り、日本倶楽部に夕食を喫したる後、家に帰る。

1906.11.08. 木 霧 独乙旅行の第十七日

午前十時、家を出て、Volkskunde 博覧会に至る。各国に類別し、古代よりの幾多のものを集め、頗^{すこぶ}る価ありし。但^{ただ}し、物品の多き割合に狭く、何処にも独乙の国風を見るも奇なり。次いで、Kunstgewelbemuseum に至る。これは、彫刻物等のみにて、つまらず。次いで、Nationalgalerie に至れば、七月よりべ切なりとて、入るを得ず。即^{すなわち}、Hohenzollernmuseum に至る。帝宝の博物館にて、フレデリッキ大王^{その}其他諸帝王の所持品等、数多ありたり。昼食後、水族館に至る。これは、能^よく設計しあり、価ありたり。但^{ただ}し、電灯^{もつ}を以て魚族等を輝かし、通行側を暗くせるは、考え付きなるも、魚族には如何^{いかが}や。終で、中川・徳永・明石・河合・菊地^{ママ}の諸君に暇^{いとまごい}乞の訪問をなし、船越書記官の宅に夕食を喫す。

1906.11.09. 金 晴 独乙旅行の第十八日

ページ：128

午前九時、家を出て、徳永少佐と共に Charlottenburg の宮城及び Mausoleum を見る。最も古き宮城とて、立派の度は遥かに他に劣る。モーゼレウムには、ウイルヘルム一世及び三世（夫婦）[行外追加]？[疑問符]の棺あり。別に記することなし。次いで、自動車博覧会を見、戦用装甲自動車を見る。五サンチ位の砲1門、砲塔的に中央にあり。小銃^{ちよう}二挺^うは、前部より射撃することを得る如くす。次いで、大使館^{いとまごい}に至り、暇^と乞をなし、又、大使の宅を訪うて、暇乞をなす。午後、荷物の片付けをなし、小憩の後、船越書記官に、又々、招待せらる。[改行]

ベルリン

伯林に入りて、初めて感想を起こしたるものは、街通の至る所、整頓し、^{ことごと}悉くアスファルト[濁点]なると、車馬往復の頻繁なると、交通機関の整備、殊に汽車出入りの忙、^{ばか}驚く斗りなると、交通機関の多き為め、街道を往復する徒歩者の^{しばしば}屢々困らしめらるると、等なりし。

1906.11.10. 土 晴 独乙旅行の第十九日

午前七時、家を出て、Friedrich 停車場にて乗車。午後五時、エッセン着。^{みやかわ}宮川中佐、^{むか}小使いを迎いに出し置きたれば、同道して事務所に至り、^つ次いで、^{この}旅館エッスナーホーフに入る。此日八時五十分発の急行列車に乗れば、午後四時エッセン着の事を知りたるも、既に宮川中佐に電報を^{ことさ}発したれば、^{ことさ}故らに普通列車に乗れり。汽車、^{ママ}Westfahren 州に入り、Dortmund 府に近づくや、煙突林立、煤煙、天を蔽うて、日色、^{もつ この い か}為に暗きを覚う。以て此国の如何に工業の隆盛なるやを知らしむ。エッセンは、^{すなわち この}即、此州の中心なり。平瀬少佐の言によれば、^{この}此州には、肺病、^{い かん}少なしと。煤煙と肺病、如何の関係を有するものにや。[改行]

ページ：129

本夜、エッスナーホーフにて、宮川中佐・平瀬少佐と晩食を喫し、玉突をなす。^{あたか}山崎少佐は、^{あたか}恰も^{ベルリン}伯林に至り、在らず。エッスナーホーフは、^{おも その}クルップ会社の創立せしものにして、^{おも その}重に其客を宿泊せしむ。故に、一般通行者は、^も若しクルップの客の満つるときは、他の旅館に転宿せざるべからざることありと。^{その}其建築設備の美なる、エッセン第一にして、現に、各国の監督者（クルップ注文品の）[丸括弧]、多く宿泊し居れり。

1906.11.11. 日 晴 独乙旅行の第二十日

午前十時、宮川君来訪。日曜なれば、工場見物も出来ず、共に散歩の後、平瀬君を^と訪い、共にクルップ会社の植民地を見物し、後、旅館に共に夕食を喫し、玉突をなす。

1906.11.12. 月 曇 独乙旅行の第二十一日

午前九時半、^{すなわち}宮川君来訪。^こ即、共にクルップ会社に至り、^こ参観を請い、共に工場を見る。日々、三万の職工を使用せる工場の事とて、^{その}其規模の宏壮なり。大砲製造所溶鋁炉、真に一見の価あり。午後、停車場に至り、荷物を送り、後、宮川・平瀬両氏と会食す。

1906.11.13. 火 晴 独乙旅行の第二十二日

午前五時半出発。汽車に^{とう}搭し、午後四時、セダンに着し、ホテルオイロープに入る。実際、言語、一も通ぜざるも、ボーイ中に、一人の独乙人あり、大いに便宜を得たり。但し、旅館は、類焼後の新築にて、^{はなは}甚だ寒く、蠟燭を点じ、呼び鈴なり。^{はなは}甚だ不便なりし。

1906.11.14. 水 [天候記入なし] 独乙旅行の第二十三日

ページ：130

午前九時、ボーイと共に馬車を^か駆けて、^ま先ず、バゼールに至り、骨堂を見る。五百人のバイエルン人、及び、五百人の仏人の頭蓋骨等、累々たり。^つ次いで、戦争当時より残留せる小旅館に至れば、当時の弾痕残物時計^{十一時半}に止まる等、幾多の記念と^{とど}めたり。次いで、イリーよりフロアンに出て、家に^{ひるしょく}帰って午食す。午後三時、再び馬車にて^か駆けて Schloß Bellevue に至る。将軍 Wimpfen の降伏条約に調印せし所なり。更に進んで、Donchery の手前に一小農屋に至る。此れは、仏帝のと会合せし所にして、両者共、^{なお}尚、当時の旧態を存するも、人の参観を許さずと。

1906.11.15. 木 独乙旅行の第二十四日 霧

午前七時、汽車に搭して、メッツに向かう。朝来、霧深く、途中、マルスラツールにて、戦場を見んと欲せしも、濃霧。見るを得ざるを^{おもんばか}慮り、Longuyon にて^{ことさ}故らに^{おく}一汽車を後らし、十一時半、マルスラツールに着すれば、霧、^{あたか}恰も晴れ、無類の好都合にて、徒歩、「ヴイルシウユルイロン」[かぎ括弧]より、仏軍右翼の陣地を^へ亘て、チオンビール森林の北端よりマルスラツールに帰る。二時半間を要したり。三時の汽車に搭し、午後五時、メッツに着し、ホテル「エルサスホーフ」[かぎ括弧]に入る。本日、カバン取っ手下の^{ねじ}螺子に故障あるを認め、直さしめたり。[改行]
仏国に入りて独乙と異なる^{ドイツ}※[消去]主なる感想は、汽車の^{けがらわ}穢しきこと、時間の不正確なること、^{やすね}安値なること、にて、是れは、^こ慥に^{たしか}独乙の方、優れるを覚えたり。

ページ：131

1906.11.16. 金 雨 曇 独乙旅行の第二十五日

昨夜、雨降り、早天、^{なおや}尚止まず。^{いかが}如何せんと躊躇せしも、余り大雨ならざれば、視察を遂行せんと欲し、馬車を^か駆けて行くこと半時間斗り。雨全く晴れ、^{ばか}曇天となれり。先ず、(アマンビールより)[行外追加]サンプリバーに至り、此に^{ここ}記念物陳列所を見、次いで、^つサンマリー・サンアイル・ハボンビール・ベルネビール・マルメーゾンを^へ亘て、^{ゆくゆく}グラブロットに至り、行々、独仏両軍の陣地を見、グラブロットに昼食を喫し、記念(物)[行外追加]陳列場及び Ruhmeshalle を見る。Ruhmeshalle には、各軍団各連隊毎に、戦死・負傷者の総数を掲げたる大理石板を壁に^{ちようふ}貼付し、正面中央に、現皇帝の寄送に成れ

る分捕り砲を以て^{もつ}鑄たる鍍金の仏像的像あり、下に、石函あり。中に、戦死者の名簿を蔵すと云う。陳列所にて、グラブロットにて掘り出したる弾包を買^{ひるしよく}えり。午食後、レゾンビールに至り、有名なるブレドール旅団騎兵襲撃場を見物途^と、新築の^{ほうるい}堡壘カイザリンの傍を過ぐ。外濠・鉄条網等、歴々見るべし。交通の関係上、止まるを得ずとは云え、要塞建築としては、如何や。^{いかが}午後五時半、家に帰る。[改行]

グラブロットにて昼食の時、五人の将校（少尉ならん）[丸括弧]、会食せり。^{ただ}直ちにシャンパンを飲し、又、古葡萄酒を注文す。聞けば、午前、カイザリン堡にて射撃演習あり。^{その}其後、午後三時、メッツの練兵場にて、更に演習あるを以て、其間の昼食せるなりと。一兵卒、馬車上にありて、寒さに震いつつ、将校の出て来たるを待つ。^{しか}而も、将校は、放談。容易に食事を終わらず。^{ああ}嗚呼——[縦線]。

1906.11.17. 土 独乙旅行の第二十六日 曇 雨

ページ：132

早天、雨降り天気模様あらんかと^{あやぶみ}危しも、午前九時、雨、晴れたれば、^{ただ}直ちに馬車を駈^かけて、^ま先ず、Borny・Colombeyに至り、^つ次いで、Noisseville・Nouilly・Mey・L'orme・Vany・Chieulles・Fort Julienを経て、家に帰る。帰途、視察を終えて後、少し雨に遇えり。Fort Julien は、今、Fort Manteuffel と称す。^{なが}大通りとは云い乍ら、堡壘中を道路の通過するも奇ならずや。メッツの写真帖を買う。

1906.11.18. 日 雨 独乙旅行の第二十七日

午前九時、旅館を出て、サールブリュッケンに向い、十時半、到着。旅館 Messmer に入る。^{はなは}天候、甚だ面白からず。^{ただ}直ちに^{ひるしよく}午食し、急行、スピヘルンの戦場に向かう。行程、約一里半。^{ゆくゆく}行々地形を研究し、本戦場の一部、スチリンクウェンデルに至るや、疾風雨を加え、蝙蝠傘と地図とを広げざるべからずして、大いに困難せり。^{ママ}スチリンカの森林は、今や大部伐採せられて、僅かに一部存するのみ。次いで、スピヘルンに至り、^{なかば}帰途の半、大雨、盆を覆すに遇い、靴・ズボン丸濡れ。これには、大閉口せり。午後四時、旅館に帰れば、雨、全く晴れる。

1906.11.19. 月 雨 曇 独乙旅行の第二十八日

午前六時半、旅館を出づ。^い該旅館は、^が待遇、面白からず。不愉快なりしのみならず、室は、暖を取る^{あた}こと能わずして、^{あた}少しく風邪の気味ありたり。汽車（は）[行外追加]、時間より後れて来たり。^{おく}停車場に立つ間、寒きこと、云うべからず。^{なお}尚、^{したごろも}夏の^{ママ}下衣なればなり。午前十時、ワイセンブルクに着し、^{すこぶ}旅館 Europaischer Hof に入る。頗る丁寧なるのみならず、田舎のこととて、室内に旧式の暖爐なり。大いに心地よし。午前十一時より、戦場を見回り、家に帰れば、雨、大いに来たる。

1906.11.20. 火 曇 独乙旅行の第二十九日

午前八時半、家を出て、九時十五分 Walburg に着す。途中、戦史偏纂^{へんさん}に従事せし仏人あり、ウエルト行きの汽車連結悪しければ、徒歩にてウエルトに行くを可とすとて、種々説明し呉れたり。然れども、余は、天候、余り面白からざれば、断然最初の決心を実行するを決し、二時間余、ワルブルグ[濁点]の停車場^おに待ち居る間、風雨、大に至り、雪、又、之^{これ}に加わる。此に於て、大いに他の忠告に従わざりしをよろこ^よび。十一時十五分発車。同三十五分ウエルトに着す。雨は晴れたれども、雲行き荒く、何時雨の来たるやも知れざしむ。直ちに戦場を見回り、都合克雨^{よく}に遇わずして、午后二時四十分頃、ウエルトに帰着し、昼食したる後、午後四時発の汽車に搭し、同五時四十四分、ストラスブルグ[濁音]に着し、旅館 National に入り、洗面の後、路を聞きて、直ちに電車に搭し、高木氏を訪わんとし、半途まで至れば、高木氏の、恰^{あたか}も同電車に乗らんとするに遇い、奇遇を^{よろこ}びつつ、其宅に至り、次いで、料理屋 Germania に至れば、石坂氏、亦、在り、共に夕食を喫す。

1906.11.21. 水 曇 独乙旅行の第三十日

午前、斬髪。次いで、Kunstmuseum に至り、有名なる Münster 寺を見、其活動時計を見る。時計は、正午に、^{やや}稍、活動するプラークの時計よりは、奇麗なるも、活動は劣れり。即、若干、人形の回転及び鶏鳴に過ぎず。次いで、寺の高塔百四十四米なるものに昇る階段、螺旋をなし、昇降に眩暈^{げんうん}を覚え易し。上昇するに従いて、風、益^{ますます}強く、塔は倒れはせずやと、気味悪しき程なり。百米まで上昇して止む。午食^{ひるしょく}後、旅館に帰りて、一睡の後、ブログリー街を散歩し、帝国大学・宮殿等を見回り、高木氏の宅に至り、次いで、共に晚餐を喫す。

1906.11.22. 木 半晴 独乙旅行の第三十一日

ベルリン^{ベルリン}にての計画によれば、本日はバーデン浴場^{その}に至り、其盛況を見んと欲せしも、朝来、天候、余り面白からず。即、断然之^{すなわち}を止め、午前七時半、汽車に搭して、インスブルクに向かう。バーゼル、チューリッヒを過ぎ、線路、アルプス山中に入りて、風光の明媚、譬^{たと}うるものなし。奇岩屹立、湖水^{きつりつ}清澄。而して、其岩石の峻峭^{しゅんしやう}を見て、例の、西洋人の好める登山の如何に名演なるやら想見せしむ。ブックスよりインスブルグ[濁点]に至るの間、亦、極めて明媚の地なりと聞くも、既に夜に入りて、見るを得ず。極めて残念なりし。午後十時半、インスブルク着。本日は、十五時間、汽車に揺られ、随分疲労せり。預けたる荷物、来たらず。若干、心配せり。

1906.11.23. 金 半晴 独乙旅行の第三十二日

午前八時、預けたる荷物、到着す。即、直ちに軍団長オイゲン親王の侍従に電話を以て本日拝謁を賜るべきや否やを問い合わせしに、直ちに午前十一時、軍団司令部に来たるべしと命ありたり。破格の謁見ならん。蓋し、少なくとも兩三日前に其都合を聞き合わせ、示されたる時に拝謁するを例とすればなり。今日の拝謁の為に、全旅行間、正服を携行したるも一奇なり。午前十一時、軍団司令部に至れば、親王、次いで出勤。直ちに拝謁し、種々談話の末、午後一時、午食を共にすべきを告げらる。依りて一旦退去し、大佐クルイスを訪い、旅宿に帰りて、一休みの後、親王の宅に至り、午餐の後、午後三時過ぎ旅宿に帰り、更に少佐クレメントを訪えば、ザルツブルクに出発中にて不在なりし。午後、クルイス大佐訪問。午後八時、寝に入れば、大尉ラウアー来訪。共に更に料理屋に至り、親王附少将等と午後十一時迄麦酒を飲し、次いで、家に帰る。

ページ : 135

1906.11.24. 土 晴 独乙旅行の第三十三日

午前七時半、出発。十二時、ボーツエン着。旅宿 Greif に入る。途中、度々アルプスの山中を過ぎ、絶景、云わん方なし。道、アルプスにチロールに[アルプスにをチロールに修正]入りて、山、又、山、岩、又、岩、アルプスの木枯らしは、方に山腰の緑衣を染めて、彩、燦爛削鑿、千丈の峻峯は、既に、悉く新雪に粧いして、容姿、愈嬋妍。況んや、鉄道は、溪壑を縫うて紆余曲折し急湍、常に之に伴うて、或いは、深潭となり、或いは、玉瀑となる。俯視、仰望、右顧左盼。殆んど送迎に違あらずして、人をして思わず馳行の、尚、緩ならんことを希わしめたり。初冬のアルプス旅行(の美)[行外追加]、決して春夏の期に譲らず、殊に、ボーツエン近傍は、極めて暖かなり。午食後、少佐シースラーを訪う。未だ家に帰らず。家婦、病に臥し、大混雑の処なりし。佐れども、珍客なればとて、下へも置かず、若干談話の後、令嬢エルザと共に、若干散歩し、家に帰りて、暫くして、少佐、帰り来たる。即、共に晚餐を喫す。

1906.11.25. 日 晴 独乙旅行の第三十四日

午前九時、カフェーに朝食をなし、次いで、若干散歩。午後、Eggenthal の瀑布を見る。谷、極めて狭く、而も、側壁高さ少なくとも八九十、懸崖絶壁、壮観、限りなし。谷中を通過するも、心地悪しきを感じる程なりし。瀑布は、格別のものにあらず。此谷の絶景なるは、日光も及ばざるべし。只、少しく小なるを憾とするのみ。本日、又、シースラー少佐の宅に食す。

1906.11.26. 月 晴 独乙旅行の第三十五日

午前九時、少佐シースラー及び令嬢エルザと共にメランに遊ぶ。メランは、避寒地にして、暖かきこと小春の如く、肺病患者の、静養に来たるもの多し。山高く、谷深く、水清く、形、箱根に似て、遥かに

箱根よりも整頓せり。ポーツェン及びメランの写真帖を買う。ポーツェンの東北方、Rosengarten 大峻峯あり。岩石削立、高さ二千米余。夕日を

ページ：136

受くれば、真紅の色を呈す。故に、此名ありと。予は、其真紅を見るを得ざりしも、^{やや}稍、赤くなるを見たり。壯観なりし。午後、又、シースラーを訪う。妻君、病氣にて、気の毒なりし。

1906.11.27. 火 半晴 独乙旅行の第三十六日

午前七時半、停車場に至れば、シースラー少佐、送り来たり。今日、妻君、中耳炎の切開をなすと云えり。正午、インスブルク着。停車場に昼食し、次いで、ホテルクライドにアンド[濁音]レアタ大尉^とを訪い、妻君に遇えり。午後三時発車。明日旧連隊長の送別の宴会ありとて、ハル大隊よりザルツブルグ[濁点]に至る数名の将校^あに遇い、午後九時、共にザルツブルクに着。ホテルレーミッシェルカイザーに至れり。恰^{あたか}も、連隊長以下数名の将校の、同ホテルに会食せるに遇い、十一時迄飲めり。予の到着、直ち^{ただ}に知れ亘り、ホテル・トラウベに会食せし将校・少将ワイリヒ以下、尋ね来たるもの、数人。連隊長は、少将は誰が来たるも、多くは歩を枉げず、連隊長の為めにも特に来たりたることなし、今日態々^{わざわざ}来たりたるは異数なり、と云えり。

1906.11.28. 水 雨 独乙旅行の第三十七日

本日は、連隊長の送別の宴ありとて、他地方にある連隊内的大隊より来集せる。将校多く、大隊長、中隊長以下、数多の知人に遇えり。余も招待せらる。宴、半ばにして、新連隊長、送別の挨拶をなし、旧連隊長、答辞を述べ、其半ばして^{その}嗚咽^{おえつ}。遂に之^{これ}を中絶せり。涙脆きには少しく驚けり。午後七時、大隊長及び中隊長のブラウナウに帰るを停車場迄見送り、次いで、トラウベに少将以下と会食す。

1906.11.29. 木 曇 雨 独乙旅行の第三十八日

午前、訪問をなし、次いで、連隊将校連隊集会所に昼食をなし、頼まれものの買物をなしたる後、引き続き、訪問をなす。本夜は、旅館ミラベルに旧連隊長送別の宴あり、衛戍地^{えいじゆ}の将校、皆集まる。

ページ：137

1906.11.30. 金 晴 独乙旅行の第三十九日

午前九時、連隊長、更に来て、暇乞^{いとまごい}をなし、午前十時、汽車に搭し、~~ザルウ~~[消去]（正午）[行外追加]、ブラウナウに着。旅館フィंकに至り、昼食の後、直ちに訪問をなす。午後、大隊長は、特に将校集会所に宴会を開く。

1906.12.01. 土 雨 独乙旅行の第四十日

本日、^{ひるしょく}午食を将校集会所に喫し、大隊長以下の見送りを受けて出発。スツルム大尉と共に、午後九時半、^{ママ}ウィン帰着。旧宿舍ラツァレットに入る。

1906.12.02. 日 晴

午前、公使館に至り、手紙、^{その}其他を受け取り、午後、山梨中佐・西書記官^とを訪う。本夜、井出・山梨・富田君と会食す。

1906.12.03. 月 半晴

午前、買物をなし、銀行に至る。旅費請求書を作る。記事なし。

1906.12.04. 火 半晴 雨

午前、公使館に至る。旅費請求書の書き直しをなし、帰らんと欲して、^{はからずも}不計、^{みやかわ}宮川・平瀬^あの両君に会い、共に昼食を喫す。本夜、西書記官に招待せらる。

1906.12.05. 水 半晴 雨

午前九時、グランドホテルに宮川・平瀬君を訪い、共にシェーンブルンに遊ぶ。~~西~~[消去]本夜、山梨氏に招待せらる。

1906.12.06. 木 半晴 雨

記事なし。本夜、宮川・平瀬両氏に招待せらる。

1906.12.07. 金 半晴 雪

ページ：138

本日、宮川・平瀬両氏、出発なれば、午前七時、ノルドウエスト停車場に至りしも、両氏、来たらず。たぶん、停車場の間違いなりしならん。本夜、井出氏、出発。ノルドウエスト停車場に見送る。

1906.12.08. 土 半晴 霧

午後、大島氏^とを訪う。不在。佐藤氏^{その}を訪う。又、不在。其他、記事なし。

1906.12.09. 日 雪 半晴

午前、大島氏来訪。共に散歩す。^{その}其他、記事なし。

1906.12.10. 月 晴 少雪

午前、斬髪・入浴。東京へ手紙を出す。午後、佐藤氏^とを訪い、共に晚餐を喫す。

1906.12.11. 火 雪

午前、射撃学校に至り、次いで、南停車場に鴨井氏を訪えば、既に転居の後なりし。次いで、服屋に至り、支払いをなす。午後、書肆しょしに至り、次いで、ライヒ氏に招待せらる。

1906.12.12. 水 雪

午前、公使館に至る。終日の降雪。その其他、記事なし。

1906.12.13. 木 曇

記事なし。

1906.12.14. 金 曇

午前、大佐レーベルを訪い、次いで、大学に学士称号授与式に至る。次いで、佐藤氏と共に昼食を喫す。午後、不計はからずもママもスラトラベック大尉に会い、共にランナーホーフに至る。

1906.12.15. 土 曇

ページ：139

射撃学校に至り、次いで、公使館に至る。午後一時、スラトラベック・~~カ~~[消去]バトルフィー・レーブハーン三大尉を招待して、午後四時、スラトラベック大尉を送りて、スタットバーン停車場に至り、後、西書記官とを訪う。銀行に至る。

1906.12.16. 日 曇 寒し

記事なし。

1906.12.17. 月 雪

本日終日、雪降る。積もること数寸。珍らしき大雪なりし。入浴す。ワイナハトの買物をなし、古本屋に至り、スチーラの地図及びマイエル字書を買う。

1906.12.18. 火 雪

終日、降雪。公使館に至り、西氏と共に昼食を喫す。本日、忠一より吉文よしふみの写真を得たり。本屋に至り、サックス及び外国字書を買う。

1906.12.19. 水 雪

公使館に至る。他に記事なし。

1906.12.20. 木 雪

記事なし。富籤とみくじを買いたるも、中あたらず。

1906.12.21. 金 曇

記事なし。

1906.12.22. 土 曇

記事なし。午後、散歩の時、ザルツブルク将校の一行に遇い、共に「ローナハ」[かぎ括弧]に至り、午後十時、家に帰れば、襟巻を忘れたることを思い出したるも、後の祭り。残念極まりなし。下宿の主婦、ワイナハトの送り物なりとて、新しき襟巻をくれたり。斬髪・入浴。

1906.12.23. 日 半晴

ページ：140

本日は、日曜なれども、ワイナハトの前なれば、店は、皆、開きたり。午後、散歩の時、通行の一娘にべどを掛けられ、大閉口。始めて、西洋人と喧嘩せり。^か ^か 呵々。

1906.12.24. 晴 月

午前、西氏を^と訪い、令嬢に送り物をなす。午後、レーベル大佐に招待せらる。送り物をなす。東京より手紙来たる。

1906.12.25. 曇 雪 火

西氏に招待せらる。本日より、下宿にて食事することとなれり。

1906.12.26. 水 曇 雪

記事なし。

1906.12.27. 木 曇

午前七時半、山口氏来着なれば、ウェストバーンホーフ迎えたるも、汽車、一時間半遅刻し、待合に^おち居る間、間違いにて、八時半少過、汽車着。行き違いとなり、^つ次いで、同氏を伴い、公使館に至る。本夜、日本人会あり。

1906.12.28. 金 曇 少雪

午前、記事なし。新年の手紙を書く。午後、クルウスキー中尉をアポロ劇場に招待す。

1906.12.29. 土 雪

午後、山口氏と共に山梨中佐に招待せらる。

1906.12.30. 日 雪

記事なし。

1906.12.31. 月 晴

ページ：141

天気、始めて晴朗。午前、入浴す。午後、山口君と共に散歩し、次いで、夜半十二時迄、下宿の主婦等と共に飲む。又々、富籤とみくじを買う。

明治四十年一月一日

1907.01.01. 火 雪

早天、一杯の葡萄酒を挙げて、遙かに東天を拝し、陛下及び家族の万歳を祝す。後、山口君と共に、公使館に至り、御真影を拝し、共に山梨中佐とを訪う。

1907.01.02. 水 曇 晴

本日は、少しく暖かく、雪、融け、泥凪はなは、甚だし。午後、山口君出発。ノルド停車場に見送る。東京に手紙を出す。

1907.01.03. 木 曇

午前、公使館に至る。他、記事なし。道路、泥凪。煙草しよしを買う。書肆とみくじに至る。富籤とみくじを買う。

1907.01.04. 金 晴

珍しき好天気なりしも、道路の泥凪、沼の如し。

1907.01.05. 土 半晴

午後、西書記官を訪う。他、記事なし。

1907.01.06. 日 晴 雪

無類の好天気なり。午後、雪、降る。大竹君来訪。

1907.01.07. 月 半晴

ページ：142

斬髪、入浴す。午後、大瀧、三宅、両君とを訪う。

1907.01.08. 半晴 火

雪融けにて、道路、泥凪、沼の如し。画端書帖はがきを買う。

1907.01.09. 曇 水

本日は、無類の上吉日なり。東京より手紙来たり。叙勲のことを知り、次いで、三宅・大瀧^つ両医学士及び片山医学博士を伴い、Rettungs Gesellschaft を見物し、次いで、公使館に至りて、官報を見る。

1907.01.10. 木 曇

記事なし。

1907.01.11. 金 曇

記事なし。葉書・書務用紙を買う。

1907.01.12. 土 晴

公使館に至り、□を貰う。

1907.01.13. 日 晴

午前六時半、吉岡氏、来着。南停車場に迎え、次いで、公使館に至る。午後、吉岡氏と共に散歩す。ホーフバウアー来訪。三宅氏来訪。速見氏、来たる。

1907.01.14. 月 雨

午前、Kunst und Industrie、^{ママ}Sesission、Bildeden Kunst を見物し、公使館に至り、午後、^{ママ}Lichtenstein 画絵陳列場は^{しめきり}べ切にて見るを得ず。市街を散歩し、夜、劇場に至る。

ページ：143

1907.01.15. 火 曇

東京に手紙及び写真帖を送る。本夜、吉岡氏と共にヨーゼフスタット劇場に至る。

1907.01.16. 水 曇 雨

記事なし。本夜、吉岡氏等と共にローナハ劇場に至る。

1907.01.17. 木 晴

午前、吉岡氏と共に帝宝宝物館に至る。午後、生物冷却処及び製氷場に至る。本夜、西氏に招待せらる。

1907.01.18. 金 晴

昨夜の呑み過ぎ、心地悪し。午前、吉岡氏と共に市場に至り、午後、製油会社に至る。

1907.01.19. 土 雨 後 晴

午前、射撃学校及び公使館に至る。本夜、始めて^{ママ}Brug劇場に至る。フウスト（Faust）[行外追加]を見る。面白くなし。

1907.01.20. 日 晴

本日、午後、鴨居博士^とを訪う（吉岡氏と共に）[丸括弧]。本夜、吉岡・速水氏と共にオペラに至り、ローヘングリン（Lohengrin）[行外追加]を見る。面白かりし。

1907.01.21. 月 晴 寒し

午前、吉岡氏と共に、^{ママ}ウイン市会及び塩売買局に至る。本夜、日本人会あり。本日、勲章、到着す。服の紐にて、大騒ぎせり。

1907.01.22. 火 晴 寒し

ページ：144

午前、公使館に至る。午後、弘田博士出発見送りの為め、スタット停車場に至る。

1907.01.23. 水 曇 大いに寒し

一兩日以来、寒気劇変。列氏零下二十度^{くだ}に降る。公使館に至る。本夜、射撃学校職員一同と共に山梨中佐に招待せらる。午前四時まで継続せり。

1907.01.24. 木 曇

寒気少しく^{ゆる}弛む。昨日の^{つか}勞れにて、終日眠れり。午後、吉岡氏と共に散歩す。勲章の^{じゅ}綬張り付けを注文す。

1907.01.25. 金 曇

寒気、昨日に比して、^{なお}尚、^{ゆる}弛めり。午前、吉岡氏と共に銀行及び公使館に至る。午後、斬髪。本夜、山梨中佐と共にライヒ將軍に招待せらる。

1907.01.26. 土 曇

午前、山梨中佐^とを訪い、煙草を貰う。山梨中佐に紀念として、真珠の襟飾りを送る。本夜、山梨中佐・吉岡氏と共に西氏に招待せらる。

1907.01.27. 日 曇

午前、吉岡氏、「クラカウ」に出立の見送りをなし、北停車場に至る。午後二時、山梨中佐に旅館クラントツに招待せらる。午後九時四十分、山梨中佐出発。赴任の見送りをなし、北西停車場に至る。

1907.01.28. 月 晴

入浴す。他、記事なし。

1907.01.29. 火 晴

ページ：145

やや
稍、暖かし。街上の冰雪、融けて、沼の如し。早天、吉岡氏、クラカウより帰り来たる。共々、勲章屋
に至り、配列の順序を誤りたるを以て、^{もつ}之^{これ}を直さしむ。^つ次いで、公使館に至る。午後、吉岡氏と共に鴨
居博士^とを訪い、次いで、吉岡氏をハルトマン料理屋に招待す。東京に手紙を出す。

1907.01.30. 水 曇

街上、^{なお}尚、泥濘。午前十時、吉岡氏出発。西停車場に見送る。次いで、勲章屋に至れば、既に出来居
り。^{その}更に其箱を注文す。归来、更に服の勲章つりを直す。午後、山内氏来訪。本夜、レーベル大佐に招
待せらる。

1907.01.31. 木 晴

午前、正装にて写真屋ピッツナーに至り、撮影す。午後、勲章屋に至り、箱を注文す。

1907.02.01. 金 晴

午後、山内氏^とを訪う。在らず。他、記事なし。

1907.02.02. 土 雪

午前、射撃学校副官バトルフヒー来訪。^{すいくち}吸口を貰う。午後、山内氏来訪せり、と云う。^よ余は、不在なり
し。

1907.02.03. 日 曇 少雪

午前、教師^とを訪う。不在。記事なし。

1907.02.04. 月 曇 少雪

午前、公使館^とを訪い、西書記官と共に、明日謁見の内親王アンヌイチアタを訪問す。勲章箱、出来上がる。
価、十七クローネなりし。入浴す。

ページ：146

1907.02.05. 火 晴

無類の好天気。小春^{ただ}の如し。但し、街上の雪融けて沼の如し。午前、銀行に至り、^つ次いで、煙草を買
う。午後六時、正装にて西代理公使^とを訪い、共に宮城^{けだ}に至る。蓋し、本日は、宮中舞踏~~せし~~であり[にし

てをありに修正]、此様に際して、皇帝に謁見を許されたるを以てなり。午後八時、皇帝、皇后代理内親王アンヌイチアタを伴うて、外交官集会処に出御(Marmorsaul)[丸括弧]。(皇帝及び皇后代理の、よく勤めらるるには相服せり。)[行外に赤字で追加]皇帝は、男子側、上席大使より、皇后代理は、女子上席より、逐次、一人ずつ、謁を賜ひ、若干の前談話あり。約一時間の後、謁、終わり、次いで、一同、皇帝に扈從して、舞踏席に至る。此席には、当国の貴族・将校等、既に雲集しあり。殊に、将校の数、多きこと、其九分を占む。舞踏、直ちに始まり、女子は皆、貴族の令嬢・若夫人等にして、男子は、撰抜の将校なり。(婦人の服装は、今日を晴と、金剛石真珠等を鏤め眼の隅めく斗り美麗なりし。)[行外に赤字で追加](室の温度は正装婦人に適当なる如く温めれば、余等には暑くして困れり。)[行外に赤字で追加]舞踏の最中、西書記官と共に、Buffet に至り、茶・麦酒を飲む。此席にて、ポーランド出身代議士騎兵大尉某に遭い、某は、1866 年にケーニッヒグレッツ・スカーリッツ・ナホート等にて、普兵を襲撃したりとて、顔面の癍痕を自慢し、且つ、魯の代理公使の面前なるをも構わず、日本が魯を撃破したるは愉快なりとて高声に日露戦の談をなし、大いに困らせたり。十一時半、舞踏終わり、家に帰る。

1907.02.06. 水 晴

午前、酒を注文し、次いで、公使館に至り、西代理公使に、昨日の礼を述ぶ。他、記事なし。

1907.02.07. 木 曇

午前、服屋に至る。午後、ラウアー大尉を訪い(参謀少佐試験の為に召集中)[丸括弧]、共に散歩し、途中、ケーニッヒの一族に遇う。次いで、ガブリエルに至り、共に麦酒を飲む。写真の見本出来上がり、更に注文す。服屋に至[消去]

1907.02.08. 金 曇

午前、服屋に至る。午後、ラウアー大尉を訪い、次いで、料理屋ハルトマンに招待す。

ページ：147

1907.02.09. 土 曇

午前、服屋に至り、次いで、公使館に至る。午後、射撃学校の職員と Gabriel に会食し、次いで、Rathhauskeller に至り、午前五時、家に帰る。東京に写真を送る。

1907.02.10. 日 曇

終日、臥蓐す。

1907.02.11. 月 曇 [紀元節]

斬髪、入浴す。東京より手紙来たる。

1907.02.12. 火 晴

午前、公使館に至る。午後、散歩を止めて、日露戦史の図の裏打ちをなす。

1907.02.13. 水 晴

日露戦図の裏打をなす。本夜、西書記官を訪う。帰途、氷にて滑る。

1907.02.14. 木 曇 雪

午前、三宅^{こういち}鉦一君・柳瀬君来訪。午後、散歩の際、滑れり。

1907.02.15. 金 晴

東京に手紙出す。軍服の襟章、直り来たる。

1907.02.16. 土 霧

午前、三宅・柳瀬両氏を訪う。午後、注文の写真、半出来上がる。

1907.02.17. 日 半晴

ページ：148

午前、諸方へ送る写真の準備をなし、午後、日露戦図の裏打をなす。夕刻、柳瀬氏^とを訪う。不在なりし。

1907.02.18. 月 晴

暖かくして、小春の如し。入浴す。午後、ホーフバウアー来訪。共に、佐藤君^とを訪い、次いで、レーウエンブルイに晚餐を喫す。

1907.02.19. 火 晴

本日も、亦、小春^{また}の如し。東京より手紙来たる。午前、公使館に至り、又、書肆^{しょし}に至る。午後、西書記官を訪う。

1907.02.20. 水 晴

午後、佐藤氏来訪。共に Griechen Beisl 至り、次いで、下宿に共に晚餐を喫す。

1907.02.21. 木 晴

記事なし。

1907.02.22. 金 晴

記事なし。書物を買う。

1907.02.23. 土 晴

記事なし。図の裏打をなす。

1907.02.24. 日 半晴

三宅氏、出発。西停車場に見送る。公使館に至る。

1907.02.25. 月 半晴

午前、斬髪・入浴す。佐藤君来訪。共に寄席ローナハに至る。

1907.02.26. 火 晴

ページ：149

暖かきこと、小春の如し。他、記事なし。午後、少佐ラバッチ来訪。

1907.02.27. 水 晴

早天、独乙^{ドイツ}旅行の請求費、到着す。銀行・書肆^{しょし}及び公使館に至る。東京に手紙を出す。

1907.02.28. 木 晴 午後 少雪

記事なし。

1907.03.01. 金 雪 雨

記事なし。

1907.03.02. 土 曇

本夜、河合中佐、到着。停車場に出迎う。

1907.03.03. 日 晴 後 雪

午前、河合中佐と共に、市街を散歩し、午後、博物館に至れば、既に閉館後にて、更に公使館に至る。

本夜、河合中佐と共に寄席アポロに至る。中佐、山梨中佐よりの服の釦^{ボタン}を持ち来たる。

1907.03.04. 月 曇

午前、河合中佐と共に散歩。料理屋ハルトマンに中佐を招待し、更に服屋に至る。本夜、西書記官に招待せらる。

1907.03.05. 火 晴

無類に好天気なり。午前、河合中佐、出発。Staatsbahnhof に見送る。入浴す。他、記事なし。

1907.03.06. 水 晴

ページ : 150

午前、服屋及び公使館に至る。

1907.03.07. 木 晴

記事なし。

1907.03.08. 金 晴

午前、竹内少佐、来着。北停車場に出迎え、次いで、博物館及び公使館に至る。本夜、西書記官に招待せらる。

1907.03.09. 土 晴

午前、帝室宝物見物に行き、次いで、見物をなす。本夜、竹内少佐と共に料理屋に至る。

1907.03.10. 日 晴

風邪の気味あり、頭、重し。午前、公使館に至る。本夜、竹内少佐、^{ベルリン}伯林出発。北西停車場に見送る。

1907.03.11. 月 雪

午前、散歩。酒を注文し、午後、公使館に至る。

1907.03.12. 火 雪 後 晴

午前、七時半、福田中佐、来着。北西停車場に迎え、共に旅館クラッツに至り、次いで、公使館に至る。本夜、西氏に招待せらる。斬髪す。留守宅より、附托の時雨蛤味付け海苔を受け取る。

1907.03.13. 水 雪

午後、大村大尉を旅館クラッツに^と訪い、案内をなす。他、記事なし。

1907.03.14. 木 雪 晴

午前、旅館クラッツに大村大尉^とを訪う。不在。次いで、公使館に至り、後、福田中佐・大村大尉と共に昼食し、次いで、福田

ページ : 151

中佐・大村大尉転宿の世話をなす。本夜、共に夕食を喫す。

1907.03.15. 金 晴

本日、午後、福田・大村両氏を訪い、次いで、大村大尉と共に下宿搜索をなす。本夜、共に日本料理を食す。

1907.03.16. 土 晴

午前、大村大尉を訪い、下宿搜索をなし、午後、佐藤氏を訪う。

1907.03.17. 日 晴

無類の好天気。東京に手紙を出す。ライヒ將軍を訪問す。不在。次いで、福田・大村両氏を訪う。福田中佐、午後來訪。

1907.03.18. 月 晴

入浴す。午後、カフェーにライヒ將軍を訪問す。本夜、佐藤君来訪。

1907.03.19. 火 雨 後 晴

公使館に至り、次いで、福田・大村両君を訪う。午後、福田中佐と共にカフェーにライヒ將軍を訪問す。

1907.03.20. 晴 水

午前、公使館に至り、次いで、福田・大村両君を訪う。書肆に至る。午後、銀細工屋に至る。

1907.03.21. 晴 雪 木

東京より手紙来たる。銀行・服屋及び公使館に至る。午後、銀細工屋に至り、少佐ラバッチ・大尉バトルフィーへの送物を買ひ、次いで、福田・大村両君を訪う。

1907.03.22. 金 晴

ページ：152

午前、シャボンを買う。

1907.03.23. 土 晴 風強し 少雪

午前、宮原氏と共に公使館に至る。午後、宮原氏と共に玉突をなす。

1907.03.24. 日 雪

午前、バトルフィー大尉来訪。本夜、日本人会あり。玉突をなす。

1907.03.25. 月 晴

斬髪・入浴す。午後、福田中佐の助の手をなす。

1907.03.26. 火 半晴

午後、宮原氏と玉突をなす。

1907.03.27. 水 晴

午後、少佐ラバッチより絵画帖を送らる。午後、宮原氏及びホーフバウアー一家と共にレーウェンブローイに晚餐を喫す。

1907.03.28. 木 半晴

無類の晴天となる。午前、佐野氏を訪う。本日、始めて富籤^{とみくじ}に当たり、四クロネを得たり。

1907.03.29. 金 晴

午後、宮原氏と玉突をなす。

1907.03.30. 土 晴

午前、公使館に至り、次いで、福田中佐を訪う。翻訳物の注文を受く。葉書を買う。

1907.03.31. 日 晴

無類の晴天。午前、福田中佐を訪う。本夜、佐藤君来訪。オステル日曜の晴天にて、人出、夥^{おびただ}し。

ページ：153

1907.04.01. 月 晴

入浴す。午後、佐藤君来訪。共にシェーンブルンに遊ぶ。尚^{なお}、早し。

1907.04.02. 火 晴

記事なし。東京に手紙を出す。

1907.04.03. 水 晴

午前、公使館に至り、福田中佐の手助けをなす。本日、二月二十二日附にて、引き続き奥国駐在に関する訓令を受く。本夜、シースラー少佐と共にローナハに至る。松井^{ママ}松葉・市川左団次を訪う。

1907.04.04. 木 曇 雨

午前、射撃学校に至り、次いで、スラトラベック大尉を訪う。服屋に至り、軍服の注文をなす。松井、市川左団次を訪う。

1907.04.05. 金 曇 雨

午前、書肆^{しょし}に至る。郵便重量機を買う。午後、松井、市川^{ママ}両氏を訪う。

1907.04.06. 土 雨

午前、福田中佐を訪う。午後、佐藤氏来訪。

1907.04.07. 日 半晴

午後、佐藤君・宮原・ホーフハウアーと劇場オパーの内場を見る。広大のものなり。福田中佐、松井・市川^{ママ}両氏を訪う。本夜、日本食あり。

1907.04.08. 月 雨

斬髪・入浴す。

ページ：154

1907.04.09. 火 半晴

午前、服屋に至る。午後、宮原氏と玉突をなす。

1907.04.10. 水 雨

午前、レーベル大佐を訪う。午後、同大佐に招待せらる。

1907.04.11. 木 曇

午前、公使館に至り、次^ついで、福田中佐を訪う。宮原氏と玉突をなす。

1907.04.12. 晴 金

午後、佐藤君を訪う。

1907.04.13. 曇 土

午前、服屋に至る。午後、佐藤氏来訪。本夜、福田中佐に招待せらる。

1907.04.14. 半晴 日 後 雨

午後、福田中佐^とを訪い、次いで、西書記官に招待せらる。

1907.04.15. 月 雨

入浴す。福田中佐来訪。東京に手紙を出す。午後、福田中佐^とを訪う。本日、隊附のことに内決す。

1907.04.16. 火 半晴

午前、書肆^{しょし}、服屋に至る。長靴を注文す。本夜、レーベル大佐に招待せらる。

1907.04.17. 水 雨

記事なし。本夜、宮原・岡本氏等と会食す。

ページ：155

1907.04.18. 木 曇

午後、福田中佐を訪い、其^{その}仕事を助く。服屋に至る。

1907.04.19. 金 晴

記事なし。東京より手紙来たる。

1907.04.20. 土 晴

午後、佐藤氏^とを訪う、宮原氏と玉突をなす。

1907.04.21. 日 晴

午前、大村君来訪。午後、佐藤、宮原両君と「ノイワルデック」[かぎ括弧]附近郊外散歩^{おもむ}に赴く。

1907.04.22. 月 晴

斬髪・入浴す。午後、大村大尉^とを訪い、共に北西停車場に小池中佐を迎う。本夜、大村君の宅に宿す。

1907.04.23. 火 雨

福田中佐・小池中佐と共に乗馬を見る。公使館に至る。小池中佐と玉突をなす。

1907.04.24. 水 曇 雨

領事フィッシャー氏を訪い、次^ついで、公使館に至る。小池中佐来訪す。

1907.04.25. 木 曇

福田中佐・小池中佐と共に、陸軍省及び乗馬学校に至り、次いで、馬具屋に至る。本夜、劇場アポロに至る。

1907.04.26. 金 半晴

ページ：156

早天、福田中佐・小池中佐、及び、土・独・ブルガリヤ公使館附武官と共に、乗馬及び^{ぎょ}田[消去]馭法学
校を見る。寒し。つまらぬ者なり。乗馬を将校(^{ほうし}砲輜兵科)[丸括弧]に教ゆるは可なるも、将校を兵卒とし
て三^{さんべん}駢砲車等の馭法を教ゆること、^{いかが}如何や。大なる必要ありや。山内氏来訪。

1907.04.27. 半晴 土

本夜、日本人会あり。玉突をなす。

1907.04.28. 日 雨

午前、タッタザールに乗馬を見る。正午、領事フィッシャーに招待せらる。次いで、福田・小池・大村
三諸君と共に、軍犬・警察犬等の展覧会を見る。

1907.04.29. 月 雨

午前、銀行に至る。小池中佐来訪。玉突をなす。午後、カフェーにライヒ^と將軍を訪う。將軍、病気な
りと[聞く]。

1907.04.30. 火 晴

入浴す。午後、ドロテュム及び靴屋に至る。東京に手紙を出す。

1907.05.01. 水 曇 雨

午前、福田中佐を訪う。本夜、西書記官に招待せらる。本日、軍事課より兵籍訂正の通知あり。一、百
十四番地は三千百六番地、二、父、要蔵隠居に付き戸主、三、明治三年五月二十一日は二十日、四、結
婚、明治二十六年八月十二日は同月二十四日、五、吉武誕生二月十日は二月十一日、六、長女静は志
つ、七、母タキはたき、の個条を訂正すべきを申し来たる。

1907.05.02. 木 晴

小池中佐、^{ばひつ}転宿し来たる。馬匹購買、決定す。大村君来訪。

ページ：157

1907.05.03. 金 [天候記入なし]

午前、小池中佐と共に乗馬に至る。福田中佐、^{また}亦、あり。靴、出来上がりしも、工合悪し。直しに返
す。

1907.05.04. 土 [天候記入なし]

午前、小池中佐と共に乗馬に至る。馬、少し熱あり、乗らず。靴、^{なお}尚、工合悪し。直しに^{かえ}帰す。(小池
中佐と共に)[行外追加]服屋・勲章屋に至る。

1907.05.05. 日 晴

無類に好天気。午前、宮原氏と共に佐藤君を訪^とい、共にカーレンベルグ[濁点]・レオポルトベルグ及びクロースターノイブルグ[濁点]に遊ぶ。

1907.05.06. 月 晴

午前、乗馬。次^ついで、公使館に至る。

1907.05.07. 火 晴

午前、乗馬。斬髪・入浴す。

1907.05.08. 水 晴

記事なし。

1907.05.09. 木 晴

午前、乗馬。午後、大村君来訪。共にハルトマンに至る。小池中佐と玉突をなす。

1907.05.10. 金 晴

午後、小池中佐と共に、銀行・書肆^{しょし}・服屋に至る。靴を買う。西書記官を訪う。

1907.05.11. 土 晴

午前、乗馬。本夜、福田中佐に招待せらる。

1907.05.12. 日 晴

ページ：158

午後、シェーンブルンに至る。

1907.05.13. 月 晴

午前、服屋に至る。馬具屋に至る。佐藤君来訪。 午前、乗馬。

1907.05.14. 火 晴

服屋に至る。他、記事なし。

1907.05.15. 水 晴

午前、乗馬。東京よりの手紙来たる。コニャック器を買う。佐藤君来訪。

1907.05.16. 木 半晴

服屋に至る。本夜、福田中佐に招待せらる。公使館に至る。本日、隊附許可の通知あり。

1907.05.17. 金 晴

午前、乗馬。福田中佐来訪。午後、福田中佐を訪^とう。上靴を買う。教育総督部より、操典類、到着す。

1907.05.18. 土 晴

午前、小池中佐と共にメルデンに近回りす。荷物片付けをなす。

1907.05.19. 日 晴

荷物片付けをなす。午後、西書記官を訪う。

1907.05.20. 月 晴

荷物片付けをなし、午後、佐藤君を訪う。

1907.05.21. 火 晴

午前、福田中佐を訪^とい、馬具屋に至る。午後、西書記官を訪う。ライヒ將軍を訪う。不在。

ページ：159

1907.05.22. 水 晴

斬髪・入浴す。馬具、出来上がる。

1907.05.23. 木 晴

はいえつ
拝謁・夕食後、玉突をなす。公使館に至る。

1907.05.24. 金 晴

午後、乗馬。本夜、福田中佐に招待せらる。

1907.05.25. 土 晴 後 雨

荷物片付け、略^{ほぼ}、終わる。午後、西書記官・福田中佐等を訪問す。

1907.05.26. 日 晴

東京に手紙を[傍線]出す。本日、午前九時十分、発車。十時四十五分、ツナイム着。直ちにホテル・ロ^{ただ}
ルベルに入る。午後、連隊副官来訪。料理屋にて共に夕食。不^{はからずもママ}計も、連隊長以下、数多の将校に会
す。

1907.05.27. 月 半晴 雨

午前、連隊長・旅団長に隊附報告をなし、後、(連隊長に伴われて)[行外追加]市長庁舎に至る。午後、
ひとり、ターヤー河谷を散歩す。

1907.05.28. 火 晴

午前七時半より旅団長の検閲あり。連隊は練兵場に整列し、旅団長、先ず、閱兵し、後、分列を行わし
む。次いで、各兵の志願を聞く。一年一回なりと云う。各兵は、其家族の状況等を訴え、帰休を乞う
等、幾多の事項を直接に旅団長に請求するなり。一方案？[疑問符]。次いで、旅団長は、舎内の検査を
行い、又、器械体操・銃剣術(古流にして備なし。一)[丸括弧]・柔軟体操等を見る。旅団

ページ：160

長は、ひとり、何もかも命令し、視察し、着々、歩を進む。機敏、演ずるに勝えたり。午後、検査を続け
しも、余は見ず。

1907.05.29. 水 晴

ペッフワー中佐と共にセクセルベルク射場に至る。其結構、ブルックのものと大差なし。別に記すべき
ものなし。正午、会食。始めて演説をなす。

1907.05.30. 木 晴

本日は、祭日なり。正装にて連隊の儀式に列す。

1907.05.31. 金 晴

本日は、旅団長の統裁する幹部演習あり、同行す。兵棋を現地に行うが如く[しをくに修正]、尚、足
らず、決心等を聞くのみ。実際★の[？をのに修正]地所形[所を形に修正]等に就いて実際の事を行わず。
遺憾の点、多し。

1907.05.06[5 から 6 に修正].01. 土 晴 驟雨

午前、ペッフワー中佐と共に野外演習に 赴く。中佐の部下を教育する、実際的にして、細大漏らさざる
悉心なり。併し、兵卒の面前にて将校及び中隊長等の動作を着々直し、毫も顧みざるは、如何のもの
や。或いは兵卒に対する将校の価値を損ぜざるやの感ありたり。本夜、二三の将校副官及び下士的
の、世話せし人を招待す。

1907.06.02. 日 晴

午前、多数の訪問を受く。馬匹、至急、到着す。東京より手紙来たる。

1907.06.03. 晴 月

午前、戦時中隊の演習あり。勤務の将校、ぶら～～し居り。甚だ見苦し。若し使い道なければ、
かくのごとく
如 此 して遊ばせて見学せしむる

ページ：161

よりも、某大尉に命じて、現地講話にでもさせた方、得策なり。午後、現地講話の筈なりしも、勤務上の都合にて取り止めとなる。支那少尉、着隊す。

1907.06.04. 火 晴 [図あり；紺色の曲線と茶色の短い線と半楕円線]

午前、連隊長と共に各戦闘射撃場を見る。射撃場は、「ターヤー」[かぎ括弧]河谷、「ズ[濁点]ナイム」[かぎ括弧]を距てる約一里の上流にあり。河川の屈曲点を利用し、高地上より谷地に向けて射撃す。射距離、約八百歩。射方向は、一方面に限り、距離も既知なりと雖も、射場の欠乏開拓及び損なる奥国に於ては、地形の利用適切なりと云わざるべからず。曾て呈出したる報告中、距離測定に関する余の議論に伴い、各戦闘射撃は、野外に於て地形を利用してする教練射撃若しくは散兵射撃にして、距離既知なるを常勢なりとすれば、此方法は、又、適当なりと云わざるべからず。唯一兵、射撃し、一兵、目標及び距離を告知し、弾着を監視するは、如何のものにや。考えものなり。且つ、射手の近傍には見物の下士・兵卒群集し、喧囂を極め、射手の相静を害す。軍紀上、如何の感を起こさしめたり。教練射撃に於ても、亦、此感ありたり。[改行]

毎日の散歩に、将校、下士・見習士官見習士官にして、既に小児を有するものあり、・兵卒の婦人と同行し、恬として耻じざる。又、之を看過する奥軍は、病、既に、膏盲に入れり。此状況は、維納よりも、尚、甚だし。

1907.06.05. 水 晴

旅団長の統裁せる幹部演習あり。午前七時十五分集合。二里斗り出張。午前十一時半、帰着す。今回は、前回のよりは、稍可なりしも、不相変、現地に就いて多く作業せしめず。図上のもの多く、余り悉心せず。要するに、昼食の都合あり、正午には帰らざるべからざるが故に、かくのごとき足の演習となるならん。午前四時頃、出発せば、或いは出来得るやとも思わる。要するに、幹部演習としては、余り充分ならざりし。

1907.06.0506[5を6に修正] 木 晴

ページ：162

午前、各戦闘射撃あり。射撃場、前の如くゴタ～～[濁点]。前に同じ。午後、フランツ・ザルバートル殿下、小池中佐等と共に来着。幹部演習なり。午後、小池中佐を訪い、夜、幹部演習の諸官と会食す。

1907.06.07. 金 晴

午前七時、出発。ブリュンに向かい、十時半、同地着。直ちに師団司令部に至り、十一時少過ぎ、師団長にメルデンす。極めて親切にて、来たる月曜日より施行する幹部演習に出張すべきことを命ぜられ、
尚、見物し行けとて、師団副官、手配命じ呉れたり。即、馬車に同乗。市街及び公園を散歩し、独乙
ハウスに昼食を喫し、新兵營を見、スピールベルクに古城を見る。穴倉、罪人窟等、面白きものあり
し。午後四時十二分発車。七時半着。

1907.06.08. 土 晴

本日も亦、各個戦闘射撃ありしも、辞して行かず、仕事をなす。午後、ペッフワー中佐を訪う。旅費請求書を出す。

1907.06.09. 日 晴

午前、連隊長を始め、連隊将校の来訪、引きも切らず。旅団長を訪い、幹部演習出張のメルデンをなし、家に帰れば、西大将、明日来着に付き、直ちに出头す軍命令あり。草黄、連隊長を訪い、其許可を得。直ちに荷物の結束に着手す。午後七時、出発。十時半、維納着。直ちにラツアレットに入る。

1907.06.10. 月 晴

午前、福田中佐を訪う。森岡中佐、吉岡大尉、亦、在り。次いで、公使館を訪うて、家に帰れば、小池中佐、尚、在り。午後五時二十五分、西大将を西停車場に迎え、ホテルインペリアルに至る。本夜、西書記官に招待せらる。

ページ：163

1907.06.11. 火 晴

午前、西大将を訪い、次いで、福田中佐の宅に、森岡を訪う。午後、森岡と玉突をなす。午後四時、更に西大将を訪い、西書記官・松石大佐・福田中佐・宇高大尉と、プラーターに至り、ザッハ料理店に夕食を喫し、次いでビネーデヒに至る。

1907.06.12. 水 晴

午前七時、西大将を訪い、共に馬車を駆けて、歩兵士官学校に至る。学校の設備、能く完成せり。感心せしは、靴磨き機及び照準鑑査機なり。[改行]

午後一時半、ホテルに共に午食し、午後六時、久し振りにて漸く入浴す。本夜、シーウィチ夫人に招待せらる。

1907.06.14. [四から三に修正] 木 晴

午前六時三十分発車。フィッシュアウに Unterealschule を見物す。建校以来百九十年にて諸般の設備、
能く整頓せり。福田中佐を訪う。不在。

1907.06.14. 金 晴

午前、西大将を訪い^と。本日は^{本日は拝}。午後、シーウィッチ夫人に会す。西大将と共に、フォルクスガルテンに夕食
し、次いで、シーウィッチ一家と共にラートハウスケラーに至る。旅費来たる。

1907.06.15. 土 晴

本日は、Technischakademie(建設来五十八年)に至る。諸設備の整頓せる、^{おどろくべし}可^と驚。シーウィッチを訪
う。森岡・小池・石坂氏等と玉突をなす。

ページ：164

1907.06.16. 日 晴 少雨

午前、西大将を訪い、正午、福田中佐に招待せらる。

1907.06.17. 月 晴

トライスシルヘンに砲兵士官学校を訪う。諸設備、能く整頓し、建校以来三年二百三十人の生徒に対
し、二百人の兵卒を使用す。^{乗馬百頭}比頓製遊泳の場あり、生徒の休憩所に玉突場あり、贅沢なりと云うべ
し。

1907.06.18. 火 晴

プラーターにボスニッシュ・ヘルツエゴビニッシュ歩兵連隊、歩兵第八十四連隊の一独立大隊狩兵大隊、
の皇帝検閲を見る。最初、単簡なる大散開、次いで、対抗演習を行う。分列的演習なり。分列式は可な
りし。入浴斬髪す。本夜、シービッチに招待せらる。

1907.06.19. 水 晴

午前、テレジャニッシュ・アカデミー参観。校舎の壮大・美麗なる、其比を見ず。午前、室内作業教
坊、泳場^{宏大}なり、^{その}其他、器械体操・剣術等を参観し、午後、野外演習を見る。又、剣術体操学校を見る。

1907.06.20. 木 晴

午前、乗馬教官学校を見る。生徒・学生の乗馬教練を示せるのみ。午後、御陪食あり。

1907.06.21. 金 晴 夕刻 驟雨^{にわか}

午前七時五十分発、ワイスシルヘンに至り、Oberrealschule を見る。校長は大佐にして、室の壮麗、諸
般の整

頃、テレジア大学には及ばざるも、学校としての壮大、羨むべし。学科・器械体操等の諸^{うらや}々[消去]参観・教室・洗室(炊事場)[行外追加]等、略、前者に同じ。第三年生には、玉突遊びを許せり。本夜、学校に宿泊す。[改行]
 学生の総数、(約)[行外追加]四百十七^{ほぼ}二十[17を20に修正]人。

1907.06.22. 土 晴 後 曇

午前六時半より、騎兵士官学校を見る。馬場・教坊等を見、次いで、生徒の乗馬^つ教練を見る。二年生より乗馬を教ゆ。後、二小隊対一小隊の對抗演習あり。次いで、乗馬剣術を見る。校長は少佐、生徒百三十人、馬匹百十頭余、兵卒約百(七十)[行外追加]人を使用す。午後一時半、出発。四時、帰着。直ちに福田中佐^{ただ}を訪う。

六丹 [日付、前行に近すぎたので消去]

1907.06.23. 日 晴

午前、忠良より父上病気の手紙来たる。直ちに手紙を出す。福田中佐を訪う。本日、正午、西大將より招待せらる。各国公使館附武官、亦、来たる。午後四五^{また}[四から五に修正]時半、出発。ブルックアンデルライターに至り、旅館に入る。

1907.06.24. 月 曇 時々雨来たる

午前、戦時人員、歩兵三大隊・騎兵一小隊・砲兵三中隊・機関銃二隊、対、歩兵一大隊半・騎兵一小隊・砲兵一中隊・機関銃一隊の對抗演習を見る。別に記すべきことなし。又、気球の瓦斯^{ガス}充滿を見る。
 本日は、風速強く^{十五米以上は昇騰せしめずと云う}、昇騰^{しょうとう}せしめず。只、瓦斯を満たせしのみ。瓦斯車は四両あり、約二十分にて充滿す。長円形の繫留気球なりし。次いで、騎兵三中隊の密集運動及び野營^{しょうしや}廠舎を見る。午後、射撃学校の施行の歩兵二中隊・騎兵一小隊・機関銃部隊一隊の戦闘射撃、機関銃部隊の運動^{山地用駐載式・普通駐載式及び繫留式の}
^{三種類}、倭字射撃、標的の構造、射撃場、及び野外体操を見る。

明治 40 年

1907.06.25. 火 晴

午前八時五十分、出発。ハインブルクに至り、工兵士官学校を見る。先ず、工兵生徒の架橋^ま_{二(三)(四)[行外追加]年生生徒の架橋にして、幹部は}
^{四年生}なり。一年生徒の漕艇を見、次いで、校舎を参観す。参観の個所は、参謀学校と同一にして、設備は能く整頓せり。生徒の数、百三十人、兵卒、約百人、馬匹二十五頭^{四年生にのみ乗馬せしむ}を有す。午後一時半、学校出発。

四年生は乗馬にて半途まで見送れり。三時五十分、プレスブルク出発。^{ウィーン}維納^{やや}帰着。父上、稍、快気の報あり。

1907.06.26. 水 雨 後 晴

午前六時四十五分、南停車場に内田大使を迎う。正午、ホテルインペリヤルに西大將^とを訪い、次いで、午後四時、アデレに写真を撮る。本日、ベテカー旅行案内^{巴里}を買ひ、^{ベルリン}巴里・柏林行切符を注文す。本夜、西大將の盛宴あり。西大將より、紀念品を貰う。

1907.06.27. 木 晴

荷物の片付けをなす。正午前、西大將を訪い、共に皇儲^{こうちょ}に暇^{いとま}乞^ごの訪問をなす。次いで、内田大使に招待せらる。本夜、西大將出発。北西停車場に見送り、次いで、福田・石坂^{いししか}両中佐とウィネーデヒに劇場を見る。

1907.06.28. 金 晴

午前十時、西停車場発。大人二人小児五人と同車し、ザルツブルグ^{けんごう}[濁点]迄、喧囂極まりなし。

1907.06.29. 土 晴 午後雨

正午少過、巴里に着すれば、到着時間の間違いにて、津野田少佐、停車場に在らず。^{ただ}直ちにホテルテルミヌスに至り、次いで、大使館を訪い、小田書記官と共に更に津野田少佐・中島中佐・^{やまのうち}山内大尉を訪う。本夜、以上両君と会食し、更に寄席に至る。綺羅花の如し。

ページ：167

1907.06.30. 日 曇 雨

正午、津野田少佐、尋ね来たる。共に、東停車場よりシャロン^へを^へ聖てムールメロン野営地に至り、某旅館に宿す。離れ屋にて、給仕も居らず、閉口せり。寒し。

1907.07.01. 月 曇 雨

午前八時半より、射撃学校を見る。校長は中佐にして、教官は、少佐三人・大尉十人あり。二月より四月に至る間、大尉学生二十人を召集し、^{これ}之に主として技術上の教育を与え、^{その}其最良の両三人は、更に二ヶ月残留せしめて、射撃学校の教官となす。又、一年三回、歩・騎・砲兵の少佐四十人乃至六十人を召集し、^{これ}之に歩兵銃・機関銃等の諸成績^{せいせき}を説明し、^{もつ}以て^{その}仏国軍用銃の決して他に劣らざるを示す。要するに、^{この}此学校は、技術審査部の試験実施所と云うを適當とし、小銃製造所も附属し居り、毎年、理想の小銃一挺ずつを作りて、^{これ}之を試^{ししょう}嘗^{その}し、遂に其良好なるものを取ると云えり。故に、講堂も一に過ぎず、校

舍も亦狭きものにて、教官は 悉くことごと機械学に通じたるもの、即すなわち、技師的のものなり、と云うを得べし。日本の戸山学校に類する学校は、尚他に二つありと云えり。此校にては、中尉を召集し、射撃教官たるに適するの教育を与うと云う。[改行]

午後、雨中、砲兵射撃を見、次いで、午後四時発車。巴里に帰り、北停車場前に宿泊す。

1907.07.02. 火 晴

午前、津野田・大使館及び町田中佐に 暇乞いとまごいをなし、町田中佐に午餐を供せらる。午後、七時半発車。

1907.07.03. 水 晴

午後七時、柏林着。直ちにホテルパラストに宿す。

1907.07.04. 木 晴

ページ：168

午前八時出発。西大将・松石大佐・宇高大尉・中川少佐と共にスパンダウ射撃学校に至る。学校には、射撃場二十一あり、各程の距離内に於て射撃し得る如くならしむ。校長は少佐にして、普通、軍隊一中隊より全国より其兵員を召集す。学生そのの教育は、略、奥国射撃学校に於けるものに均しく、普通、学生そのの教習期は、三ヶ月五週間[三ヶ月を五週間に修正]なるも、其他、将官若しくは大隊長等を召集して教育するものは、略、十日に過ぎず。主として、戦闘射撃、射撃の指揮、及び射撃教官たるに要する諸般の教育をなす。兵役は、二年故、これに召集せらるる兵員は、皆、二年兵にして、二月上旬に(学校に)[行外追加]来たるものと、前年十月、学校に来たるものとあり。一ヵ年間、学校にある後は、多くは、郷里に帰還し、残留して、下士となり、軍隊の射撃教官助手たるものは、僅かに其一部に過ぎずと云う。射撃場は、奥国おうこくのもの、其設備、完備せり。独国の如く、やや地積を要すること、莫大なり。射撃学校の傍に、技術審査部の委員室あり。常に斬新の歩兵銃に関する諸般の研究及び試験をなす。[改行]

正午、帰館。次いで、山梨中佐を訪う。不在。更に中川及び船越書記官を訪う。

1907.07.05. 金 晴

午前、山梨中佐・大使を訪い、首藤君に偶然、邂逅ぐうこうして、共に午餐を喫し、午後六時半、出発。

1907.07.06. 土 晴 後 雨

午前七時半、維納着。直ちに公使館に至り、更に福田中佐を訪う。本夜、内田大使に招待せらる。本夜花合わせに徴招す。

1907.07.07. 日 晴

午後、帰宅。直ちに荷物の結束をなす。七時半、発車。十時半、ツナイムに到着せしも、時刻、既に遅くして、馬車なく、僅かにホテル車を借りて自宅に帰れり。家婦は、予の空腹の為に、態々起床して、オムレツを作り呉れたり。

1907.07.08. 月 晴

午前、連隊に至り、次いで、諸種の配托物、及び、仕事の準備に懸る。

1907.07.09. 火 晴 後 雨

午前、乗馬。午後、東京より手紙来たる。父上、愈快方の趣を知る。

1907.07.10. 水 晴

午前、乗馬。記事なし。

1907.07.11. 木 曇 寒し

午後、軍団長の閲あり。連隊は、三時四十五分、クーベルクに整列し、軍団長の着を待つ。寒きこと甚だし。五時、軍団長来着。閲兵。次いで、一大隊の密集の教練、散開。次いで、三大隊の展開を行う。以上は、連隊長自ら問題を与え、其実施法に就いて軍団長に意見を述べ、最後に、旅団長、問題を与えて四大隊の準備隊形(防禦配布の待機隊形)[丸括弧]を取らしむ。要するに、隊の閲よりも、将校の閲なりし。クーベルクは、小なる地区に、運動員を得るのみにて、他は耕作地にて、此に踏み込みするを得ざる故、面白きことは一つも出来ず。是も仕方なし。閲は八時半迄続き、寒きこと云わん方なかりし。

1907.07.12. 金 曇 後 晴

午前五時四十五分出発。戦闘射撃場に至り、五小隊の順序戦闘射撃を行う。目標も動かず、射撃陣地も一つにて、妙はなし。距離は、僅かに三百米。但し、標的は、実際の如く、若干秒、現出し得。隠匿せしめ、面白き感じを与え

たり。標的に此運動をなさしめ、緊要の実兵が、此動作を行わざるは、不思議と云うの外なし。軍団長は、唯、命中に就いて講評を与えたるのみ。次いで、軍団長は、兵舎及び教練射撃場を見分し、午後、帰還せり。

1907.07.13. 土 曇

記事なし。

1907.07.14. 日 暴風雨

本日、露西亜^{ロシア}より射撃見学許可の通知来たる。帰朝に関する件を陸軍省に通告せりとの通知、福田中佐より来たる。

1907.07.15. 月 雨 後 晴

西大将の報告調装^{よじ}に余事なし。本日、福田中佐より、明日正午迄にウイン^{ママ}に到着すべき電報来たる。

1907.07.16. 火 晴

午前六時発、七時半ウイン^{ママ}着。直ちに福田中佐と訪^{ただ}う。松石大佐、亦^と、在り。午前、銀行(及びクック会社)[行外追加]に至る。本夜、松石・福田・石坂、^{いしさか}・森岡諸氏、バルカン半島旅行に上り、スターツ・バーンホーフに之^{これ}を見送る。

1907.07.17. 水 晴 驟雨^{にわか}

内田大使、羅馬^{ローマ}に出発。南停車場に見送る。クック会社に至り、露西亜^{ロシア}行きの切符を買い求め、午後三時五分出発す。

1907.07.18. 木 晴

午前八時、ワルシヤウ着。車行若干[の後]、露都行の汽車に乗り換ゆ。

1907.07.19. 金 晴

ページ：171

午前八時二十五分ペーテルスブルク[清音]着。内山少将・武藤・浜面^{はまおもて}・高柳諸氏、停車場にあり。直ちに浜面君の下宿に同宿す。(公使訪問。次いで、)[丸括弧]正午、内山将軍に招待せらる。本日、夏公園・彼得大帝^{ピョートル}の旧居及び銅像・貧民の為にする公園及び新公園・アレキサンドル三世博物館・イサキスキー寺(大理石はウラルより持ち来たりと)・プッフ公園(ウイネーデヒの小なるもの)[丸括弧]等を見物す。

1907.07.20. 土 雨

正午、武藤君、来たる。海事博物館及びイルミタージュに至りしも、閉館して見るを得ず。次いで、勧工場及び茶飲み場穴倉^{かんこうば}に至り、更に風呂屋に至る。浴せずして帰る。本夜、黒井大佐に招待せられ、後、一行と共にネフスキープリスペクトを散歩す。

1907.07.21. 日 雨

午前、高柳君、来たる。次いで、武藤君、来たり、急に皇城見物をなす。壮大、他に譲らざるも、室の整頓は出来居らず。即^{すなわち}□、諸品の配列、錯雑せる等、目下の状況に照応するものあり。石細工は立派なりしも、他に是と云うものもなし。本夜、公使に招待せらる。

1907.07.22. 月 雨

午前、大川君来たり、共に海軍ムゼウムに至れば、七月十五日より九月一日迄閉鎖せりとて、見るを得ず。即^{すなわち}、イルミタージュに至り、絵画を見る。随分立派なるものあり、其数の夥^{その}しき、維納^{おびただ}のものに譲らず。次いで、ネバ川を汽船にて越え、動物園に至り^{動物}、皇宝の墳墓に至る。彼^{ビョートル}得大帝を始めとして列代の帝王皇族の大理石棺、配列しあり。寺は綺麗なりし。更に彼得大帝の住せし家・遺物・船等を見る。木造家にして、之^{これ}を保存せんが為

ページ：172

めに、更に其上に掩屋を作れり。更に植物園に至る。熱帯植物の保存、能く出来居れり。園は、頗^よる広大なるものなりし。本夜、高柳君来訪。

1907.07.23. 火 雨

午前十時、清水君来たる。旅行券、出来上がる。共に、射撃学校見学^{おもむ}に赴く。[改行]
射撃学校は、彼得堡とクロンスタットの中間にして、彼得堡を距てる汽車行き一時間の処にある「オラニエンバウム」[かぎ括弧]と称する海岸の一村にあり。校長は少将にして、教官は少数の専属者と(多数の)[行外追加]臨時任命者とあり。教官の大部は参謀官及び技術官より成り、校長は、翌年度のものを予定して参謀本部及び陸軍省に教官の人員を請求するときは、該^が官^い衡^{ママ}、之^{これ}を任命す^{継続せるものにあらざるが故に、其教授法、如何のものにや}。学生は、一等大尉百八十人を一時に召集し、二月より九月に至る間、之^{これ}を教授す。二月より五月に至る間は、専^{もっぱ}ら陸軍作業にして、戦術・築城・兵器学等、主として、少^つ中[少を中に修正]佐進級の為めに要する学科を教え、次いで、野外戦術実施を行い、最後に、一ヶ月間の演習旅行をなしたる後、機動演習及び大演習に配属し、これにて学校を終えるものとす。野外戦術実施は、学生十人より成る一班毎に、教官一人を附し、作業を行う。今後は、此^{この}学校を卒業せしものにあらざれば、少佐に進級せしめざることとなるならんと云えり。教導隊は、一中隊あるのみ。学校専属にして、新兵の教官もなし。後期の時期に至れば、此^{ここ}より直ちに郷里に帰る。即^{ただ}、全く別物の中隊なり。校長の言によれば、学生は、既に中隊長として長年勤続のものなれば、軍隊の指揮・射撃学等は、最早、教育するを要せず。故に、唯^{ただ}、学科を教え、実兵の指揮には重きを置

ページ：173

かず。八月に至れば、野営地より一連隊を学校に派遣し、教官、之^{これ}を指揮して、其要領を示し、一部の学生をして、之^{これ}を指揮せしむることありと。故に、此^{この}学校は、少^{この}中[少から中に修正]佐進級の為にする

学科教授を目的とし、実兵指揮、戦闘射撃、及び、軍隊射撃教育法の教育等は、なさざるものの如し。

将校団教育に就く意あるを聞けば、適當のこともなるも、実行、六ヶ敷と云えり。露軍にては、将校団教育を実行出来ざるものとするものの如し。併し、一等大尉を集めて教育するは、如何のものにや。中隊長となる迄に教育する方、適當と思わる。銃の改良・火薬の改良等に、軍品件は皆、砲兵總監部より問題来たり、之を試験す、と云う。砲兵總監部は、即、技術審査部ならん。試験するとして十分の設備もなし。不完全のものたるに過ぎず。要するに、射撃学校にあらずして、大尉教育所なり。教導隊は、其地の勤務に服し、諸実験に用いらる。諸機械も、整頓せる様、見受けられず。[改行]
本夜、内山將軍に招待せられ、後、劇場に至る。

1907.07.24. 水 半晴 雨

午前、武藤君、来たる。清水君、来たる。午前、暇乞の訪問をなす。本夜、武藤君に招待せられ、後、公園及び動物園を散歩す。

1907.07.25. 木 曇

午後二時、出発。ペーターホーフに至り、公園を散歩し、宮殿・ペーテルの家・噴泉を見る。宮殿の裝飾は、遥かにペテルスブルグ[濁点]のものに優り、噴泉、殊に、サムソン噴泉の壯観、例うるに者物[者を物に修正]なしと云うも不可なし。午後七時、帰

ページ：174

還す。高柳君・武藤君・清水君来たる。午後十時、出発。停車場に至れば、内山少将、又、来たる。十時四十分、発車。

1907.07.26. 金 半晴

汽車中にて、露人の独語を能くするもの、及び、維納人と遇う。退屈せざりし。午後九時、ワルシャウ着。十二時、発車。

1907.07.27. 土 晴 驟雨

午後四時、維納着。直ちに、グッスハウストラーセ、福田中佐宅に入る。

1907.07.28. 日 晴

午前八時出発。ヒンターブリュルに、西書記官・ライヒ及び内田大使を訪う。本夜、内田大使の宅に宿す。

1907.07.29. 月 晴

午前、内田大使夫人、西夫人とテニス遊びをなし、正午、ウイン^{ママ}帰着。ラツアレットに、小池中佐を訪う。不在。更に公使館に至り、又、銀行に至る。

1907.07.30. 火 晴

午前、新山・大橋^{とつ}両氏を訪い、次いで、銀行に至る。午後、小池中佐来訪。本夜、新山・大橋・小池・大村・吉岡の諸氏と会食す。東京より手紙来たる。

1907.07.31. 水 晴

午前九時発、十一時、ツナイン帰着。

1907.08.01. 木 晴

本日、連隊及び旅団司令部に至り、帰着及び召還の通告をなす。競争射撃あり。第四等賞を得たり。

ページ：175

東京に手紙を出す。

1907.08.02. 金 雨 後 晴

午前、セクセンベルクに連隊演習あり。左右に並列部隊ありて、連隊の展開正面僅かに四百米なる場合の演習を行う。然るに、射撃の優勢^うを得るがために、多数の部隊を散開せしめ、為に、散兵線は一米に二人以上を✕[消去^{さん}]算するに至り、奇天列^{ママ}の演習なりし。殊に、負傷者等の関係を見る為めなりとて、敵前何米の時には、一分隊^も若しくは一小隊より何人ずつを残せ等、規定し、散兵線背後の地上^{おうが}に横臥するもの幾百に至り、而も、一構築の演習をもなさず、何の事やら訳の分からぬものなりし。次いで、連隊の諸隊形の変換等を行う。午後、前 暇^{いとまごい} 乞の訪問をなす。

1907.08.03. 土 晴

午前、対抗演習あり。一大隊、対、一大隊半。将校の無能さ加減、真に驚くべし。斥候隊は、唯、訳もなくごそ〜前進し、現に、白帽隊の歩兵斥候隊は、黒帽隊の左側衛一中隊に衝突し、次いで、其前面^{その}を横ぎりて、本隊の左側^{ばくしん}に驀進^{しか}し、前衛中隊の側面五十米^{おい}に於て、不意に衝突し、射撃を開き、前衛中隊は、のろ〜四列側面を続行して、其^{そのまま}左打方をなす。次いで、白帽斥候隊は、退却し、前衛部隊と五十米を隔てて并進^{へいしん}する等、稀に見るの奇観なりし。要するに、地形の關係と搜索の要領とを解せざるによる。又、両軍衝突時に於て、白帽中隊長は敵の兵力を微少なりとし、側面縦隊^{じゅうたい}の俛行進する等、抱腹の事多し。将校の程度の、惜しむらくは、大いに劣れるものの如し。[改行]

本日、白帽隊の騎兵及び搜索隊は、間違いにて最初白帽を附せざりし為、旅団長は、大いに其不注意^{その}を責めたり。但し、日本兵が露兵の服を着して斥候に出て奇効を奏しめたる事實は、平時に於ても演練^{おい}の

必要無きか。要するに、其方法如何は六ヶ敷問題なり。今は、余は妙案を有せず。是れ、演習を不規律に陥らしめざるが為めなり。或いは、戦時には実

ページ：176

施するを得るも、平時には、演練、六ヶ敷ものか。人種の黒なるものは、近寄れば顔面・言語等にて容易に区別し得るも、西洋にては、顔容相似、而も言語を解するときは、此区別、甚だ困難ならん。併し、仮装は、戦時にあり得べきこととすれば、平時より何とかして、之を防ぎ、及び、之に慣れることの演習をなし置かざるべからず。日本人の為めには、白帽の外に仮えば腕に(細)[行外追加]赤条を附する等、近寄れば見得るものを附し置き、斥候に限りて之を用うるが如きこととせむ。如何のものにや。[改行]
本夜、ペッフワー中佐に招待せらる。

1907.08.04. 日 曇

午前、報告の調装等をなし、午後、暇乞の訪問をなす。

1907.08.05. 月 晴 大いに熱し 二十八度より三十度

戦時人員大隊の対仮設敵演習あり。射撃の関係・展開の景況等、先ず上出来の演習なり。但し、演習後の講評に、毫も下士以下の動作に及ばざるは、如何のものにや。本日の演習の如きは、過剰。将校、数十名あり。是等を皆、審判官となし、分隊長の号令・分隊の指揮・目標、及び、照尺に関する分隊長の注意、及び、兵卒の姿勢・照準・照尺の装法定[法から定に修正]等、百般のことを監視及び教育せしめば、利する所、更に大なりしならん。然るに、是等の将校を演習地区の一方に追遣り、只、見学のみをなさしめれば、不適当なりし、思わる。大隊長以下の下馬の時機、遅し。講評後に、ぐず～～[濁点]言うの癖あり。可忘。

1907.08.06. 火 晴

午前、連隊対仮設敵演習あり。本日の演習は、展開、其他良好にして、多く非難すべき点を認めず。唯、兵卒の照尺を装せざるもの、小隊長・分隊長等の散兵線に対する注意欠くるもの多く、唯、ぶらり然たるは、惜しむべし。但し、熱きことは無類なりし為め、或いは如 此 状況を顕出したるならんか。射撃戦の実況を写さんとすれば、散兵線は、空包の少なきと共に間が抜けた

ページ：177

る観を生ずるは、免るべからず。小隊長以下、鸚務返しに照尺を号令するのみに止まる。何とか方法を講じたきものなり。ペッフワー中佐は、連隊長の講評中なるにも 拘らず、常に嘴を入れ、誰が連隊長

やら分ならず。衆人皆酔□我独醒□の観あり。隊長として、部下の信認を繋ぐ上に必要の注意事項ならんか。

1907.08.07. 水 晴

午前、戦時人員大隊の仮設敵演習あり。演習地セクセンベルクにて既に同一の演習を^{しばしば}屢々復行せしこととて、部隊の運動等、多く問然するものなり。上出来なりし。若干耳に触れたるは、散兵の前進前、打方、後で照尺基礎へ前進の号令にて、□者は、兵卒、^{ことごと}悉く^{これ}之を復唱するが故に、声、雷の如く、千米以上の大距離に於ても、^{おい}尚、^{なお}時々、^{これ}之を^う聞くを得。弾丸雨□の間にありては如何か知らざれども、^{この}此声、^も若し敵に聞こえるとすれば、^{その}其前進時期を敵に予報するに外ならず。然るときは、敵は有利の目標に対し、射撃を適宜になすを得。不利ならんと思わる。但し、^{ただ}此復唱は、^{この}前進に際して、尚、射撃をなすものあり、為に、危険を生ずるを予防する目的ならんも、考えものなり。[改行]
午後、師団長、来着。ドライクローネに会食す。

1907.08.08. 木 晴

午前、師団長の部隊教練閲あり。密集大隊の運動。^つ次いで、^{あと}単簡なる想定を^{これ}与うて、之に対する処置をなさしむ。兵卒の動作に至りては、殆んど講評せず。分隊長(の動作)[行外追加]も、^{また}亦、^{しか}然り。^{しゅ}首として、中隊長以上の戦術的能力及び^{その}其活動を見るものの如し。但し、^{ただ}狭小の演習地に於て、^{おい}各方面に幾多の状況^{もう}を設けて演習を行わしたるは、感心なり。[改行]
午後、師団長の閲射撃あり。各中隊は、兵卒六十人を出し、良好の射手と云う訳にあらず。各人、四発ずつ射撃せしむ。

ページ：178

目標は、五人全身的にして、射距離六百歩。^{しこう}而して、中隊の全員、同一標的に向けて射撃し、命中点は、^{これ}之を示せず。中隊の全員射撃し終わるや、^{もと}標的の全部を検査官の許に運搬し来たりて、検査官は、^{その}其命中弾数の多少・散布の景況・命中平均点の照準点に関する位置等により、各隊の優劣を判定す。一寸、面白き方法なり。(一中隊の発射弾、二百四十発。最良成績^{せいせき}、百十二の命中を得たり。)[行外に赤字で追加][改行]
本夜、又、ドライクローネに会食す。

1907.08.09. 金 晴

師団長、出場。歩兵戦時一大隊の戦闘射撃あり。標的は、皆、起伏的にして、砲兵・歩兵の前進。次いで、散開等の順序を顕し、^{ほか}砲兵的の外は、皆、自動倒的なりし。部隊の前進・散開・増加等、殆んど従来^この演習の如く、予備隊援隊の如きも、多くは、散開して前進し、別に之れとて記すべきこともなかり

ただし。唯、並立大隊として演習せし故、大隊の正面幅四百五十米と規定したれば、戦時大隊を散開するとき、極めて濃密の散兵線となり、或る部分は、殆んど射撃も出来ざる位に密集せしを見る。師団長は、散兵線は疎散ならざるべからずとて、切りに八釜敷云いしも、人員と地幅の関係は、勢、之を免れること能わず。於 是、数百人の戦死・負傷者を仮設し、審判官、散兵中の兵卒を抽出せり。此方法は、考えものならん。地形を得るの困難なる為め、止むを得ずとは云いながら、散開せる大隊の中央、中隊は千四百歩、即、約千米より三百米に至る間は、地形凹陷 殞を見んと欲すれば、立射せざるべからざる如き有様。而も、平時の演習なれば、斜方向にある標的を射撃するは、危険あり。即、単に正面射撃の外、行うべからず、と規定したれば、両側にある中隊も、亦、同じく中央中隊前面の標的を射撃するを得ずして、其結果、領側中隊前面の標的は、多く斃れたるも、中央中隊の前面にあるものは、殆んど全部残れるの奇観たる呈せり。

ページ：179

演習の始め、統監たる連隊長、及び審判官たる参謀中佐は、演習大隊長と共に、師団長の到着前、かくのごとくこの如 此 せん、此方法は可なり等、万般打ち合わせをなせしも、師団長、来て、突然、此計画を変ぜしめ、為に、大恐慌を来せしを見受けたり。師団長は、演習間、馬を八方に飛ばし、射撃、前進、散兵線の疎密等、百般の諸件に、八釜敷干渉し、而も、罵詈を加えたるを見る。師団長の講評の緻密にして適切なるは、敬服の外なかりしも、干渉と罵詈と、旅団長にも連隊長にも一言の講評をなさしめざりしは、如何のものにや。講評の中に、中央中隊の正面、初め過広なりし為、両側の中隊は止まり得ず。隠蜜の散兵を作りざるを得ざるに至れりとの理由を詳述せり。[改行] 演習不出来なりし為め、明日、更に同一の演習を空包にて復行すべきを命じたり師団長。

1907.08.10. 土 晴 夕 驟 雨

本日は、旅団長臨席。昨日の演習を復行す。昨日よりは、静 肅に出来たり。昨日は、演習不出来にて、師団長の不良の講評を得たる為め、連隊長以下のしおれ様、哀れにて、西洋人の感情の早き、驚く斗りなり。本日は、演習の始め、旅団長は、将校を集めて、左程悪しき講評にてもなし大体は可なりしも、只、師団長の、見られたる二三の過誤ありたる斗りなれば、本日は、能く注意して上出来の演習をなすべしとて、大いに之を慰藉せり。旅団長の配意、感ずべし。演習に就いては、別に之れと云う程の事も無く、先ず上出来と云う方ならん。 [改行] 午後は、一昨日、同様の射撃演習ありしも行かず。本夜、テニス宴会あり。

1907.08.11. 日 晴

別に記事なし。

1907.08.12. 月 晴

前哨及び歩哨攻撃の演習あり。軍隊に於て歩哨勤務を行うこと少なきの故に、其配布の拙なる歩哨中隊、小哨・歩哨位置の撰定^{せんてい}のまずき加減、不思議なる程にて、歩哨攻撃者は、単に森林中をごそ〜〜行進し、つまらぬ演習なりし。併し、^{しか}原来の想定は、一方に歩哨を張らしめ、他方には、^{ただ これ}唯、之を攻撃して、其背後に、大なる部隊の有無を偵察するにありしも、其^{その}聖過は、^{そのけいか}甚だ面白^{はなは}からず。一前哨中隊長は、敵を見て、^{ただ これ}直ちに之を攻撃し、其^{その}撃過せらるるにも至りて、他、前哨中隊に^{こ がいい}応援を請い、該中隊長は、己^{おのれ}の受持^{しら}を検べては、其^{その}応援に来たる等、面白きことありし。

1907.08.13. 火 晴

連隊の仮設敵演習ありしも、他の仕事、忙敷^{いそがしく}、行かず。

1907.08.14. 水 晴

休日なり。本夜、酒倉に招待せらる。

1907.08.15. 木 晴

ナポレオン^{こま}伯に至る。眺望絶佳。本夜、下宿の家族を招待す。本日は、祭日なりし。

1907.08.16. 金 雨

本日は、連隊演習ある筈なりしも、雨天の為、中止となる。併し一方、軍の如きは、既に一時間余も行軍し、^{ようや}ずぶ濡れとなりたる後、漸く中止す。西洋人の雨を恐るること、無類。不思議なり。[改行]
本日、少尉三人、胡瓜漬^{ふかん}を見たしとて来たる。軽疾見るに不堪。

1907.08.17. 土 雨

正午、高山、遅着の報、来たる。大騒ぎをなし、連隊長に乞うて、馬卒^{ウイーン}を維納に送る。福田中佐より、高山、十八日着の電報、来たる。本日は、休日なりし。

1907.08.18. 日 晴

皇帝誕生日にて、連隊の大練兵場に祭典及び分列式あり。閲兵の為にする縦横整頓、立派なるものにて、分列式も立派なりし。横整頓には、線を引き、縦整頓には、中隊長、一々を正す。即^{すなわち}、最前列の

ものには、銃を顔の中心に捧げしめ、^{これ}之によりて直すなり。野外の閲兵あるときは、各隊には、六歩の所^{これ みよう}に印を附したる紐を携え行かしむ。是も 妙 なり。

1907.08.19. 月 晴

大隊長プエッフワー、第十軍団参謀長たらずやとの内^{ないちよう}牒^{しか}を受く。然るに、同地は、ガリチェンにして、独乙語を話さず。同中佐は、一人の男子あり、其^{その}教育に困るとて、之^{これ}を辞する為め、維納^{ウィーン}に赴^{おもむ}けり。✕[消去]数多の語学を話すの実、何処までも及ぼすものなり。[改行]
機動演習の第一日。[空白]歩兵第九十九連隊^{四大隊}・騎半中隊・砲四門、対、歩兵第八十一連隊^{三大隊}・騎半中隊・砲四門の遭遇戦あり。[空白]騎兵、尖兵動作のまずさ、言うべからず。常に歩兵の先頭、三、四^{はず}百米^{はす}筈^{はず}では、百米位に粘着し、村落・森林等あるときは、之^{これ}を、疾駆通過若しくは迂回して、搜索する等のことなり。其^{その}入口にまご〜[濁点]し、道路の両側、三四百米にある高地等には容易に昇りて、他方を見る等のことをせず。現に、衝突の際の如きは、両軍共に二百米位の前面に歩兵の到着しある^{これ}も、之^{これ}を知らず。殊に、(第)[行外追加]八十一連隊の歩兵、歩兵一中隊は、第九十九の歩兵、少しく早く敵を知りたる為、側面縦隊に急射撃を受くる等の奇観を生みたり。尖兵の使い様は、大いに注意すべきことならん。両軍の指揮官・中隊長以上、

ページ：182

敵前に二三百米なるにも不^{かかわらず}拘、平気にて乗馬し居り。其^{その}伝騎、又、平然、之^{これ}に従う。不自然、極まりなし。散兵の間隔は、又々濃密となり、部隊の運動、敵前四(五)[行外追加]百米を、俄然、密集隊にて行列する等、決して上出来のものにあらず。旅団長の注意、周到にして、是^{これ}等の諸件、一も看過することなく、教訓的に着々講評するには感心せり。是^{これ}を思えば、師・旅団長は、慥^{たしか}に有為の人なるも、中隊長以下に十分の技倆を欠くものあるを認む。[改行]
この^{この}演習後、両軍共に退却・露營を行う。此^{この}想定若しくは情報^もは、余り面白からず、^{やや}稍自然ならざるものの如し。露營には天幕を張り、突然として[は]能く出来、炊事其他、間然する所なかりし。[空白]但し、露營地の撰定の如きは、損害多き為、適良の森林等あるも、之^{これ}を利用すること^{あた}能わず。刈り取りたる畑を利用する等、気の毒の事あり。従って、露營の演習をなさしめんとすれば、損害を顧慮して定められたる露營地の関係上、想定等^{ここ}を此に導かざるべからず。(指導)[行外追加]困れしと云うべし。昨年^{あらかじ}迄は、予^{あらかじ}め宿営地を一定し、放線的演習をなしたるも、本年よりは、日露戦に鑑^{かんが}み、多少日本機動演習に類する如く演習を行うこととなれり。但し、如^{ただ}此^{かくのごとく}すれば、欧州にては、金は多く要するならん。

1907.08.20. 火 雨

露営後、第九十九連隊に退却をなさしめ、第八十八^{ママ}に攻撃をなさしける筈なりしも、猛雨疾風びしょ濡れとなり、且つ^か、雨降りて、地、柔くなるときは、畑地に兵の踏み入りて損害賠償をなすこと多しとて、遂に、演習を中止せり。福田・高山両中佐、来たる。[空白] 男爵ヒーターマンに招待せらる。

1907.08.21. 水 曇

本日は、旅団の仮設敵演習ある筈なりしも、天候と損害とを顧慮して、演習を行わず。各中隊は、任意の

ページ：183

演習を行えり。高山中佐と玉突をなす。

1907.08.22. 木 半晴

本夜、午前三時、緊急集合あり。敵襲ありと。蓋し昨夜六時より全く対敵の姿勢に移るべき命令あり、想定等も与えられたればなり。連隊^{その}旅団は、其前哨に敵襲を受け、不時呼集をなし、之^{これ}に赴援せしも、何分、舎営の事なれば、大いに時期を失して其前哨線に到着せりと。[改行]
余等も、此演習に赴^よくべき筈なりしも、不時呼集は静粛に行われ、喇叭^{らっぱ}の吹奏等、劣りし為、全く之を知らず。連隊大隊よりは、通知、来たらず。朝まで安眠せり。翌日、普通集合時刻に其場所に至れば、初めて不時呼集のありたることを知り、余等の不注意^よを謝^{あや}まると共に其理由を述べたれば、大隊当直は、直ち^{ただ}に処罰せられて、営倉に入れられたり。高山中佐と玉突をなす。

1907.08.23. 金 半晴

午前六時、出発。演習開始処に至る。師団長は、余等^よに対し、無類の好意を表し呉れ、共に来たるべきことを命ぜられ、視察上、非常の好都合なりし。想定は、一日^{しか}～～に変更せられ、而も極めて短局なりし。本日の演習は、一般^{おい}の關係に於て、上出来にして、戦闘の状況は、能く写^うすを得。師団長も満足なり。其想定は、一方、軍は戦敗退却の途中、軍司令官より命を受け、徴発輸送掩護^{えんご}の為、少なくとも三時間、敵^{さき}を支うべしとなし、一方、軍は敵を追撃し、三連隊にて前進す。占領したる陣地は、後方に徒^{としよう}渉すべからず。而も、僅かに二橋梁^{しか}の外なき大河^{ほか}タイヤー

ページ：184

あり。其前方にある高地上に陣地を占めたるにて、スカーリッツの陣地に彷彿たるの觀ありき。攻者の正面、不知不識の間、七千歩、^{すなわち}即、約三千米余となり、八大隊平時人員の旅団の為めには、^{やや}稍、広きを覚えたり。ペッフワー中佐の一部隊三大隊は、他と連繫せず孤立、陣地を占領せらる。陣地の前面、^も三四百若しくは百米に迫り、各個に撃破せらるる如き觀を呈したり。本日も、砲火の下に密集隊にて運動する部隊あるを見る。蓋し地形・損害賠償の關係ならん。師団長の講評の、簡潔明晰、而も細事一も

漏らさざるには、何時も乍^{なが}ら敬服せり。砲兵の退却せる陣地、殊に、高地には、直^{ただ}ちに斥候を送るべきことを八釜敷^{やかまし}く云えり。[空白]併^{しか}し、師団長は、少しく干涉に過ぐるものなきやの感あり。演習部隊に、云[う]にせよ、如^{かくのごとく}此^{しか}せよ、等のことを云い、統監^{なが}乍ら、命令^{この}を此演習実施者に与^{これ}う。是は、避くべきことと思わる。本夜、ミレシュッツに宿泊す。

1907.08.24. 土 曇

本日は、軍団長臨場。演習の閲あり。演習は、両旅団対抗の仮設敵[消去]演習にして、両軍共に前進し、遭遇戦を行えり。本日は、軍団長臨場なれば連隊^{とど}に止まるべしとの命を受け、全部の状況を見るを得ざりし為め、此評価^{この}を知るを得ざるも大なる過誤と認めしむ。本連隊の大部隊を砲兵陣地の直後、百米^{ばか}斗りを行進せしめ、更に意とせざるにありし。是等は、唯、演習の結果を争うて、実際の効力、及び、如何に砲兵戦を行わ^いるべきやを顧慮^いせざるに出づるものと思わる。其他別に記すべきことなし。

ページ：185

本夜、リリエンドルフに宿泊す。宿舎^まは、先ず綺麗なりし。

1907.08.25. 日 晴

本日は、リリエンドルフに滞在。休日なり。本日、午後六時より対抗の姿勢を取るべき筈なれば、宿舎附近前の散歩を許さずと。窮屈のことなりし。

1907.08.26. 月 晴

軍団演習あり。両師団を対抗せしむ。回り灯籠^{まわ どうろう}の演習となり、妙^{みょう}な形となれり。即^{すなわち}、遭遇戦にて、一方は、敵師団の本戦に参与するを妨害^かし、且つ、成るべく多くの兵力を吸引すべき命を受け、一方は、前面にある師団を撃破して、敵本戦の一翼を脅かせ、と云うにありたり。故に、両師団は、恰^{あたか}も反対側に営力を用うることとなり、両軍共に、一進一退。遂に始末の付かぬ事となりたり。蓋し、下級指揮官^{けだ}は、全体の状況如何を顧慮することとなり、唯、前面の状況のみに釣られて驀進^{ぼくしん}を試し、甚^{はなは}だしきは、散兵線中の一二中隊の、他に顧慮なく、敵に突貫するが如き、或いは、一二中隊、他散兵線と連繫せず、数百米前方に孤立前進するが如き、要するに、下級幹部の連繫動作^{おい}に於て、大いに欠くるものあるを認む。其他、審判官は、両対抗者の兵力のみを顧慮して随意に進退を命ずるが故に、戦線の形状、複雑を極め、遂に收拾すべからざるに至る。審判官は、両敵の兵力を顧慮すべきは勿論なりと雖も、演習をして利益あらしめんとすれば、全体の状況を顧慮せざれば全体の指揮官は遂に全く如何ともすべからざるに至るならん。注意すべきことなり。但し、散兵線の形状粗密、援隊・予備隊の敵火の下に於ける散開隊形、前進等は、適当に実施せらる。

ページ：186

本日は、戦闘を中止し、翌日、更に之^{これ}を継続すべきこととなる。本夜、ポーミッチに宿泊す。

1907.08.27. 火 晴

昨日の演習を継続し、両師団、共に其^{その}任務を遂行すべきことを命ぜらる。但し、昨日の演習の状況を継続するにあらずして、両敵、各、其^{その}宿営地に帰り、更に演習を行うなれば、連続の演習なりとて、戦況は全く別物なり。故に、機動にあらずして、やり直し、若しくは、同一想定の下に数種の演習を行うもの、と評するを適当とす。蓋し、損害賠償に過当の金額を要するは不得止、如^{ただ}此^{かく}ことをせざるを得ざるに至り、戦況に^{けだ}伴^{やや}うて、稍、自然に近かるべき演習を行う能わざるは、気の毒の事なり。本日の演習には、一方、師団の一連隊を他師団に合し、一方を防禦^{ぼうぎょ}せしめ、一方を攻撃せしむ。攻者全般の隊形^よは能く出来たるも、例により、一小部隊の累進は、見るも厭になる位にて、軍団長の講評にも、連繫動作に、尚、注意すべきことは反覆^{はんぷく}、之^{これ}を述べたり。其他、特に記すべきことなきも、唯、師団長以下中隊長位に至る迄、平気にて散兵隊の近傍を乗り回し、毫も頓着せざるに至りは、驚くの外なり。高級指揮官が、一定の位置を占めて、命令・報告の交換及び全般の指揮のことに注意せざるは、大欠点と評するの外なし。独乙にても、然りとしか。行軍の時の如き、旅団長・師団長は、時として、尖兵^{せんべい}の処に至り、小な^{これ}✕[消去]事迄世話を焼くを見る。是も、又、大欠点ならん。本夜、ランガウに宿営す。ペツフワー中佐の門番となり、不愉快なりし。連隊副官に転宿を乞いたるも、出来ざる様なりし。蓋し、一小村落に二大隊以上宿営し、他に家なかりしならんも、外

ページ：187

国将校を待遇するものとして、少しく礼を失するの感を免^{まぬが}れざりき。

1907.08.28. 水 晴

本日は、休日。本日より演習の終わり迄、此地^{このとど}に止まることとなれり。本日は、旅団、距離測量^{せんしゆ}撰手の競点距離測量を行う。其^{そのさい}際、歩兵、一旅団内の各大隊にて(下士以下)[行外追加]、従来の成績最優等を得たるもの一名ずつを撰^{せんしゆつ}出し、之^{これ}に競点距離測量を行いしむるなり。而^{しこう}して、距離目測は、五百乃至二千米、即^{すなわち}、近距離・中距離及び遠距離に於て、十回、之^{これ}を行い、其^{その}総成績、百分の十二以内のもの二名に三十クロネ及び二十クロネの賞金を与え、機械測量は、五回、之^{これ}を行い、百分の十以内の成績を(即^{すなわち}、測量誤差なり)[丸括弧]得たるもの一名に、同じく、三十クロネをの賞金を与うるなり。本日の演習に於て、最良の成績を得たるもの一一、〇八にして、最下等のもの二三、二三。而^{しこう}して、百分の十二以内の測量誤差^{もつ}を以て測量し得たるもの、僅かに一名のみ。即^{すなわち}、賞金を得たるもの

は、唯^{ただ}一人なりしなり。機械測量は、其^{その}誤差、非常に大にして、最良のもの、十八乃至二十。最下等のものは、四十に達^{しか}し、而^{しか}も、例年、至る所、其^{その}成績、常に目測に劣ると云う。即^{すなわち}、基線を歩測するが故に、首^{しゅ}なる誤差の原因は、此^{ここ}に生ずるなり。故に、機械測量には、是非共、測^{そくじょう}縄を有せしむるの必要あるなり。然らざれば、機械測量の、目測に劣る理由を生ぜざればなり。機械測量をなせしものに、最少時間を要せしものは、僅かに一分時にして、最多数の時間を要せしものは、三分、多くも四分時に過ぎざりし。次いで、機械測量の、

ページ：188

戦時に応用し得るを知るべし。而^うして、機械測量は、遠距離^{しこう}に於て、五回、之^{おい}を行えり。[改行]

本日、福田中佐より通知あり。田原少佐、二十五日、長^{ちようせい}逝すと。気の毒の至りなり。[改行]
本日、転宿す。

1907.08.29. 木 晴

本日は、旅団の対抗演習あり。一方はドローセンドルフに、一方はラングアウの南方^{その}にあり、其距離、僅かに五六^{キロメートル}吉^{ごう}米^{これ}に過ぎず。故に、騎兵の運動は、毫^{かいかつ}も之^かを為すを得ず。地形は一般に開豁、運動を起こせり。直ちに衝突と云う有様にて遭遇戦を行いまたり。如^{かくのごとき}此^{ただ}状況なるが故に、両軍共、命を受くるや、殆んど直ちに開進。^{しか}(然らざるも)[行外追加]戦闘隊形に拘^こりて、激に衝突を求めざるべからざるに拘^{かかわ}らず、両軍、共に鰻連隊となりて前進し、其将校は、是れ即^{その}、塙国流にて、軍隊は、成るべく長く道路に依らしめ、以て無益の疲労を避くべしとの原則に基づくものなりとして、恬^{てん}として顧^{かえり}みず。寧ろ^{むし}気の毒の感あり。故に、晩れ馳せ乍ら、東軍支隊長の、砲列布置を命ずるや、該砲兵は、敵の大連隊を、二千五百乃至四千の距離に長時間射撃するを得たり。又、北軍は、何故なるを知らずと雖^{いえど}も、八方より展望せらるべき稜線上を行進し、而^{しか}も鰻連隊にて、不都合と云うの外なし。次いで、南軍前衛を本道上に展開するや、該前衛は、毫^{ごう}も本隊と直繋を保つことなく、驀^{ばくしん}進又驀進。孤立敵に迫る勇や賞すべし。愚や笑うべし。共同動作の欠くるは、何れの演習にも、之^{いざ}を見るを得。此日、北軍は、南軍に対して殆んど行進方向に平行する正面を以て相対抗するに至り、師団長は、其^{その}講評に於て、其^{おい}不都合^{その}、及び、其^{その}行進^{もつ}口なる方、森林搜索の不備を

ページ：189

責め、兵卒も将校も全く野外的教育出来居らずと、痛罵せり。然^{しか}り。連繋動作、地形の利用、将校の火線内に於ける態度等の欠点は、正に師団長の言を正当とす。旅団長以上諸将校の^{すこぶ}頗る有為なるに反し、其^{その}以下の将校の無為なる、寧ろ驚くべきものあり。蓋し、旅団長以上の諸官は、皆、陸軍大学出身の優

秀者にして、多年参謀官たり。又、軍隊指揮官たるものなれば、其優秀なる、亦、知るべし。本日の演習に、ペッフワー中佐、本隊の指揮官なりとて、旅団長の鼻の先、僅かに二百米斗りの地にあるにかかわらず、命を下して、其三大隊を展開せしめ、独断専行、宜しきを得たるものなりとなす。而も、時期、旅団長の命を待つ暇なきにあらざりしなり。是れ一は、演習旅団長大佐の決心の遅きと、旅団長としての位置の撰定、宜しからざるに基因し、寧ろ、ペッフワー中佐の処置を適当なりとするの状況ならしめたり。是、将として心得[置]くべきことならん。

1907.08.30. 金 晴

本日も又、旅団の対抗演習あり。一方、軍は、其本軍のターヤー河渡過を援護すべき任務を受け乍ら、敵を見るや、出ては之を攻撃し、他方、軍は、敵を前進するものと仮定し、其衝突点を予定して、行進方向を規定し、即、必要なきは、畑中を妙な方向に行進し、予定衝突点に敵の来たらざるを見て、即、又、方向変換をなし、近距離に於て、殆んど直角の行進をなせり。何の事やら分ならず。敵砲の、砲火を開くや、攻者の砲兵は、直ちに砲列を布き、而して、攻撃の為、前進する歩兵は、遠慮なり。砲兵陣地の真後に集

ページ：190

合し、砲列の中間を通過し、恬として顧みず。其無邪気さ加減、寧ろ、批評の外にあり。小部隊の孤立猛進と諸部隊連繫動作の不充分なとは、今日も、亦ありたりと雖も、之を他日に比すれば、稍、可なりしものの如し。[改行]

何に中てられたるや分からざるも、午後、下痢し、閉口せり。パン焼き爐を見る。野戦用のものなりと云う。唯、泥土にて、簡単なる閉爐を作り、其下部を平面となし、初め、火を焚きて爐を熱し、次いで、パン粉をくねたるものを、其内に入れ、之を干し焼きするなり。初め爐を熱するには、九時間を要し、次は、二時間毎に、パンを焼くことを得、と云えり。

1907.08.31. 土 晴

(本軍の)[行外追加]ターヤー渡河を掩護すべき任務を有する旅団をして、フェーリング[濁点]附近に防禦陣地を占領せしめ、他方の師団をして、之を攻撃せしむ。攻撃軍は、四縦隊にて殆んど展開して行進し、諸般の連繫、今日は最も上出来なりし。演習後、師団長に告別す。午後三時半、ハルデックを至て、アルトシャーラスドルフに帰る。

1907.09.01. 日 晴

午前、斬髪。荷物の片付けをなす。旅団長及び連隊長に、告別す。^{高山中佐と同道す。}連隊本部前にて、高山中佐と共に全連隊の影撮をなす。午後七時、発車。連・大隊長以下、送り来たるもの数十人、下宿ツェルクの主婦及び小児、送り来たる。午後十時、ラツアレット着。

ページ：191

1907.09.02. 月 晴

午前、福田中佐^とを訪う。不在。午後、高山中佐と共に更に福田中佐を訪う。荷物の片付けをなす。風邪にて、気分悪し。

1907.09.03. 火 晴

荷物の片付けをなし、勲章綬^{じゆ}を注文し、公使館^{ママ}に至り、土産物の注文^つをなし、次いで、高[消去]福田中佐の宅に至る。

1907.09.04. 水 晴 後 雨

風邪にて、尚^{なお}、気分悪し。高山中佐と共に、陸軍省、軍団司令部及び公使館に至り、次いで、玉突をなす。福田[消去]

1907.09.05. 木 曇

気分、尚、悪し。高山中佐、出発。スタートハーレに見送る。大村大尉^とを訪い、次いで、共に小池中佐を訪うて、散歩す。本日、土産の買物をなす。価、千百クローネ。

1907.09.06. 金 曇

気分、尚、悪し。荷物の片付けをなす。[改行]

本年施行の大演習に、某隊は強行軍を行い、十四時間昼食せしめずして行進し、為に、歩兵一連隊、其^{その}人員約千四百人に約五百人の患者を生じ、数人は死せり。死せるものは、日射病なりし。是等^{これ}の現象は、絶えて従前になき所々で、塹軍^{おう}が、日露戦の結果、其改善^{その}に汲^{きゆう}したる一事を知るに足る。新参謀総長の訓令、新陸軍大臣へ新参謀総長の登用^{その}、其他諸種の改善、に大いに意を尽くせるを知るべし。

1907.09.07. 土 晴

ページ：192

荷物の片付けをなし、佐藤君^とを訪う。不在。高山中佐に 漣^{さざなみ}を送る。

1907.09.08. 日 晴

午前、小池中佐^とを訪い、共に散歩し、玉突をなし、次いで、大村大尉^つを訪い、相伴^{とももの}うて、ヴィネーデヒのコリアンドリーに至る。

1907.09.09. 月 曇

午前、指環屋に至り、(次いで)[行外追加]書肆^{しょし}に至りて、勘定を注文し、服屋に至り、勘定を渡せし。次いで、両軒の荷物運送会社、International Transport Gesellschaft に至る。午後、行李^{こうり}六個を送り出す。本夜、福田中佐、伊集院^{いじゅういん}中将の一行と共に着維。東停車場に出迎う。

1907.09.10. 火 晴

午前、書肆に至り、勘定書を取り、次いで、大使館に至る。午後、書肆に至り、支払をなす。此時、間違^{この}いにて兵事新聞を引き続き日本に送り居れりとのことを聞き、無駄^{のう}銭二十四クローネを支払えり。次いで、小刀・紙入れ・旅行用囊等を買う。

1907.09.11. 水 晴

記事なし。伊集院^{いじゅういん}中将、出発す。本箱屋に至る。

1907.09.12. 木 晴

連隊に招待せらる。他、記事なし。

ページ : 193

1907.09.13. 金 晴

ママ 公使館及び福田中佐^とを訪う。本^{ママ}??屋に至る。[消去]

1907.09.14. 土 晴

福田中佐、連隊の将校を招待す。佐藤君来訪。

1907.09.15. 日 雨

リーシング[濁点]にラウシュを訪う。福田中佐を訪う。山崎少佐、来着。✕[消去]

1907.09.16. 月 晴

陸軍省にベルプチ大尉、侍従武官室にマルグチ少佐^とを訪い、写真を送る。福田中佐を訪う。斬髪す。

1907.09.17. 火 晴

荷物屋に至り、ママ 公使館及び福田中佐^とを訪う。汽車切符を注文す。銀行に至り、金を受け取る。

1907.09.18. 水 晴

ママ 公使館に至る。午後、小池中佐^とを訪い、膝掛けを買い、玉突をなし、福田中佐を訪う。

1907.09.19. 木 晴

午前、入浴。山崎少佐来訪。午後、谷氏と玉突をなす。

1907.09.20. 金 曇

午前、時計屋に至る。両独立大隊 Sarajevo 1/99 Znaim 3/99 に電報を出す。

ページ：194

1907.09.21. 晴 土

午前、ライヒ將軍をヒンターブリュルに^と訪い、次いで、西書記官を訪う。福田中佐・小池中佐^{また}、亦、来たる。

1907.09.22. 晴 日

本日、内田大使に招待せらる。山登りをなす。福田・小池両中佐、中川幸助少佐・吉岡大尉・森書記生等、亦^{また}、伴う。

1907.09.23. 晴 月

午前、クックに至り、切符を受け取り、次いで、大使館、領事フィッシャー、福田中佐^とを訪う。

1907.09.24. 晴 火

午前、連隊^とを訪い、金を替え、佐藤君を訪い、次いで、福田中佐の宅に至る。吉岡君来訪。本夜、福田中佐に送別の宴を張らる。

1907.09.25. 晴 水

午前八時、宅を出て、スターツ・バーンに至り、荷物を預け終わる頃より、見送り人、福田中佐・小池中佐・中川少佐・吉岡大尉・大村大尉・菊地^{ママ}外交官補・森書記生・チンマーマン・佐藤銀五郎君・佐野医学士、松尾・松岡両学士、停車場に来たる。午前九時五分、発車。午後二時、ブダペスト着。直ちに^{ただ}ホテルメトロポールに至れば、満員にて室なく、^{すなわち}即、ホテルアドリヤに至る。次いで、本日、借金を返すことを忘れてしことを思い出し、郵便局に至り、吉岡君に五クローネを送附し、ドナウ河畔・マルガレット島・ブルックス山等を見物し、写真帖^{はがき}を買ひ、見送りの諸君に^{もつ}端書を以て礼状を出す。

1907.09.26. 晴 木

ページ：195

午前、アントレアス街を散歩し、市公園に至る。結構、壮麗。公園として能く行き届けり。次いで、森岡中佐に電報を発す。プタ[濁点なし]ペストに入りて、著しく眼に触れしものは、料理屋の諸給仕のフ

ラックを着せざると、人種の著しく異^{こと}なりて、黒毛のもの多きとにありき。午後三時二十分、出発。ウンガルンの平地、支那にも優れり。

1907.09.27. 晴 金

汽車中の雑^{ざつ}閤^{とう}、言わん方なり。昨夜、殆んど眠らず。殊に、臭虫に囓^{ママ}まれて、大いに閉口せり。同行ユダヤ^{ユダヤ}、真に驚^{ばか}く斗りなれり。汽車、セルビヤに入りて、家屋・高^{こう}梁^{りやん}、其他万般の事物、大いに変化し、真に支那流なるを見る。殊に、高粱(なんば)[行外追加]の多き畠は、悉^{ことごと}く是^ぜならざるなり。真に異様の感を与え、明^{めい}にバルカンの境界を示すを見る。次いで、ブルガリヤに入る。大いにセルビヤと異^{こと}なるものなし。

1907.09.28. 晴 土

君^{コンスタンチノープル} 府^{その}の入るに、其旧城址を見る。廃墟、今や見る影もなし。汽車、延着し、午前十時、停車場に着すれば、森岡中佐、中村栄一両氏あり。同氏等は汽車延着の為、一停車場先きまで迎いに来たりしも、更に行違いを恐れて、引き返せしなりと云う。直^{ただ}ちにホテルロンドンに入る。森岡中佐と共に、昼食し、次いで、ガラタ塔に登る。絶景、云わん方なし。次いで、博物館に至り、独^{ドイツ}乙皇帝紀念の泉に至り、埃^{エジプト}及より持ち来たりし塔を見、大市場を散歩して、家に帰り、中村氏及び森岡君を訪^とひ、端書^{はがき}及び写真帖を買^{かくのごとき}い、入浴す。コンスタンチノープルのガラタ塔は、真に絶景にして、従来、未だ如^お此^か好景を見ず。市街は狭^かく、且^{かつ}つ、不潔にして、犬、極めて多きも、曾て聞きたる程にはあらず。婦人の覆面^おせるも、可笑^かし。

ページ : 196

1907.09.29. 晴 日

午前十時、森岡中佐・中村栄一両氏来たる。直^{ただ}ちに両氏と共に、旅館を出て、独^{ドイツ}乙経営の下に成る停車場ハイテルパシャに至る。規模、大ならずと雖^{いえど}も、海陸の接統(能く)^よ[行外追加]出来、港としての位置、良好無比なり。蓋^{けだ}し、此地^{この}は、中央亜細亜^{ア ジ ア}バクダットと欧州とを連接するもの。後^{こう}来^{らい}の発達、可^{おも}思^{うべし}。君^{コンスタンチノープル} 府^{その}の近海は、極めて深く、大船の棧橋に横付けになる等、天与の良港なり。金角^{また}湾、亦、極めて深しと云う。次いで森岡氏と玉突^つをなす。

1907.09.30. 晴 月

独^{ひと}り、クランペラ及び土^{トル}耳^コ古街の一部を散歩す。居留地は、先^まず、稍^{やや}、奇麗なるも、土^{トル}耳^コ古街の不潔、臭^{おう}気、犬の多きこと等、真に嘔^{おう}気を催す程なりき。中川少佐、来着す。本夜、中村氏を招待す。

1907.10.01. 晴 火

午前十時、出発。中村氏の見送り受け、税関、^{その}其他、万事都合克^{よく}経過し、正午、露船にて出帆す。^{ママ}ポス
ポラス海峡の風景、絶美佳景、一去一來、送迎し、暇あらず。真に世界最勝景の地たるを知る。午後二
時、黒海に入る。海、極めて静なり。[改行]

^{トルコ}トルコ ^{コンスタンチノープル}コンスタンチノープル 君 府 [丸括弧]にては、午後十時頃、各戸、汚物を市街に捨て、群犬、^ま先ず之^{これ}を喰
らい、黎明、掃除人来て、之を奇麗にすと、^{しか}然れども、汚汁は、皆、街上敷石の間に入りて、^{あた}除く能わ
ざるが故に、臭気、^{はなは}甚^よだしく、余も魚料理の血及び臓腑を街上に放棄するもの等を見たること、数度。
^{もつ}以て、^{その}其不潔の一端を知るべし。

ページ：197

^{コンスタンチノープル}君 府 の犬糞は、之を乾かして、^{ママ}亜米利加に輸出し、柔革製造に使用すと云う。

1907.10.02. 晴 水

午後四時、船、オデッサに入る。港の結構、成る程、模範的にて、汽車との接続等の関係、大いに良
し。^{いししか}石坂・佐々木両氏に迎えられ、石坂君の宅に宿す。税関にては、^{その}其通過証あるにも不^{かかわらず}拘、底まで
検査を受けたり。入浴す。

1907.10.03. 晴 木

午前、^{いししか}石坂君と共に、市街を散歩し、アレキサンドル公園に至り、^つ次いで、馬車にて、(全)[行外追加]
市街を通過す。^{この}此地は不穩にて、夜間等は、外出は一定の地の外、^{ほか}危険なりと云う。現に、数日前、汽
車の一^{りょう}輛、焚かれたりと云えり。斬髪す。

1907.10.04. 晴 金

午前、ブールバールを散歩す。他、記事なし。

1907.10.05. 晴 土

午前、アルバムを買う。午後八時、出発。^{いししか}石坂中佐、佐々木書記生、停車場に来たる。

1907.10.06. 晴 日

午前九時、キエフ着。十一時半、出発。キエフの塔、立派なり。

1907.10.07. 晴 月

午前十時半モスクー着。到着時間の差にて、軍地氏在らず。^{すなわち}即、メトロポールに投宿。^{ただ}直ちに Reise Bureau に至り、切符を買う。午後、軍地氏来訪。^{すずめ}雀の岡及び物売場を見る。本日、鶴見・小野瀬両氏、同じく、メトロポールに投宿。不思議にも同行することとなれり。

ページ：198

1907.10.08. 少雨 火

午前、軍地氏来訪。鶴見・小野瀬両氏とロマノフ旧家・両博物館・戦勝記念寺を見、ペートル公園及び離宮を見物し、^つ次いで、横井氏を^と訪い、写真帖を買う。本夜、——[消去]氏に劇場に案内せらる。

1907.10.09. 水 曇

[最後の記入]

[この先記載なし]

ページ：199

[白紙]